

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第84集

馬場末遺跡

新川用広域河川改修に伴う西分増井遺跡群Ⅱ区発掘調査報告書

2004年2月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

馬場末遺跡

新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡群Ⅱ区発掘調査報告書

2004年2月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

この度、馬場末遺跡の発掘調査報告書を刊行することができました。当遺跡は、西分増井遺跡と並んで仁淀川左岸に広がる吾南平野を代表する遺跡として知られています。

今回の太用川と十田川の河川改修事業に伴う調査において、弥生時代中期末から古墳時代初め、さらに古代の遺構遺物が数多く検出されました。中国鏡や鉛製品の出土は、西分増井遺跡の青銅器類とともに弥生時代において当地域が重要な役割を果たしていたことを物語っています。また古代の大溝や瓦、多量の緑釉陶器の出土は隣接する大寺廃寺との関連が考えられるものであり、地域にとって新たな歴史の一項を得ることができました。同時に、当地が古代史上における高知平野西部の中心舞台であったことを改めて彷彿させるものです。

これまで高知平野の原始・古代史は、物部川流域の東部を中心に語られてきました。今回の調査成果は、東西地域の比較研究を可能とするものであり、今後の研究の進展にも寄与できるものだと思います。

吾南平野を潤してきた新川川とその支流を含む流域一帯は、大規模な河川工事によって大きく変貌を遂げつつあります。こうした中で、吾南平野に生きた先人によって刻まれた遺跡が明らかとなり記録されたことは、有意義なことだと思います。

先人の智慧・技・歓喜・苦悩などさまざまな営みの蔵された遺跡を調査し、そこからさまざまな情報を得て歴史を学ぶことは地域の歴史的現代を知り未来を正しく展望するためには不可欠なことだと思います。本報告書が、斯学の向上とともに地域史の豊かな復元にいささかなりとも貢献できればこの上ない喜びであります。

最後に、発掘作業に従事して下さった現場作業員のみなさまに厚くお礼申し上げます。また調査にあたって全面的な協力を頂いた(株)川村生コンクリート工業、高知県伊野土木事務所に対して、記して謝意を表します。

平成 16 年 2 月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所 長 島 内 靖

例 言

- 1 本書は、新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡群Ⅱ区調査委託業務による馬場末遺跡発掘調査報告書である。
- 2 馬場末遺跡は、高知県吾川郡春野町西分橋詰160、162、163、および西分成岡(B)4037他に所在する。
- 3 調査時点では、西分増井遺跡群Ⅱ区と称していたが、地元協議の結果、既存の馬場末遺跡の範囲を今次調査区にまで拡大し、西分増井遺跡とは区別して馬場末遺跡とした。
- 4 発掘調査は、高知県伊野土木事務所から委託を受けて(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 調査期間
ⅡA・B区：2001年10月1日～2002年3月8日 ⅡC・D区：2002年4月8日～同7月30日
- 6 調査面積
1560㎡(ⅡA区 610㎡ ⅡB区 500㎡ ⅡC区 200㎡ ⅡD区 250㎡)
- 7 調査体制
ⅡA、ⅡB区の調査：泉 幸代(財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター専門調査員)
ⅡC、ⅡD区の調査：出原恵三(同 調査第3班長)
- 8 本書の編集・執筆は出原が行い、山本純代(同非常勤職員)の協力を得た。
- 9 出土遺物については、下記の方々からご教示、ご指導を頂いた。記して謝意を表します。
木下尚子(熊本大学)、久保脇美朗(徳島県埋蔵文化財センター)、高倉洋彰(西南学院大学)、林部均(奈良県立橿原考古学研究所)、平尾政幸(京都市埋蔵文化財研究所)、池澤俊幸(高知県教育委員会)、松田直則(高知県埋蔵文化財センター)、吉成承三(同)
- 10 現場作業、整理作業は下記の方々に従事して頂いた。
現場作業 有藤充晴 上田善右 大崎一虎 大崎数恵 岡崎速男 岡田稔夫 小嶋美知子 川野孝典
国沢数代 国沢節子 久保壮司 酒井雅代 田代 勝 田村 明 田村美賛子 近沢恵美子
富本泰雄 富本紀恵 中村和夫 中山幸生 弘田 由 松本明美 矢野真弓
整理作業 松木富子 浜田雅代 山口知子 橋田美紀
- 11 出土遺物はⅡA・B区については「01-21HN」、ⅡC・D区については「02-2HN」を冠して、注記し、関連図面・写真とともに高知県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の歴史地理的環境.....	1
1 地理的環境.....	1
2 歴史的環境.....	2
第Ⅱ章 調査の概要.....	7
第Ⅲ章 調査の成果.....	9
1 II A北区の調査.....	9
2 II A南区の調査.....	17
3 II B区の調査.....	45
4 II C区の調査.....	79
第Ⅳ章 高知平野西部の古代土器.....	98
第Ⅴ章 まとめ.....	108

挿図目次

Fig.1 馬場末遺跡位置図.....	1
Fig.2 周辺の遺跡.....	3
Fig.3 調査区位置図(1).....	7
Fig.4 調査区位置図(2).....	8
Fig.5 II A区全体図.....	11・12
Fig.6 II A北区基本層準.....	13
Fig.7 SD1平面・エレベーション.....	13
Fig.8 II A北区SD1出土遺物.....	14
Fig.9 II A北区遺物包含層出土遺物(1).....	14
Fig.10 II A北区遺物包含層出土遺物(2).....	15
Fig.11 II A北区遺物包含層出土遺物(3).....	16
Fig.12 II A南区基本層準.....	17
Fig.13 II A南区SA1・SK1～3平面・セクション.....	18
Fig.14 II A南区遺構出土遺物.....	19
Fig.15 SX1平面・セクション及び出土遺物.....	21
Fig.16 SD2平面・エレベーション.....	22
Fig.17 SD2出土遺物(1).....	24
Fig.18 SD2出土遺物(2).....	25

Fig.19	SD2出土遺物 (3)	26
Fig.20	II A南区遺物包含層出土遺物 (1)	28
Fig.21	II A南区遺物包含層出土遺物 (2)	29
Fig.22	II A南区遺物包含層出土遺物 (3)	30
Fig.23	II A区出土鉄器	31
Fig.24	II B区全体図	46
Fig.25	II B区基本層準	47
Fig.26	SD1セクション	48
Fig.27	SD1床面出土遺物 (1)	50
Fig.28	SD1床面出土遺物 (2)	51
Fig.29	SD1下層出土遺物	52
Fig.30	SD1中層出土遺物	54
Fig.31	SD1上層・下層・床出土遺物	55
Fig.32	SD1上層・下層出土遺物	56
Fig.33	SD2出土遺物・SD4セクション・出土遺物	57
Fig.34	ST1・SB1・SK1平面・セクション及びST1・SK1出土遺物	58
Fig.35	SK2平面・セクション及び出土遺物	60
Fig.36	SK6～8平面・セクション及びSK6出土遺物	60
Fig.37	SK9～15平面・セクション及びSK9出土遺物	62
Fig.38	P1・P3・P7平面・セクション	63
Fig.39	P1・P2・P3・P7出土遺物	63
Fig.40	土器集中2・SX1・遺物包含層出土遺物	65
Fig.41	SX1平面・セクション	66
Fig.42	SD1出土懸垂鏡及び遺物包含層出土鉛製品	67
Fig.43	II B区出土鉄器類	68
Fig.44	II C・D区全体図	79
Fig.45	II C区西壁セクション	80
Fig.46	ST1・SB1平面・セクション	82
Fig.47	ST1・遺物包含層出土遺物	83
Fig.48	II D区基本層準・SK1平面・セクション	84
Fig.49	SK3・SK4出土遺物及びSK 2～4平面・セクション	85
Fig.50	SK5・SK6平面・セクション及び出土遺物	87
Fig.51	SK 7～9平面・セクション及びSK7・SK9出土遺物	89
Fig.52	土器集中1・土器集中2出土遺物	90
Fig.53	II D区遺物包含層出土遺物	91
Fig.54	P5・P34・P36及びII D区遺物包含層出土遺物	92
Fig.55	II C・D区出土鉄器	92
Fig.56	I期土器編年図	100
Fig.57	II～IV期土器編年図	101・102

写真図版

- PL1：調査前風景西から（ⅡA・C・D区）、同上北東から（ⅡB区）
PL2：ⅡA北区トレンチ北壁セクション（南から）、ⅡA南区北壁セクション（南から）
PL3：ⅡA北区SD1遺物出土状況（北から）、同上（東から）
PL4：ⅡA北区完掘状況（北西から）、同上（東から）
PL5：ⅡA南区SD2（西から）、同上（南から）
PL6：ⅡA南区SD2（東から）、ⅡA南区完掘状況（北から）
PL7：ⅡA南区遺物出土状況
PL8：ⅡB区SD1（北東から）、同上（南から）
PL9：ⅡB区SD1北壁セクション、同上SD2（北から）
PL10：ⅡB区SD4（南東から）、同上（南から）
PL11：ⅡB区SK9（西から）、同上SK13炭化物出土状況
PL12：ⅡB区北壁セクション（南から）、同上
PL13：ⅡB区完掘状況（上層・東から）、同上（下層・東から）
PL14：ⅡB区各遺構・遺物出土状況
PL15：ⅡB区SD1遺物出土状況
PL16：ⅡB区出土遺物・検出遺構
PL17：ⅡC区上層完掘状況（北から）、ⅡC区ST1（北から）
PL18：ⅡC区ST1（北から）、同上（東から）
PL19：ⅡD区SK1（南から）、ⅡD区SK4遺物出土状況（東から）
PL20：ⅡD区（西）完掘状況（南から）、ⅡD区（北東から）
PL21：ⅡD区（東）上層完掘状況（北から）、同上下層完掘状況（北から）
PL22：ⅡD区（東）上層完掘状況（南から）、同上下層（南から）
PL23：ⅡD区（西）土器集中1、同上SK7遺物出土状況
PL24：ⅡC・D区出土遺物・検出遺構
PL25：ⅡA区出土遺物
PL26：ⅡA・B区出土遺物
PL27：ⅡA・B区出土緑釉陶器、同上（裏面）
PL28：ⅡA区出土黒色土器、同上（裏面）
PL29：ⅡA・B区出土瓦、同上（裏面）
PL30：ⅡB・D区出土遺物
PL31：ⅡB・C区出土遺物
PL32：ⅡD区出土遺物
PL33：ⅡB区出土の懸垂鏡と鉛製品

第 I 章 遺跡周辺の歴史地理的環境

1 地理的環境

馬場末遺跡のある吾川郡春野町は、高知県中央部に広がる高知平野の西部に位置し一級河川仁淀川の左岸に展開している。春野町の地形は、高知市と境を接する北部山地、中央部の平野部、そして南部丘陵と大きく三つに分けることができる。北部山地は不入山脈と呼ばれ南北交通の障害となってきたところであるが、地質学上著名な中央構造線が走っており南部の四万十帯と北部の秩父帯とを隔している。中央の平野部は吾南平野とも呼ばれ、旧仁淀川によって形成された沖積平野であり、平野中央部を流れる新川川がその名残をとどめている。平野部の微地形は自然堤防や後背湿地、残丘などからなっており、南部や北部の山裾には小扇状地や侵食谷が随所に形成され複雑な地形形成が見られる。

馬場末遺跡は根木谷山から派生した山塊の東側に広がる自然堤防上に立地しており標高3m前後を測る。遺跡の北側は東根木谷に繋がる深い後背湿地の形成されていることが試掘調査によって確認されている。当遺跡は、1976年古式土師器が出土したことから埋蔵文化財包蔵地とされてきたところであり、その範囲は県道高知春野線を挟んだ3万㎡程が想定されていた。しかしながら今次調査によってその範囲が太用川にまで広がることを確認され、5万㎡前後の広がりを持つことが明らかとなった。太用川を隔てて東には西分増井遺跡があり、西には大寺廃寺跡が所在するがこれらは一連のまとまりを持った遺跡として捉えることができる。

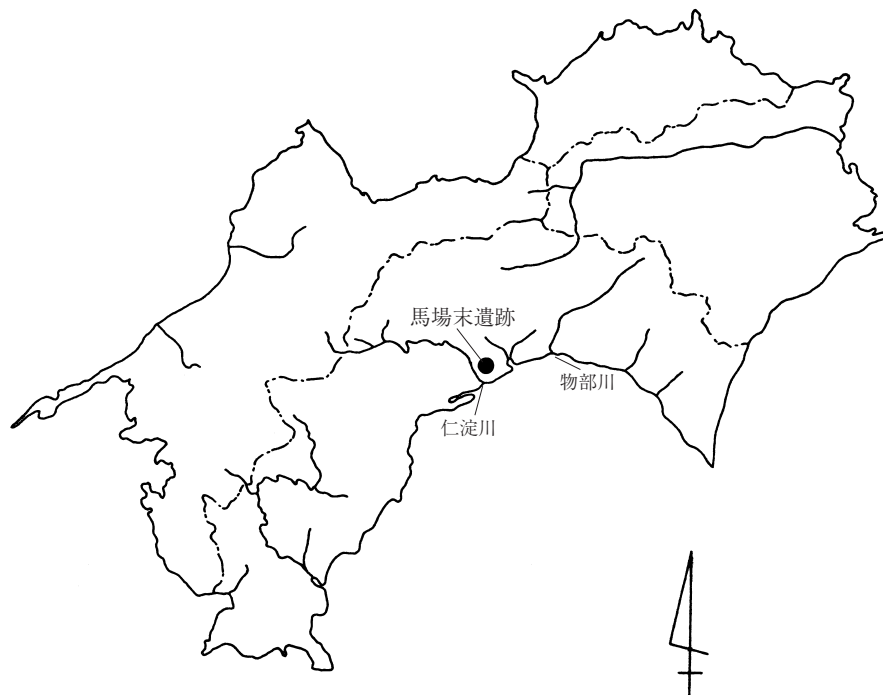


Fig. 1 馬場末遺跡 位置図

2 歴史的環境

吾南平野における人々の営みは、現状では縄文時代後期にまで遡ることができる。山根遺跡から後期前葉の縁帯文土器成立期の松ノ木式土器が出土している⁽¹⁾。1989年に実施された西分増井遺跡からは後期中葉に比定できる片粕式土器や広瀬上式土器が比較的まとまって出土しており、石器類も石鏃、打製石斧、磨製石斧、石錐、石棒などが出土している⁽²⁾。また当該期の土坑9基も検出されており、平野部の遺跡としては豊富な内容を有している。土器の中には北白川上層式や一乗寺K式土器も散見されるなどこれまでほとんど解っていなかった近畿との関係にも触れることのできる資料として重要な位置を占めている。南四国においても縄文後期から平野部への集落の進出が考えられるが、高知平野においては田村遺跡や柳田遺跡などその確認例はまだ僅少であり、西分増井遺跡や周辺部の今後の動向が注目されよう。晩期の遺跡は、仁淀川右岸においては居徳遺跡⁽³⁾や北高田遺跡⁽⁴⁾などが知られるようになってきたが、当地域においては新川川下流の北川内遺跡⁽⁵⁾で突帯文以前の土器が、山根遺跡から入田B式土器が僅かに出土しているのみである。

弥生時代の遺跡は、仁ノ遺跡⁽⁶⁾、山根遺跡⁽⁷⁾、西分増井遺跡⁽²⁾を挙げることができる。仁ノ遺跡からは包含層出土ではあるが前期前葉の土器が一定量出土している。当該期の土器の出土は仁淀川右岸の居徳遺跡と仁ノ遺跡のみである。しかも居徳遺跡では縄文晩期土器と共存しているのに対して、当遺跡は二重構造をなさずに遠賀川式土器のみで構成されている。このような遺跡は高知平野東部の田村遺跡を除いては見られない現象である。山根遺跡からは前期中葉から末の土器と前期末の竪穴住居が貯蔵穴とともに検出されている。西分増井遺跡からは、前期中葉の竪穴住居1棟と前期末の竪穴住居3棟、前期中葉～末の土坑16基が確認されている。前期中葉のST15は、直径3.6mの小型住居であるがいわゆる松菊里型住居に属するものである。田村遺跡では前期初頭に5棟の松菊里型住居が知られている⁽⁸⁾が、当遺跡例はそれに次ぐ検出例である。北部の山地を越えた高知市内の前期集落址である柳田遺跡⁽⁹⁾や鴨田遺跡⁽¹⁰⁾では、遠賀川式土器に較べて晩期に系譜を持つ南四国型甕⁽¹¹⁾が卓越しているのに対して、ここでは遠賀川式土器が主流をなしている。また居徳遺跡や高知市内の諸遺跡が晩期から継続する遺跡であるのに対して、当地域においては継続性が見られないという特徴を挙げることができよう。隣接諸地域とは異なった弥生文化の成立期の有り様を示している。

中期は、前・中葉においては山根遺跡で少量の土器が出土しているのみであるが、凹線文土器の出

Tab. 1 馬場末遺跡周辺の遺跡一覧

1	西分増井遺跡	弥生～古代	11	二ノ城跡	中世	21	巖島遺跡	古代～中世
2	馬場末遺跡	弥生～中世	12	西畑城跡	中世	22	八幡宮西ノ城跡	中世
3	太用遺跡	弥生～室町	13	西畑遺跡	弥生～古墳	23	奥谷遺跡	弥生
4	大寺廃寺跡	弥生～奈良	14	フケ遺跡	弥生	24	吉良屋敷跡	弥生
5	山根遺跡	縄文～中世	15	大上遺跡	古代	25	吉良城跡	弥生・中世
6	和田・片廻遺跡	縄文～中世	16	二ノ堀遺跡	弥生～中世	26	後田遺跡	弥生～中世
7	秋山城跡	中世	17	森山城跡	中世	27	王子遺跡	縄文～中世
8	小野遺跡	中世	18	天皇遺跡	中世	28	大小路遺跡	弥生～中世
9	仁ノ遺跡	弥生～古代	19	西ノ芝遺跡	弥生	29	西谷遺跡	中世
10	寺見ヶ谷遺跡	古代～中世	20	古市遺跡	中世	30	木塚城跡	中世

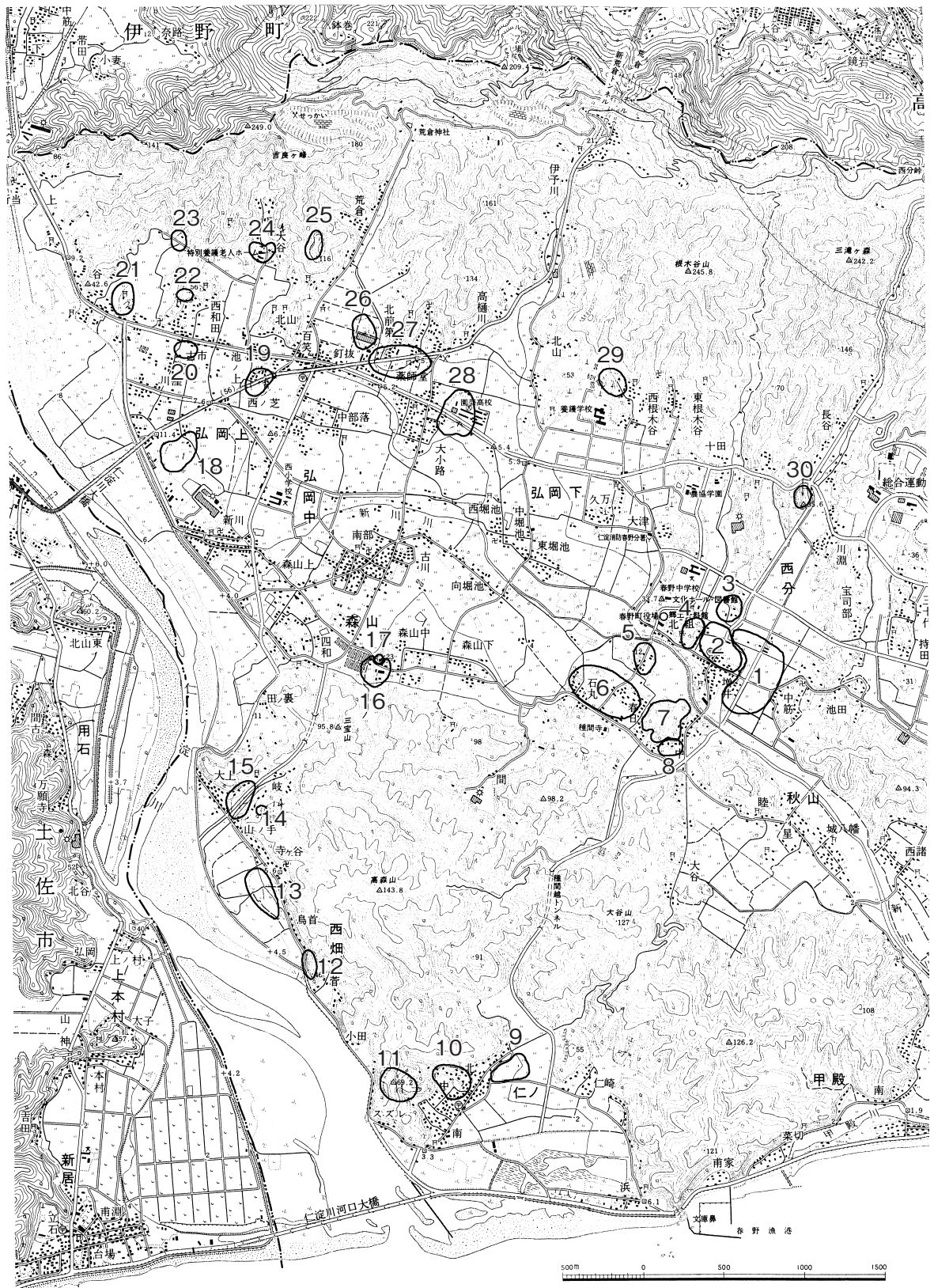


Fig. 2 周辺の遺跡

現する後葉になると木塚城址の山腹斜面から遺構に伴って一定量の土器が出土している。伊野町のバーガ森北斜面遺跡⁽¹²⁾や高知市の朝倉遺跡などでも同様の遺跡が認められる。当該期の遺跡はいわゆる高地性集落が営まれる傾向にある。

後期に至ると再び平野部に集落が営まれるようになる。馬場末遺跡西方の東江曲遺跡⁽¹³⁾では、後期中葉の竪穴住居4棟、土坑3基、溝2条が検出されており、このうち直径9mの大型住居ST1や溝SD3からは大量の一括土器が出土している。西分増井遺跡の2002年調査では後期前葉に属する竪穴住居3棟が確認されており、そのうちの一つST9の床面からは中広形銅矛の破碎片が3点出土している。焼土や炭化物を伴う竪穴状遺構からは、広形銅戈片や鉄鏃・鉄片が、包含層からではあるが銅鐸の鈕細片や中広形銅矛の袋部、舶載鏡細片が出土しており注目を集めている⁽¹⁴⁾。これほど多くの種類の青銅器片がまとまって出土した例は全国的にも知られていない。後期の生活面からは鍛冶炉の可能性が高い焼土・炭化物の広がりが見られ大量の鉄片や砥石、台石、叩き石などが出土している。このような状況は後期から古墳時代前期初頭まで続く。当該期に鉄器の製作が行われていたことは確実である。青銅器片も青銅器製作のための材料として位置付けることができよう。村上恭通氏は、高知平野出土の後期の鉄器について独自の地域性や九州との関連のあることを指摘している⁽¹⁵⁾。製作址の検出は、鉄器製作過程において生じた未製品や破片の分析とともに、高知平野における鉄器生産を具体的に追究することを可能にするものである。

後期前葉の各竪穴住居床面からは一括性の高い土器が出土している。これまで南四国の土器編年は、高知平野東部で編まれており、西部については地域性の強い土器様式の存在が指摘されていながらも良好な資料に欠けていた。当該期東部では無文化が進み、伝統的な南四国型甕が急速に消滅していくのに対して、西部では櫛描文や浮文などで加飾された土器や南四国型甕の盛行など具体的にその違いを明らかにし得たのである。

次に周辺部の青銅器の出土を見ると、仁淀川左岸の伊野町八田では細形銅剣1本、同町天神溝田遺跡では中細形銅剣と中広形銅戈が各1本出土しており⁽¹⁶⁾、右岸の天崎遺跡⁽¹⁷⁾では中広形銅矛4本、万福寺遺跡からは中広形と広形銅矛が各1本出土している⁽¹⁸⁾。春野町では西畑フケ遺跡から中広形銅矛1本と中広形か広形と考えられる銅矛袋部1本の出土が報告されている⁽¹⁸⁾。後期になると南四国の青銅祭器は、西部を中心に銅矛が東部を中心に銅鐸があたかも対峙するような特徴的な分布を示し、高知平野東部で両者の混在地帯を形成している⁽¹⁹⁾。かかる分布についてはさまざまな解釈がなされてきた。春野町は銅矛分布圏に属するが、先に挙げた銅鐸の出土は、細片ではあるが銅鐸分布圏の西への広がりを示すものである。

後期末から古墳時代初頭にかけては全県下的に集落遺跡が飛躍的に増加し数多くの竪穴住居が出現する。当地域においては西分増井遺跡が継続して営まれ、1989年の調査では当該期の竪穴住居が11棟検出され、2001～2002年の調査では新たに10棟が検出されている。1989年調査のST8からは在地産の土器とともに河内産の庄内式土器や吉備型甕、東阿波型土器など他地域からの搬入品が複数出土し、いわゆる小型精製三種もセットで出土している⁽²⁾。3地域からの搬入品が一つの遺跡から出土した例は小籠遺跡と当遺跡のみである。他地域との交流を示す資料であるとともに情報の集中は地域の拠点的性格を帯びた集落として位置付けることができよう。またST5からは舶載鏡の細片も1点出土している。2001～2002年調査では先述のように後期前葉から継続して鉄器の製作が行わ

れている。また包含層からではあるが、南四国初の小型仿製鏡も一面出土している⁽¹⁴⁾。西分増井遺跡は当該期に最盛期を迎えるが、竪穴住居の分布範囲から集落の広さを推定すると10万㎡近くに及ぶ。また墓制では、南四国では数少ない方形周溝墓1基が集落の中心部に営まれる。

高知平野においては、弥生前期から南四国最大の拠点集落として君臨してきた田村遺跡が後期中葉を最後に突然消滅し、その後周辺部の中・小規模の集落址が出現するが、現状では西分増井遺跡はその中で最大の規模を有するものである。

当馬場末遺跡においても、遺構の検出はなされていないが在り土器とともに河内産の庄内式土器が出土しており、古式土師器の編年では最古段階のひびのき3式土器に続くものとして、馬場末式土器の型式設定が岡本健児氏によってなされている⁽²⁰⁾。

しかしながら古墳時代前期初頭を過ぎると、当遺跡を含めて周辺部から一斉に遺跡が消えてしまう。僅かに西分増井遺跡で竪穴住居が1棟、南浦遺跡⁽²¹⁾や王子遺跡⁽²²⁾において水辺の祭祀関連と考えられる土師器が出土しているのみである。古墳は後期古墳も含めて明確にすることはできない。『春野町史』⁽²³⁾によれば、唯一、弘岡中横手に7世紀代の小円墳が存在し須恵器杯が出土したとの記載があるのみである。一方、7世紀代には馬場末遺跡に接して大寺廃寺が出現する。発掘調査がなされていないために詳細は不明であるが、周辺の畑から百済系の軒丸瓦が出土している。南四国では数少ない白鳳期の瓦である。馬場末遺跡北側の丘陵の太用遺跡は窯跡である可能性が強く、大寺関連の窯を推定することもできる。律令期に入ると当地域は吾川郡仲村郷に編入されている。西分増井遺跡からは8世紀代の土坑が多く検出されており須恵器・土師器の一括資料が出土している⁽²⁴⁾。以上のように当地域は、古墳時代の遺跡は僅少なから弥生時代、古代を通して仁淀川左岸に広がる吾南平野の中心舞台として位置付けることができる。

註

- (1) 岡本健児・広田典夫『山根・石屋敷遺跡』高知県春野町教育委員会 1976年
- (2) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会 1990年
- (3) 曾我貴行・藤方正治・佐竹寛・下村裕『居徳遺跡群Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
曾我貴行・藤方正治・佐竹寛・下村裕『居徳遺跡群Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年
- (4) 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳『北高田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- (5) 小嶋満博『北川内遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (6) 松村信博『仁ノ遺跡』高知県春野町教育委員会 2003年
- (7) 岡本健児・宅間一之・山本哲也『山根遺跡の発掘』高知県春野町教育委員会 1981年
- (8) 出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻3号考古学研究会 1987年
- (9) 森田尚宏・吉成承三・藤方正治・松村信博『柳田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (10) 田上浩・武吉眞裕『鴨部遺跡』高知市教育委員会 2002年
- (11) 出原恵三「<南四国型>甕の成立と背景」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003年
- (12) 伊藤強『バーガ森北斜面遺跡Ⅱ』高知県伊野町教育委員会 2001年
- (13) 出原恵三・小嶋満博『東江曲遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003年
- (14) (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『西分増井遺跡群』記者発表および現地説明会資料 2002年
- (15) 村上恭通「土佐における弥生時代鉄製品の諸問題」『犬飼徹夫先生古稀記念論集南四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会 2002年

- (16) 岡本健児 「高知県発見の銅剣・銅戈・石剣について」『高知の研究』1 地質考古編 清文堂 1983 年
- (17) 山本哲也・松村信博・田坂京子・下村裕・久家隆芳 『天崎遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001 年
- (18) 岡本健児 「高知県発見の銅矛について」前掲 (15)
- (19) 出原恵三 「弥生から古墳へー前期古墳空白地域の動向ー」『考古学研究』第 40 巻第 2 号 考古学研究会 1893 年
- (20) 岡本健児 「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下 1982 年
- (21) 江戸秀輝 『南浦遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993 年
- (22) 山本哲也・曾我貴行・江戸秀輝 『王子・西ノ芝遺跡の調査』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992 年
- (23) 春野町 『春野町史』1976 年
- (24) 出原恵三・山本純代 『西分増井遺跡 I』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003 年

第Ⅱ章 調査の概要

太用川右岸の調査区である。当初西分増井遺跡群Ⅱ区として位置付け調査を開始したが、現地での協議の結果、調査区の西方に所在する既存の馬場末遺跡の範囲をⅡ区にまで拡大し、太用川を境に東を西分増井遺跡、西を馬場末遺跡と呼称することとなった。したがって本調査区は馬場末遺跡

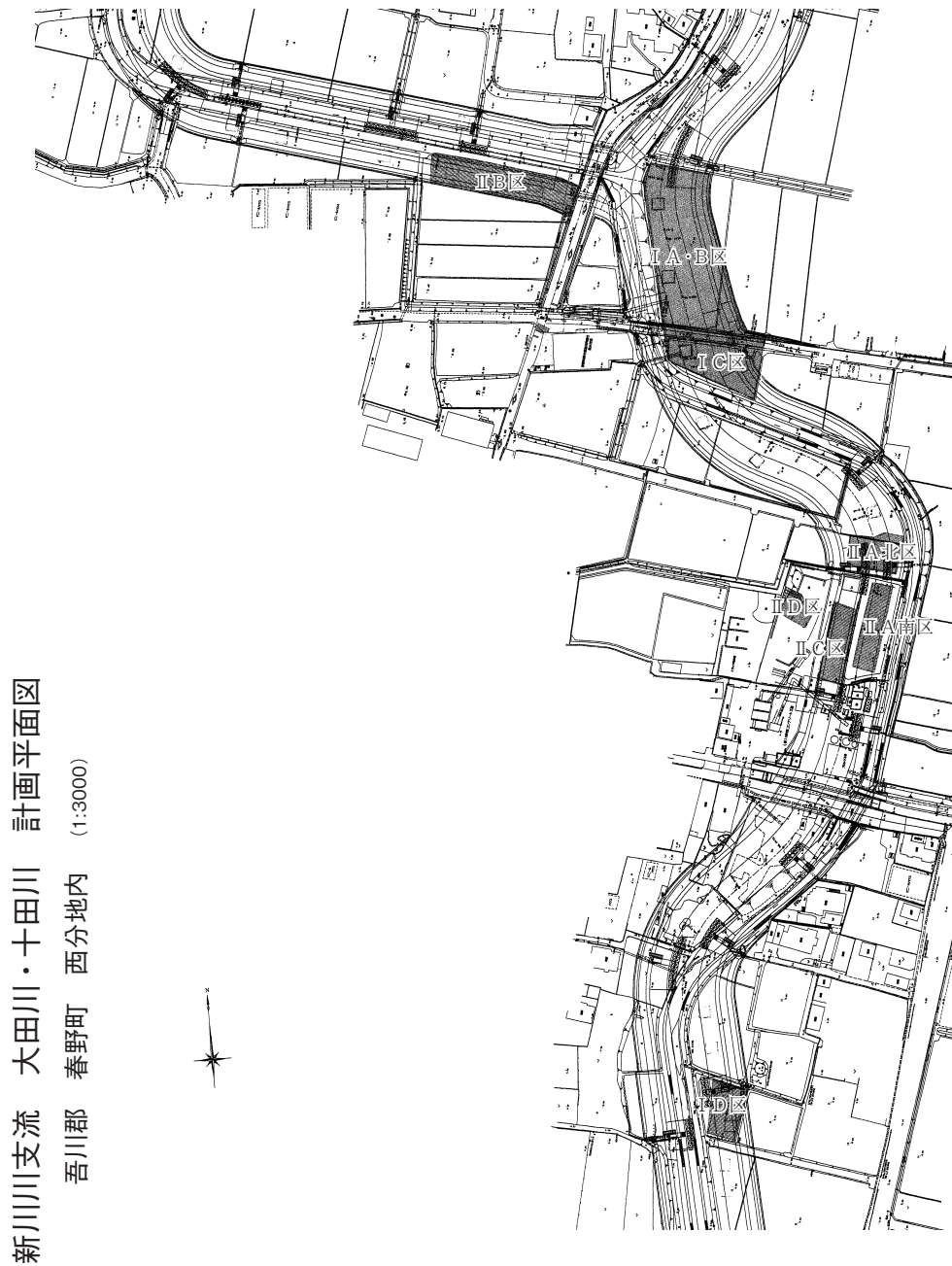


Fig. 3 調査区 位置図(1)

として報告する。調査区は4区からなっており、各調査区の名称についてはI区との関連からII A区、II B区、II C区、II D区と呼称することとした。

II A・C・D区は、1989年調査区の対岸に位置し、II A区は水路を挟んで北と南に調査区が分かれる。II B区は太用川に合流する十田川右岸の東西に長い調査区である。各調査区の面積や調査期間については、『西分増井遺跡 I』(2003年)に掲載している。

II A区は、南北に長い調査区で、北区と南区とに分かれる。南北区共に太用川側に傾斜する斜面から古代の土器が多く出土しており、南区は西寄りの平場や斜面上部から多くのピットや3基の土坑を検出している。II C区からは古墳時代前期初頭の竪穴住居1棟、II D区からは弥生時代後期前葉を中心とする土坑8基が検出されている。II B区は、古代の大溝や弥生後期末から古墳時代の遺構が確認された。今次調査結果によって、太用川右岸にも弥生時代から古代の遺構の広がることが明らかとなった。古代遺構・遺物についてはII区の西方300mに所在する大寺廃寺との関連が考えられ、太用川流域は西分増井遺跡、馬場末遺跡、大寺廃寺など約20万㎡を測る遺跡群を擁する。

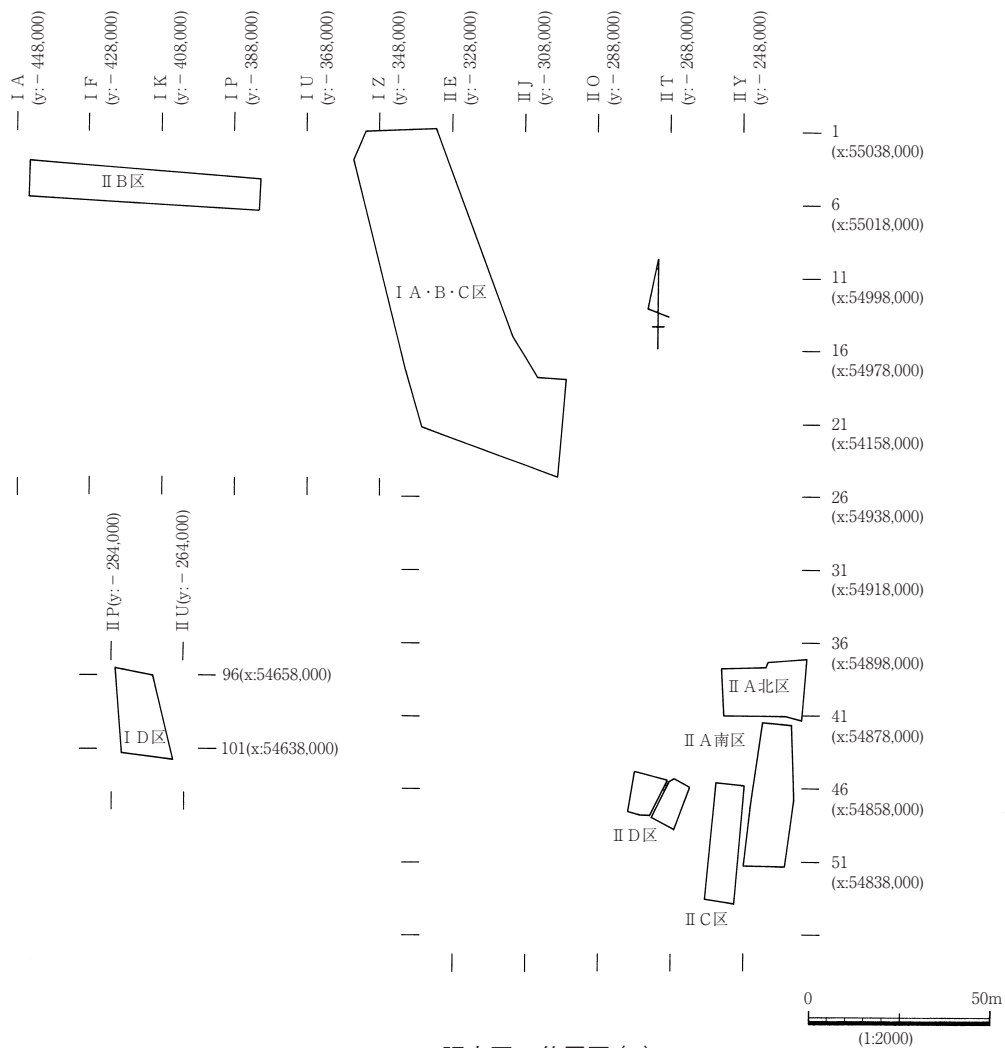


Fig. 4 調査区 位置図(2)

第Ⅲ章 調査の成果

1 II A北区

(1) 基本層準 (Fig.6)

1m前後の厚さの客土を除くと、黄色シルト層(Ⅲ層)の面が広がり、太用川岸に近い調査区東部に遺物包含層が見られた。図示したように調査区南東端部にトレンチを設定し堆積状況を観察した。

I層：黄褐色シルト層で、東(太用川)に向かって傾斜している。上面に古代の遺物を少量含んでいる。

II層：暗褐色シルト層で東に傾斜している。層厚20～40cmを測る。炭化物と古代の土器を多く含んでおり、古代の遺物包含層を形成している。更に厚さを増して東に傾斜堆積するが、護岸保護のためにこれ以上掘削することができなかった。

III層：灰黄褐色シルト層で東に傾斜している。東端で層厚60cmを測る。遺物はほとんど含まない。

(2) 検出遺構と遺物

① SD1 (Fig.7・8)

調査区東部の斜面部で検出した東西方向に延びる溝状の落ち込みである。確認延長4.5m、幅は50～60cm、深さ20～30cmを測るが、東半分の南壁の肩は明確に捉えることができなかった。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト層である。埋土中や溝の肩には拳大から人頭大の河原石が見られる。

遺物は、土師器杯(1～7)、黒色土器碗(8・9)、土師器甕(10・11)、布目圧痕のある平瓦細片が出土している。土師器杯はいわゆる回転台成形で底部ヘラ切りによるものである。7は貼付高台を有する。黒色土器は2点とも搬入品で、両者とも外面に赤彩が施されている。

② 遺物包含層出土の遺物 (Fig.9～11)

供膳形態では土師器杯(12～30)・皿(31～34)・碗(51～54)、黒色土器碗(55～66)、須恵器杯(35～40・42)・蓋(41・43・44)、緑釉皿(50)・碗(47)、灰釉皿(46)・碗(45・48・49)が見られる。

土師器杯は、すべて回転台成形、ヘラ切り、24はベタ高台、26・29は輪高台を有する。24～26、29は外面には回転ナデ調整痕が顕著に見られる。24は、碗の可能性もある。外面は激しく煤けている。土師器碗は52が円盤状高台、53・54は輪高台を有し、52・54は回転ナデ調整痕が顕著である。須恵器は各器種ともに精選された胎土が用いられており、内外面ともに丁寧な横ナデ調整が施されている。蓋41は環状の摘みを有する。土師器杯・皿類と須恵器のそれとの比率はおおよそ10:1で前者が圧倒的に多い。

緑釉はすべて陶胎である。50の外底は糸切り+削り+ミガキが施され、内面にも丁寧なヘラミガキがなされている。畳付は削ってからナデている。洛北産9世紀中葉～後半に属する。灰釉皿46は口縁部が僅かに肥厚している。碗45は内底を蛇の目状に施釉、48はしっかりした削り出し高台を有

し置付は丸味を帯びる。見込に赤彩が施されている。49は猿投窯の産で、施釉痕跡は認められるが、釉薬が融けていない。これらの灰釉は、9世紀後半～10世紀初に属する。

黒色土器はすべてA類に属するもので、55は口縁部内面に沈線を有する。高台には多くのバリエーションが認められる。微隆起帯状の高台(59)、小さな断面三角形高台(60)、やや大きな断面三角形高台(61)、輪高台(62～66)である。これらのうち4点(62～65)の外面には赤彩が施されている。これらの黒色土器は胎土から見てすべて搬入品である。

煮沸形態は甕(67～77)、羽釜(78)、甑の把手(79)が見られる。図示し得なかったものも含めて、口縁部点数から両者の出土数を見ると甕が57点、羽釜が2点である。甕は、形態的には口縁部が「く」字状に屈曲するものが圧倒的に多いが、緩やかに外反するタイプ(77)、直口するもの(67)が見られるが後者は擬口縁の可能性もある。胎土は、大きく2種類に分かれる。すなわち胎土①は石英・長石・角閃石を多く含み茶褐色に発色する。金雲母を含むものと含まないものがある。胎土②はチャートを多く含み橙～灰褐色に発色する。胎土①は69～75、胎土②は67・68・76・77が該当する。胎土①の調整は口縁部内外面横ハケ+横ナデ、胴部外面縦ハケ、内面横ハケを基調とするものが多いが、胎土②には胴部外面横ハケを施す例が目立つ。羽釜78は胎土①である。

この他に、製塩土器(80)、土錘(81～85)、石錘(86)も出土している。製塩土器は内面に布目圧痕が見られる。土錘は土師器(81～83・85)と須恵器(84)があり、前者は細長く5g未満の軽量のもの(81)と10～23g程のもの(82・83・85)がある。86は打ち欠き石錘で304g、石材は砂岩である。

II A北区出土の土器は、後述するようにIV期、9世紀後半から10世紀初めの比較的まとまりのある時期に求めることができる。

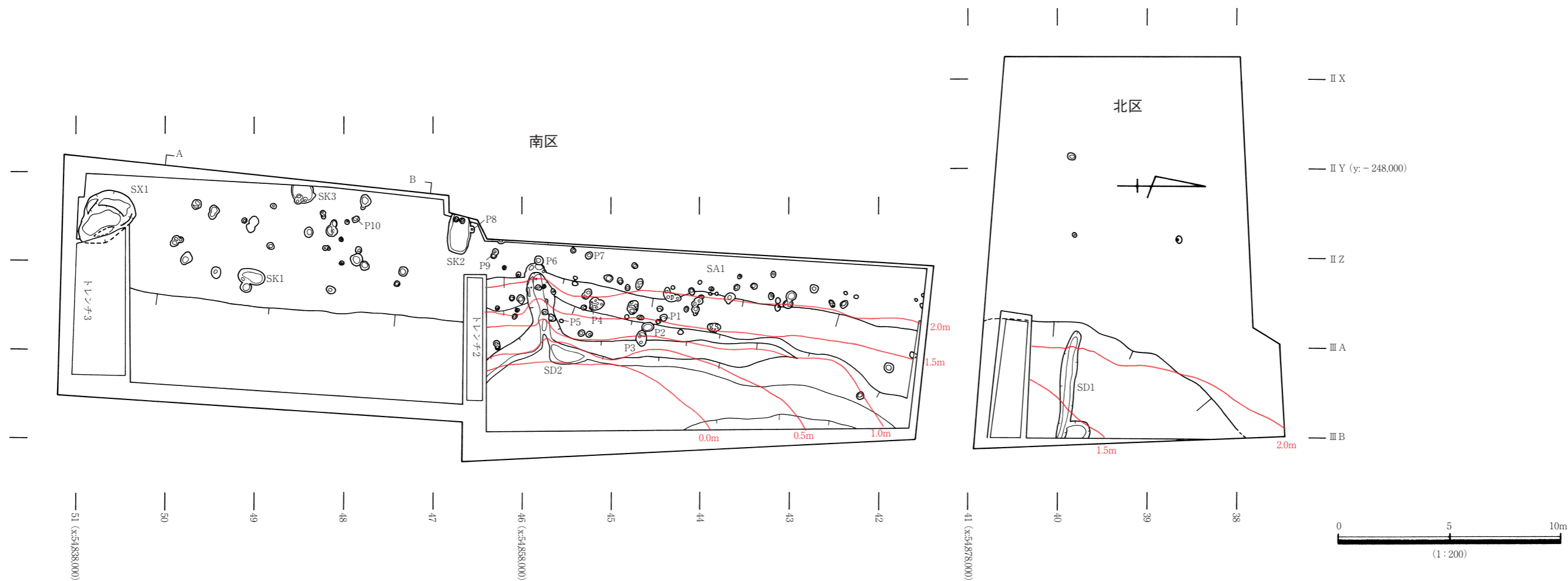


Fig.5 II A区 全体図

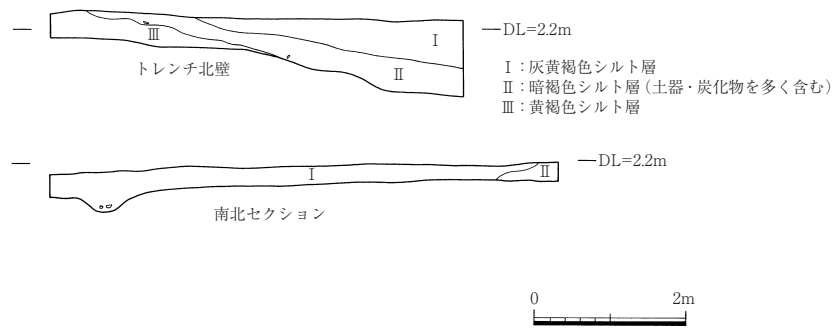


Fig. 6 II A北区 基本層準

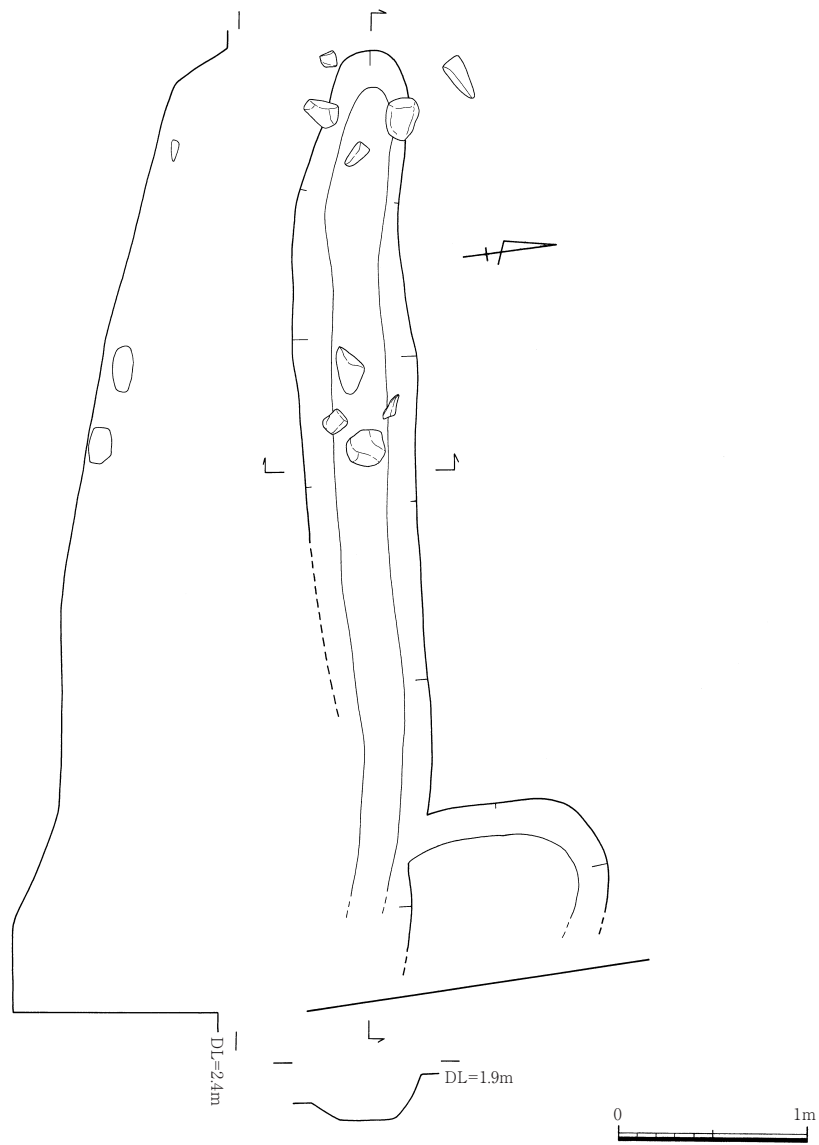


Fig. 7 SD1 平面・エレベーション

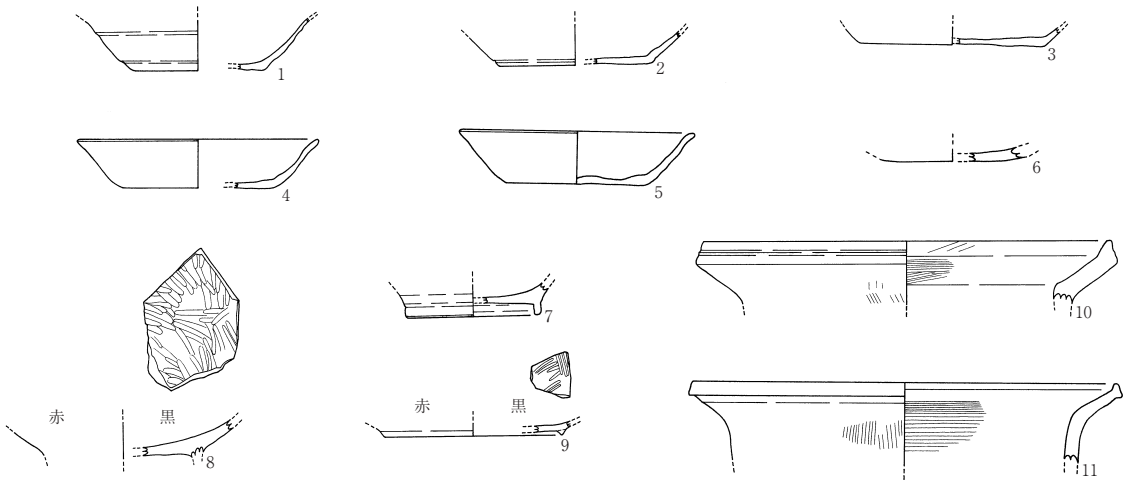


Fig. 8 II A北区 SD1 出土遺物

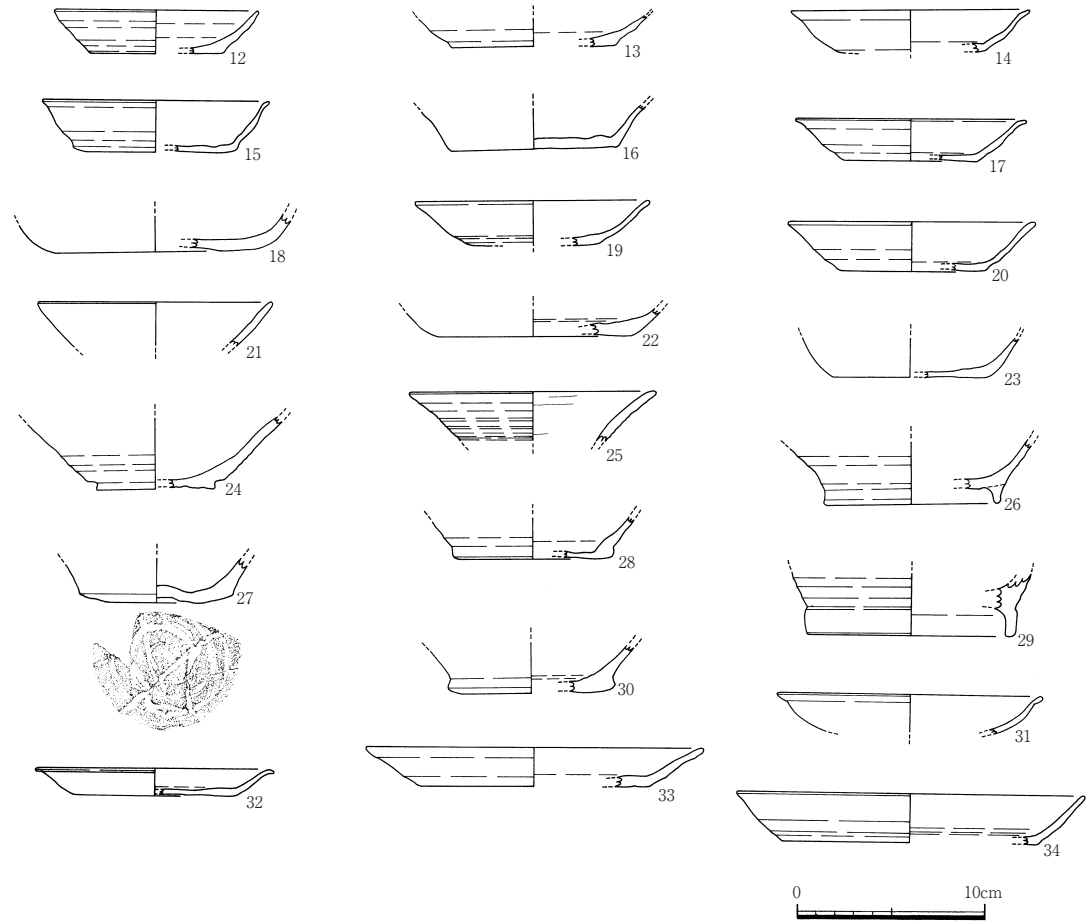


Fig. 9 II A北区 遺物包含層出土遺物(1)

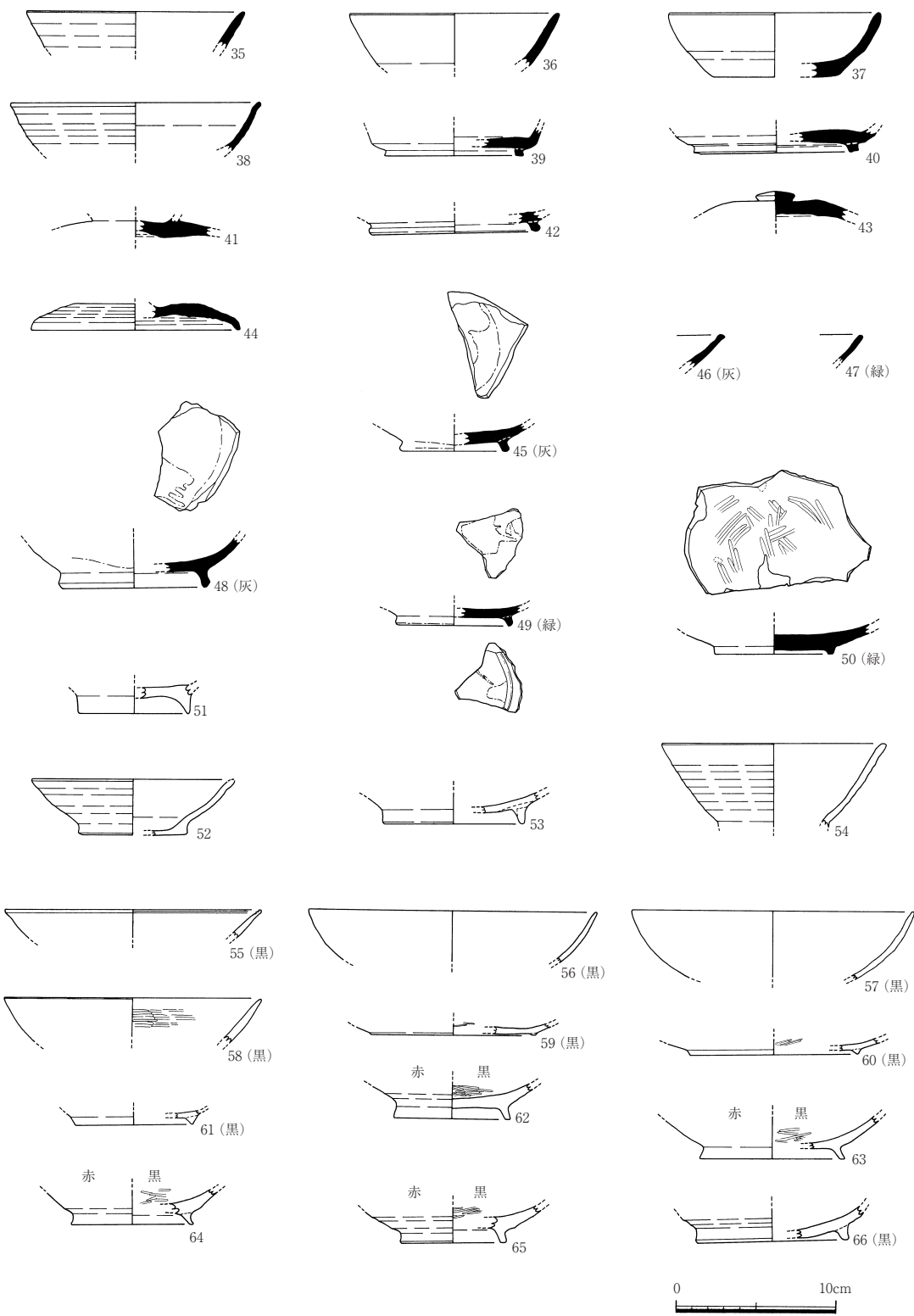


Fig.10 II A北区 遺物包含層出土遺物 (2)

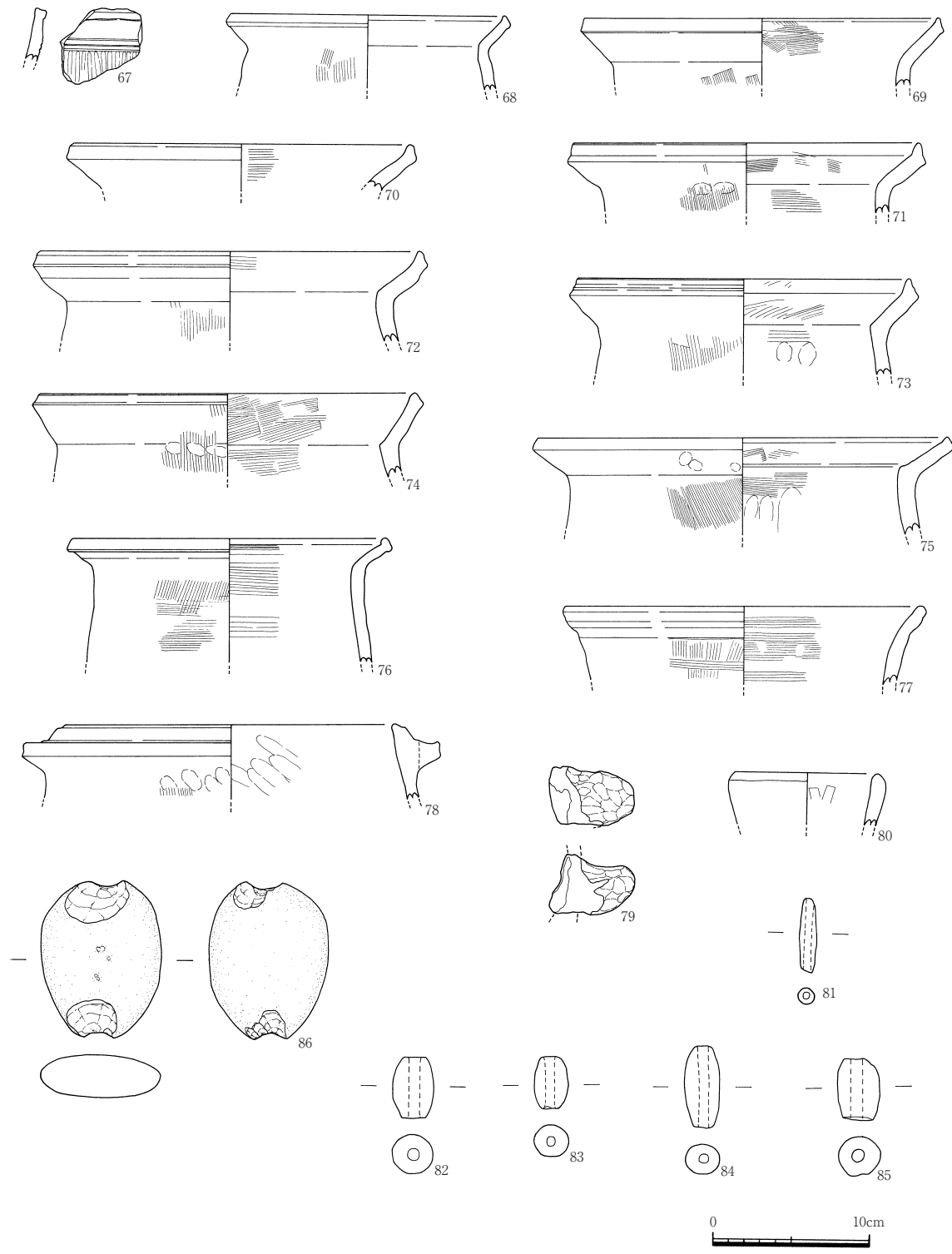


Fig.11 II A北区 遺物包含層出土遺物(3)

2 II A南区の調査

(1) 基本層準 (Fig.12)

調査区の西壁、北壁、南壁と調査区の中央部分に設けたトレンチ2で堆積状況の観察を行った。

① 西壁セクション

IV層：黄褐色シルト

III層：褐色砂～シルト、古代の遺物包含層で、層厚は5～25cmである。

II層：褐色シルトに暗灰黄色粘土のブロックが入る。古代・中世の遺物包含層で、層厚は5～25cmである。

I層：耕作土。

② 北壁セクション

北区と同様に太用川に向かって旧地形が傾斜している。

IX層：黄色シルトで北区のIII層に対応する。

VIII層：褐色シルトで層厚10cmを測る。VII層に切られている。古代の遺構検出面である。

VII層：褐色砂～シルトで層厚は10cm前後である。古代の遺物包含層を形成する。西壁セクションのIII層に対応する。

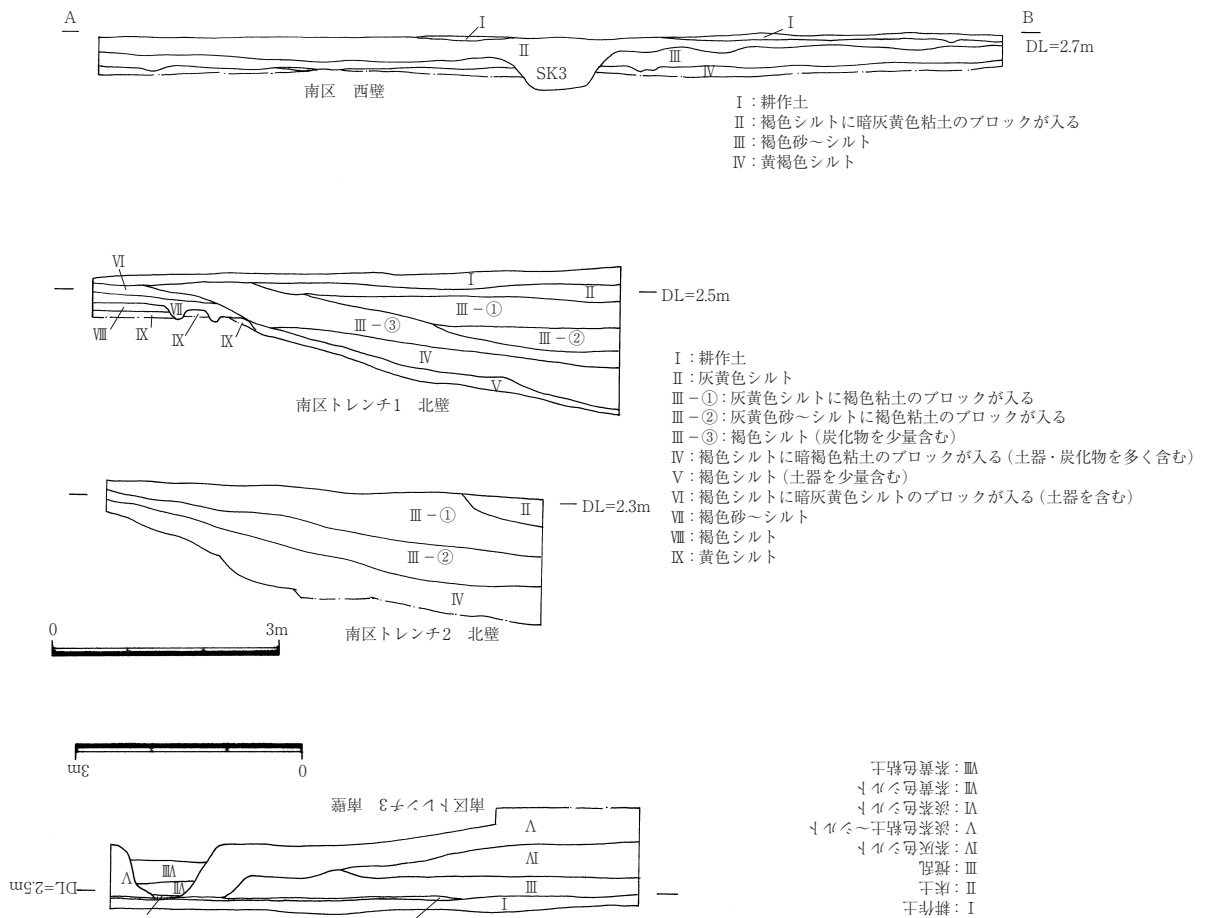


Fig.12 II A南区 基本層準

Ⅵ層：褐色シルトに暗灰黄色シルト～粘土のブロックが入る。西壁のⅡ層に対応する。層厚は10～20cmで、Ⅲ-③層に切られている。

Ⅴ層：斜面部に堆積する。褐色シルト層で、層厚は20cm以上を測る。古代の土器を少量含んでいる。

Ⅳ層：褐色シルトに暗褐色粘土のブロックが入る。川側に向かって層厚を増し、最大50cmを測る。大量の炭化物・古代の遺物を含む。Ⅶ層と同じ層準であると考えられる。

Ⅲ-③層：褐色シルトでⅥ・Ⅶ層を切っている。層厚15～50cmを測る。炭化物を含んでいる。(中世以降の堆積である)

Ⅲ-②層：暗灰黄色砂～シルトに褐色粘土のブロックが入る。層厚10～20cmを測る。

Ⅲ-①層：灰黄色シルトに褐色粘土のブロックが入る。層厚40cm前後を測る。

Ⅱ層：灰黄色シルトで、層厚10～20cmを測る。

Ⅰ層：耕作土である。

③ トレンチ2北壁

北壁セクションと同様の堆積をしている。

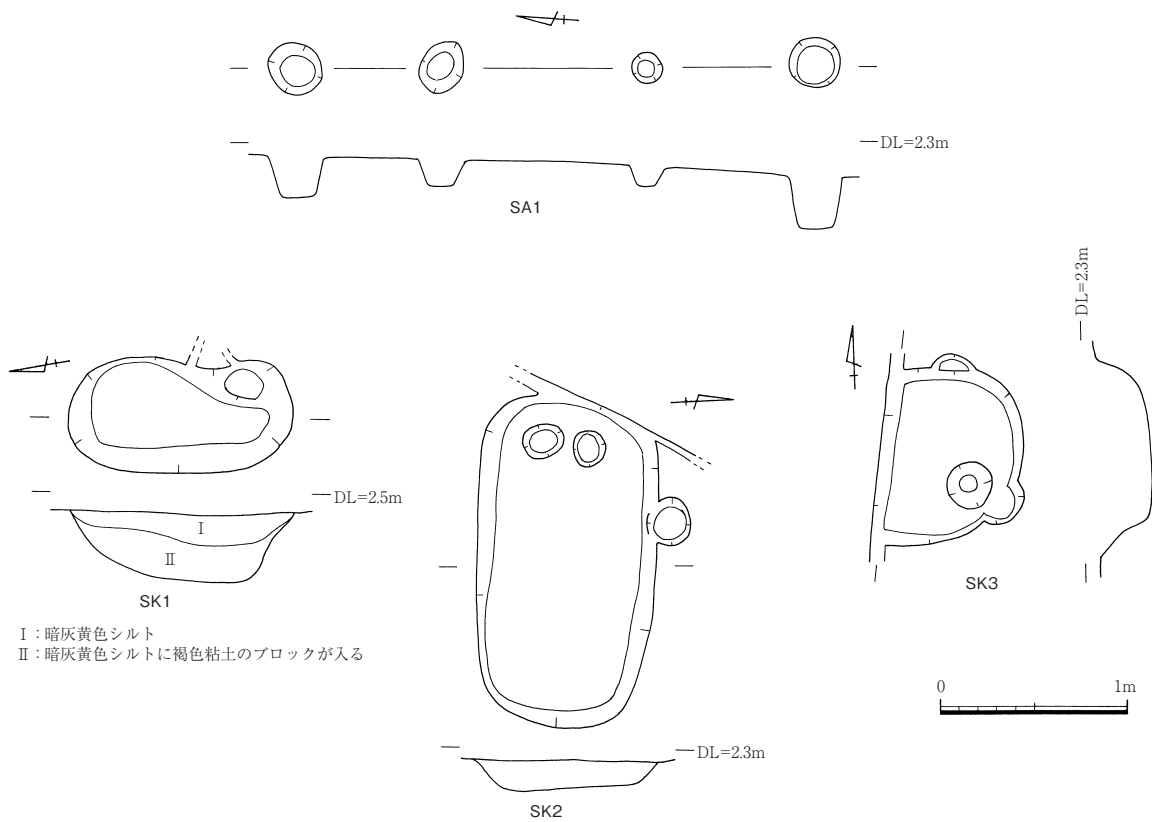


Fig.13 ⅡA南区 SA1・SK1～3 平面・セクション

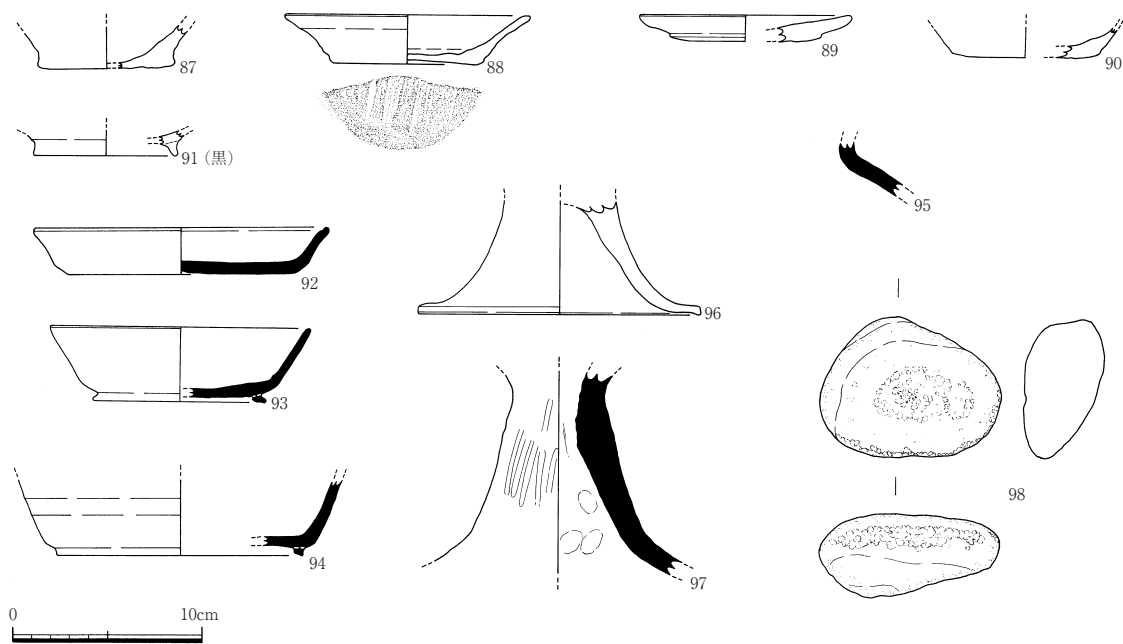


Fig.14 II A南区 遺構出土遺物

(P1:87, P2:95, P3:88, P4:94, P5:91, P6:92, P7:89・90, P8:96, P9:93, P10:97, SX1:98)

④ 南壁セクション

西壁側の一部に一次堆積層を確認できるのみで、他の部分は削平と二次堆積である。

Ⅷ層：西寄りの一部でのみ堆積が確認できる。茶黄色粘土で層厚は30cmを測る。

Ⅶ層：西寄りの一部でのみ堆積が確認できる。茶黄色シルトで層厚20cmを測る。

Ⅵ層：西寄りの一部でのみ堆積が確認できる。淡茶色シルトで層厚2～7cmを測る。

Ⅴ層：Ⅷ～Ⅵ層を切っている。淡茶色粘土～シルトで層厚50cm以上を測る。中世以降の堆積と考えられる。

Ⅳ層：茶灰色シルトで層厚40cmを測る。

Ⅲ層：攪乱層

Ⅱ層：床土

Ⅰ層：耕作土

(2) 検出遺構

① 柵列

SA1 (Fig.13)

調査区中央部で検出した。4個の柱穴が直線に並ぶことから柵列とした。柱穴間距離は0.85～1.1mを測る。調査区外に対応する柱穴が存在し掘立柱建物となる可能性もある。古代の土師器、須恵器の細片が少量出土している。

② 土坑

SK1 (Fig.13)

楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.6m、深さ70cmを測る。埋土はI・II層で、遺物は弥生後期、古代の細片が出土している。

SK2 (Fig.13)

調査区中央部に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ15cmを測る。埋土は褐色シルトに暗灰黄色粘土のブロックが入っている。プランはVI層上面で検出したが、遺構の一部がかかっている西壁セクションを見ると、中世の包含層II層を切っている。弥生土器や土師器の細片が出土している。

SK3 (Fig.13)

調査区の南部にあり、長軸方向の半分が調査区外に出ている。確認幅95cm、深さ25cmを測る。西壁のIII層を切って掘り込んでいる。埋土は褐色砂～シルトの単純一層である。土師器細片が少量出土している。

③ ピット出土の遺物 (Fig.14・23)

調査区西よりの平場を中心に100個以上のピットを検出したが時期を明らかにできるものは少ない。調査区南部や中央部などピットの集中するところは掘立柱建物を想定することもできるが、調査区の狭隘さもあって明確にすることはできなかった。P1からは土師器杯(87)、鉄片(261)、P2からは須恵器壺細片(95)、P3からは土師器杯(88)、P4からは須恵器杯(94)、P5からは黒色土器A類底部、P6からは須恵器皿(92)、P7からは土師器小皿(89)、同杯(90)、P8からは土師器高杯(96)、P9からは須恵器杯(93)、P10からは弥生後期高杯(97)が出土している。

④ SX1 (Fig.15)

調査区南端で検出した不整形の土坑である。南壁側が大きく攪乱されている。長軸2.9m、短軸2m前後を測る。床面は二段に掘り込まれており、検出面からの深さは75～95cmを測る。埋土はI～VI層で、V層からは炭化物とともに古代の土器が多く出土している。遺物は、床面から土師器杯(99・100)が、V層から土師器杯(101)、同蓋(104～107)、須恵器杯(111・113)、同蓋(109)、同高台(110)が、III層から土師器杯(103)、同甕(114)が、II層から土師器杯(102)が出土している。土師器杯(103)は内外面丁寧なヘラミガキを施し化粧土を塗布している。甕(114)はチャートの粗粒砂を多く含む胎土②に属する。SX1の供膳形態に見られる土師器と須恵器の組成比はおおよそ1:1である。これらの土器は、I期、8世紀代前半の良好な一括資料である。

⑤ SD2 (Fig.16～19)

調査区中央部の斜面部で検出した谷状の窪みである。確認延長4m、30°で下降し比高差は2mである。基本層準北壁のIV層が埋土となっている。土器や炭化物、礫を多く含んでいる。下部の開口部付近には人頭大の円礫、角礫が多く見られる。この中には被熱赤変しているものも多く見られる。開口部付近の遺物は、IV層出土のものと同様に明確に区別できないものも多い。

遺物は供膳形態では、土師器杯(115～121・125～132)、同皿(122～124)、同椀(144～150)、須恵器杯(135)、同蓋(133)、同高杯(143)、同椀(151～155)、黒色土器A類椀(156～159)、緑釉皿(134・136・140)、同椀(137・139・141・142)、灰釉皿(138)が出土している。土師器杯は底部糸切り(115・116・118)と底部ヘラ切り(117・119～121)の両者が見られる。126・127・129～132は大きな輪高台を有するもので、126は糸切り痕跡が明瞭に認められる。128は円盤高台で糸切りである。

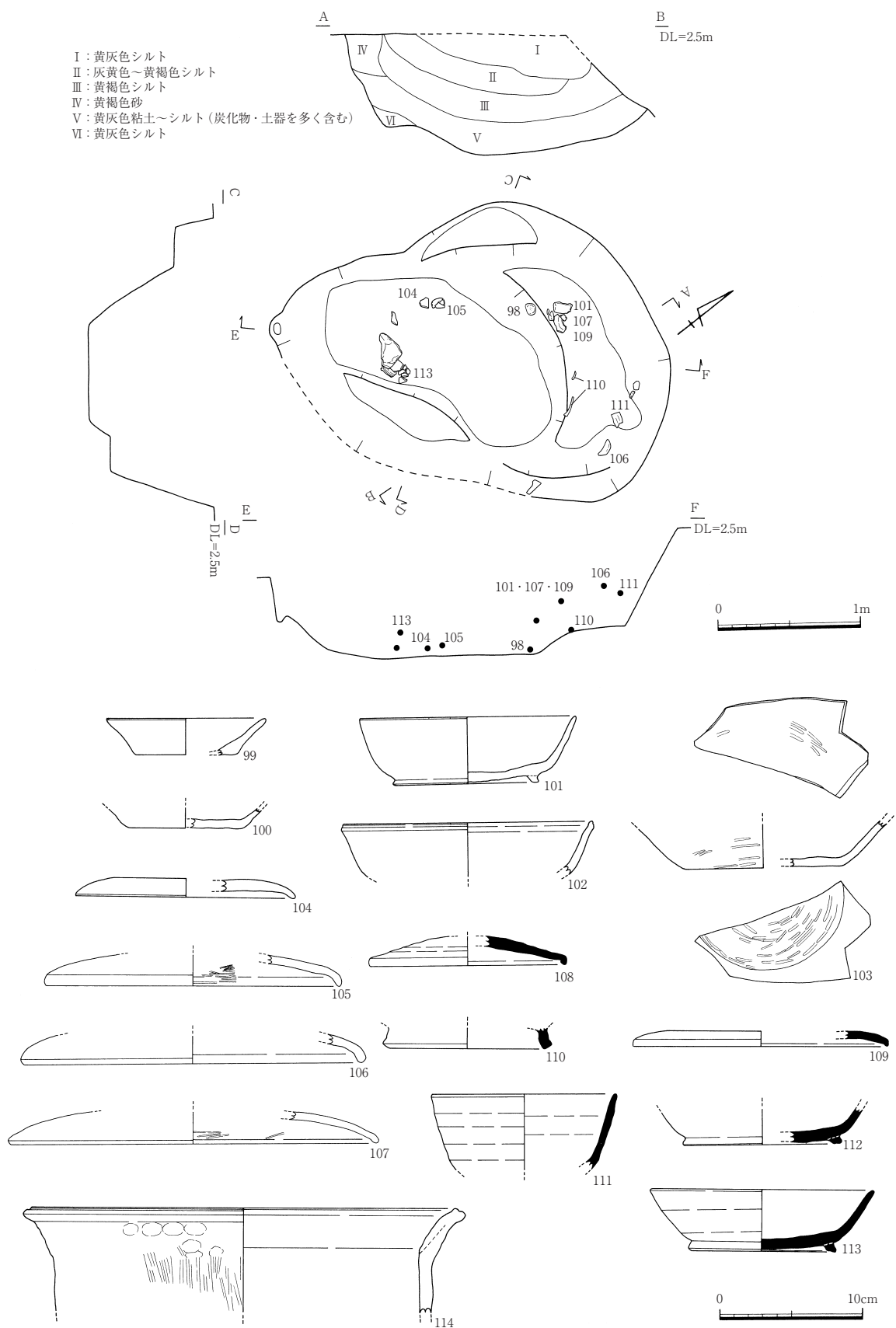


Fig.15 SX1 平面・セクション及び出土遺物



Fig.16 SD2 平面・エレベーション

土師器皿はヘラ切りで122・124は底部外面に弱い削り痕が見られる。これらの杯・皿はすべて回転台成形によるものである。須恵器の杯・皿は土師器のそれに較べて僅少である。蓋(133)、杯(135)、高杯(143)ともに精選された胎土で、内外面丁寧な横ナデ調整がなされている。135は高めの高台を貼付し底部外面はヘラ切り+削り+ナデ調整を施している。土師器碗の底部形態は輪高台を有するもの(144・145)と円盤高台を持つもの(146・147・149)が見られ、後者は体部外面に回転台成形痕を顕著にとどめ、底部はすべて糸切りである。148・150も円盤高台を有するものと考えられる。

須恵器碗は、土師器碗と同様の形態を有する。151・153～155は内外面に火襷が見られ、154と155は底部糸切りである。他のものも同様の底部形態を有するものと考えられる。

黒色土器A類碗はいくつかのタイプに分かれる。156は断面三角形の大きな高台を有し高台脇に底部切り離しの際に生じたと考えられる鏢状の突起が見られる。157は球形の底部に輪高台が付く。158は高台が剥離しているが底部糸切りで、体部外面にはヘラ削りが認められる。159は断面台形状の高台が付く。157～159は内面にヘラミガキが見られる。

緑釉皿(134・136・140)はすべて陶胎である。134は外底を蛇目状に削り、外底縁辺にまで施釉している。9世紀後半の篠窯の製品である。135は外底・内面にヘラミガキが施され、畳付まで施釉されている。小塩窯の新しい段階の製品で10世紀初頭に属する。140は見込に花文を描いている。外底はミガキがなされ施釉は外底まで施されている。重ね焼きの痕跡も認められる。典型的な小塩窯の製品で9世紀後半に属する。緑釉碗137・139は、粒子が見えないほど細かな胎土で、削り出し高台を有する。体部内外面横ナデ、外底は削り+横ナデ調整が施されている。篠黒岩窯の製品で10世紀前葉に属する。142は軟胎で内面に一条の沈線が巡る。138は灰釉小皿で内外面横ナデ調整がなされる。

貯蔵形態では、須恵器壺(160・161・163)、同甕(162)が見られる。煮沸形態では、土師器甕(164～168)、同羽釜(169～171)が出土している。甕は北区で見た口縁部が「く」字状に外反するタイプ(167・168)に加えて、胴部球形で口縁部が短く外反するタイプ(164～166)が認められる。167は胎土①類、168は胎土②類である。後者は横方向のハケ調整が顕著である。体部球形の甕は外面に指頭圧痕が見られる。羽釜は摂津型に属するもので、すべて胎土①類である。

この他、布目瓦の細片(174)、土錘(178・179)が出土している。178は土師質、179は須恵質である。

石器は扁平片刃石斧(172)、砥石(173・175・176)、台石(177)が出土している。172は基部と側縁部に剥離痕が見られるが、二次的な剥離の可能性はある。石材は結晶片岩である。砥石は173・175が砂岩、176は石英粗面岩製である。173は二面使用しており条線が見られる。176にも多くの条線が認められる。175は一面使用で全体に煤が付着している。177は5.4kgを測る台石で、主面の中央部が大きく窪み、激しく煤けている。砂岩である。180と181は先端が焼けた木片である。

SD2は、IV期の土器が主体を占めながらも須恵器碗や摂津型羽釜など10世紀後半代のものも含まれている。

⑥ 遺物包含層出土の遺物 (Fig.20～23)

SD2付近のIV層を中心に古代の土師器、須恵器などが多く出土している。

供膳形態

土師器皿(182～194)、同杯(195～205)、同碗(217～219・227)、同高杯(237)が見られる。182

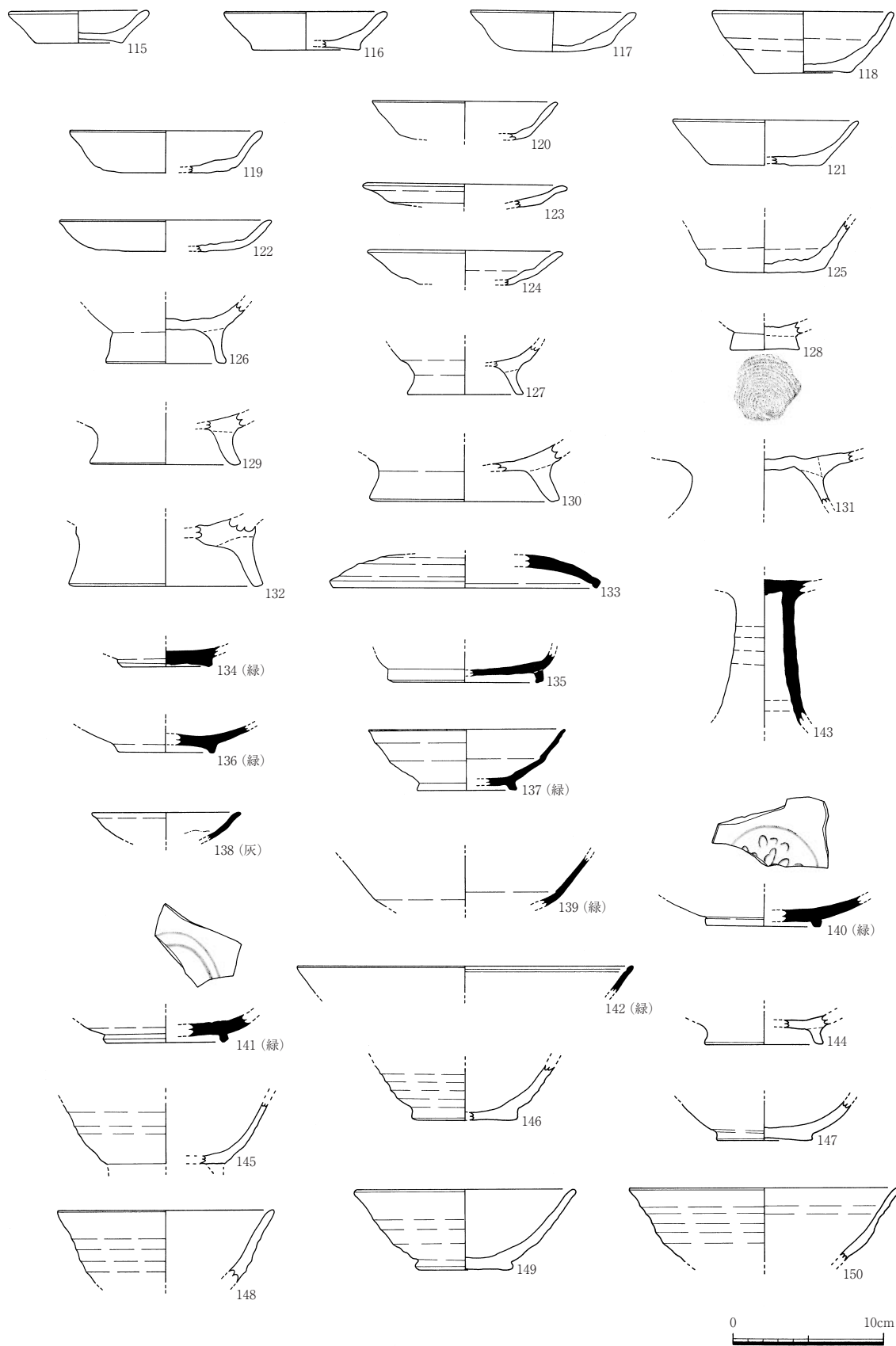


Fig.17 SD2 出土遺物(1)

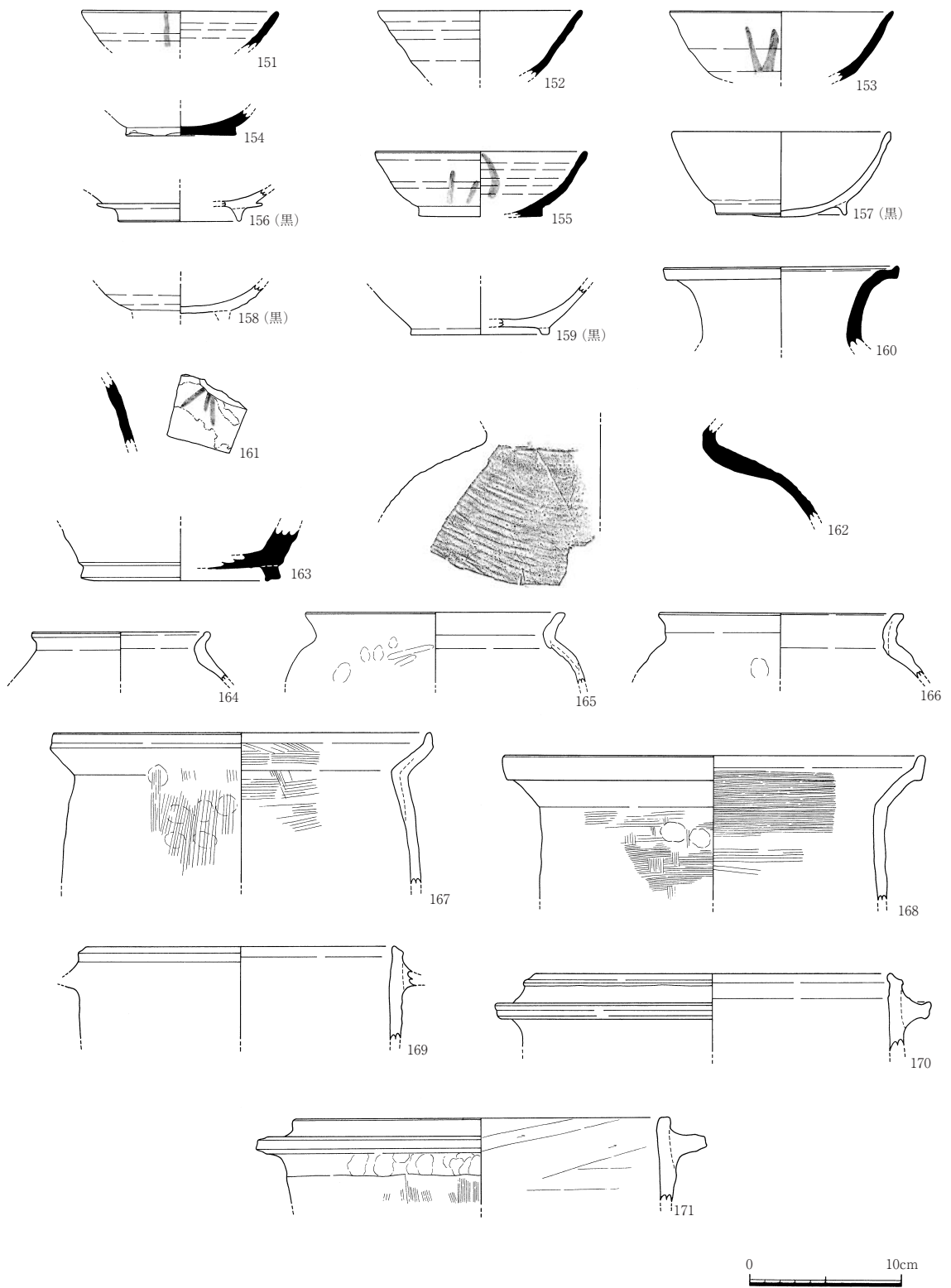


Fig.18 SD2 出土遺物 (2)



Fig.19 SD2 出土遺物 (3)

～184・186・187は小皿で底部糸切りである。他は概ねヘラ切りである。188と194は搬入品である。188は内面に暗文が見られる。194は手づくね成形で口縁部が肥厚している。杯も底部ヘラ切り(196・198・200～203・205)と糸切り(195・197・204)が見られる。196は外底に粘土紐の単位が認められる。200は精選された胎土で内外丁寧な横ナデ調整がなされている。202もヘラ切り後に丁寧なナデ調整が施されている。197と204は回転台成形痕が顕著に見られる。199は輪高台を有する。椀は輪高台(217・227)と円盤状高台(218・219)があり、217・219・227の底部には糸切り痕が認められる。218はヘラ切り後にナデている。227の体部外面はヘラ削りが、219は回転台成形痕が顕著に見られる。217の胎土は白色に発色している。この他、高杯柱状部(237)が出土している。

須恵器は杯(211・213・215・216)、蓋(206～210)、椀(214・222～225)が見られる。杯・蓋は209を除くと精選された胎土が用いられている。211はヘラ切り後、削り+ナデ調整で仕上げられている。椀は輪高台(214・224)とベタ高台(223)がある。214は台形状の高台を有し器壁が厚く、外面に荒い削りが見られる。224は糸切り後に高台を貼付している。内外面に火轆が見られ、225と同一個体の可能性がある。223は糸切りである。222は口縁部が肥厚している。

黒色土器A類は底部細片が6点出土しているが、2点(220・221)図示した。220は器壁が薄く内面は細かなヘラミガキがなされている。灰釉は椀が1点(212)見られる。226・228は瓦器椀で、228は台形状の低い高台を持ち、内面には両者とも直線化した暗文が僅かに認められる。白磁は口縁部と底部が出土している。231～235はIV類、229は見込に段を持つV類の底部である。この他古墳時代の高杯(238)が出土している。

貯蔵形態

須恵器壺底部(236)と同甕(239)が出土している。後者は胴部外面に太い筋の叩き目が見られ、口縁部に刻目状の連続圧痕が巡る。

煮沸形態

甕(240～247)、羽釜(248～250)が見られる。前者は口縁部点数で見ると、図示し得なかったものも含めて35点を数える。口縁部が「く」字状に屈曲するタイプで占められ、胎土は1点を除いて胎土①類である。後者は、7点が認められすべて胎土①類である。

その他

移動式竈の鏝(251)、土錘(252～255)、瓦(256・257)、砥石(258)、鉄片(259・260・262・263)が出土している。256は丸瓦、257は平瓦で、両者共に布目圧痕が見られる。砥石は砂岩製で4面使用されている。鉄片(259・260)は棒状で重さ6gほどの細片であるが、263は塊状をなし280.9gである。

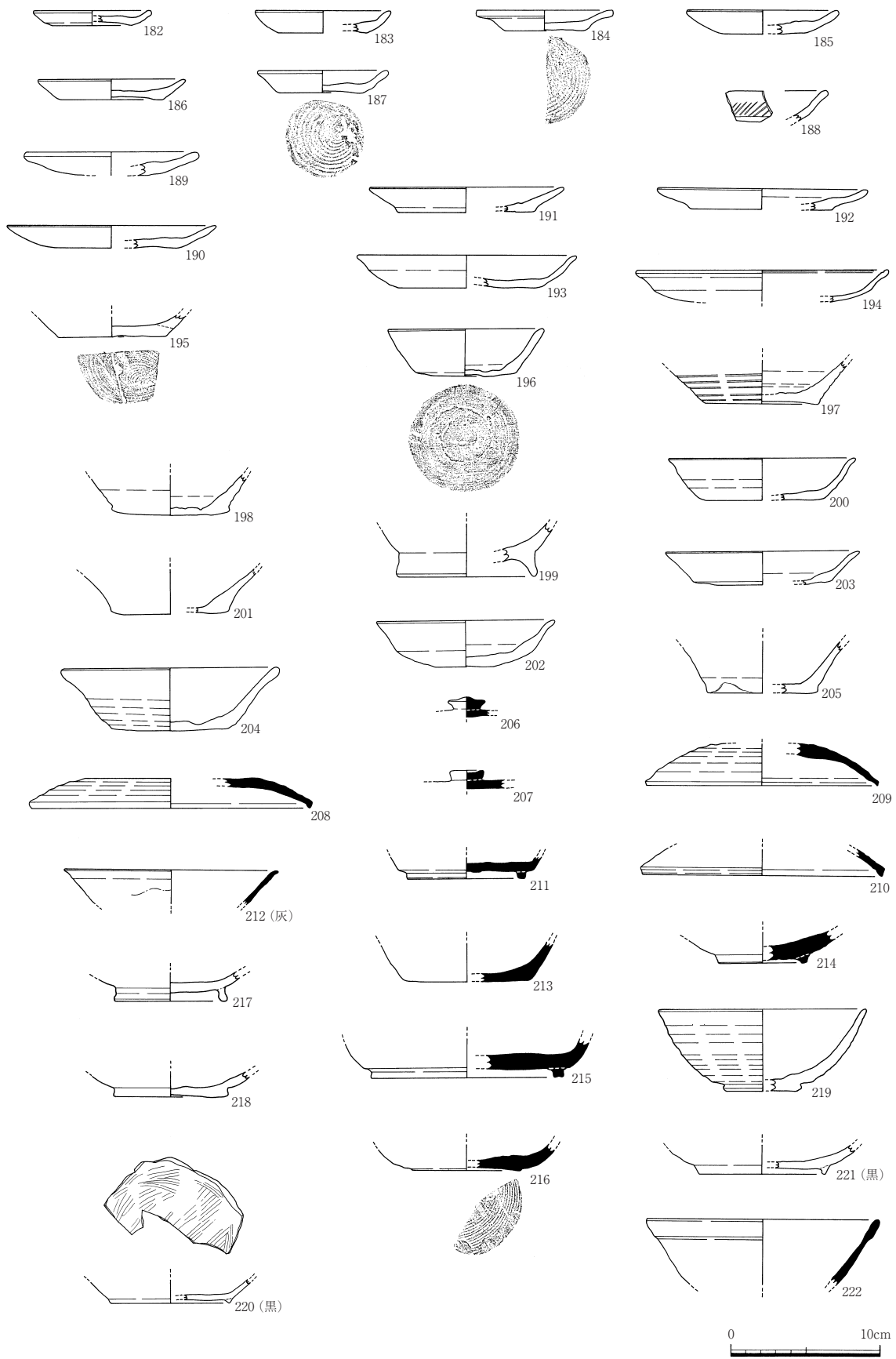


Fig.20 II A南区 遺物包含層出土遺物(1)

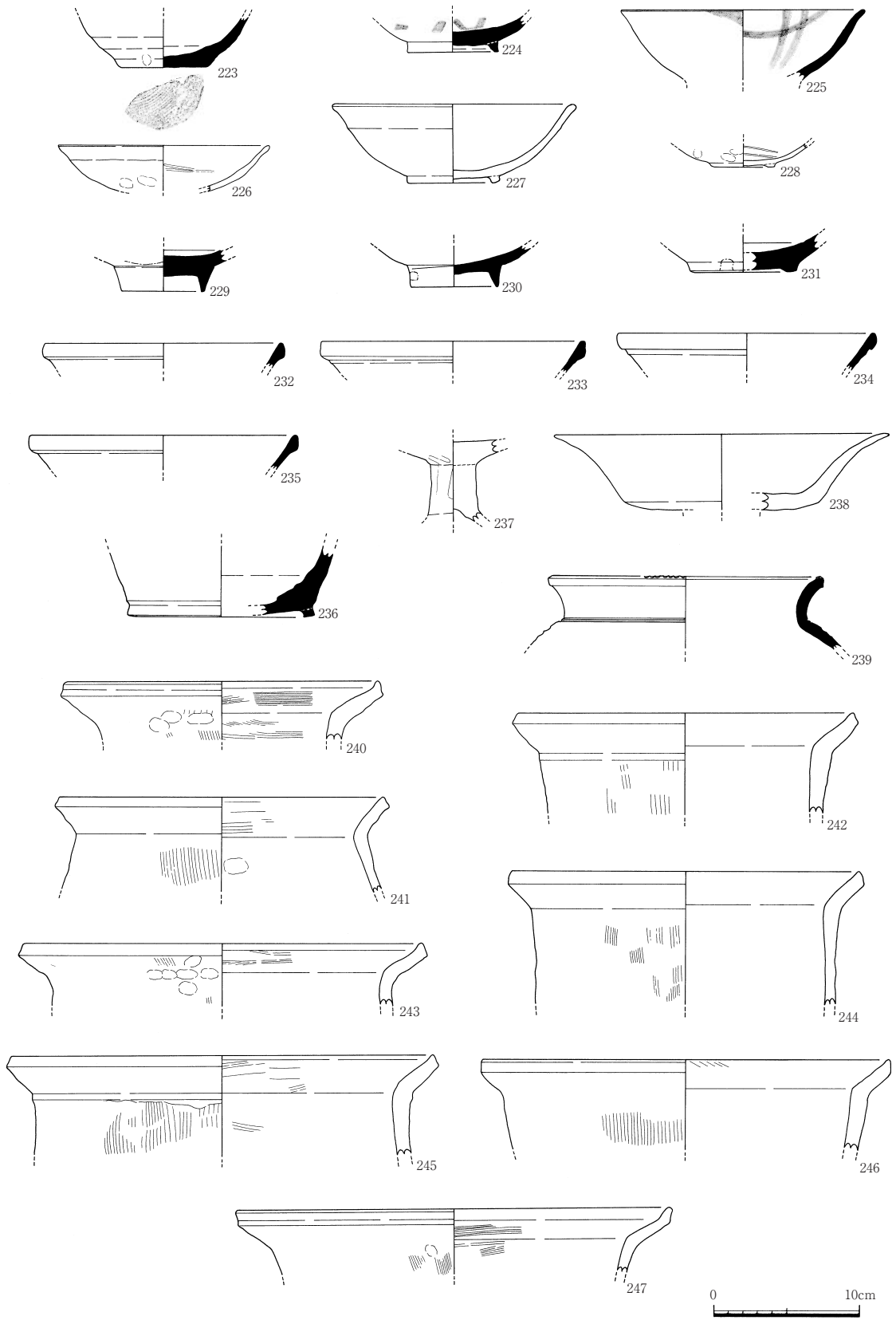


Fig.21 II A南区 遺物包含層出土遺物 (2)

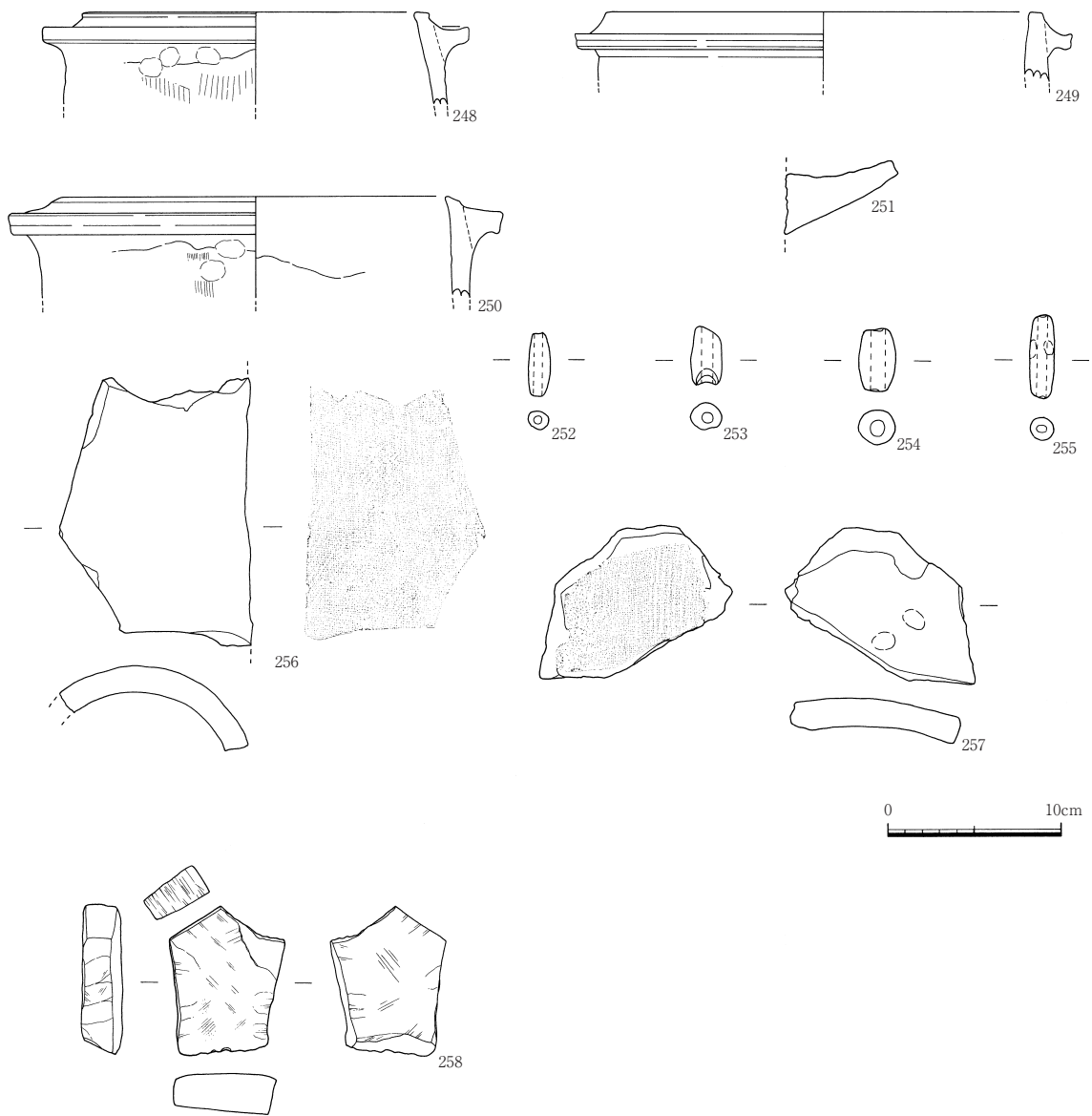


Fig.22 II A南区 遺物包含層出土遺物(3)

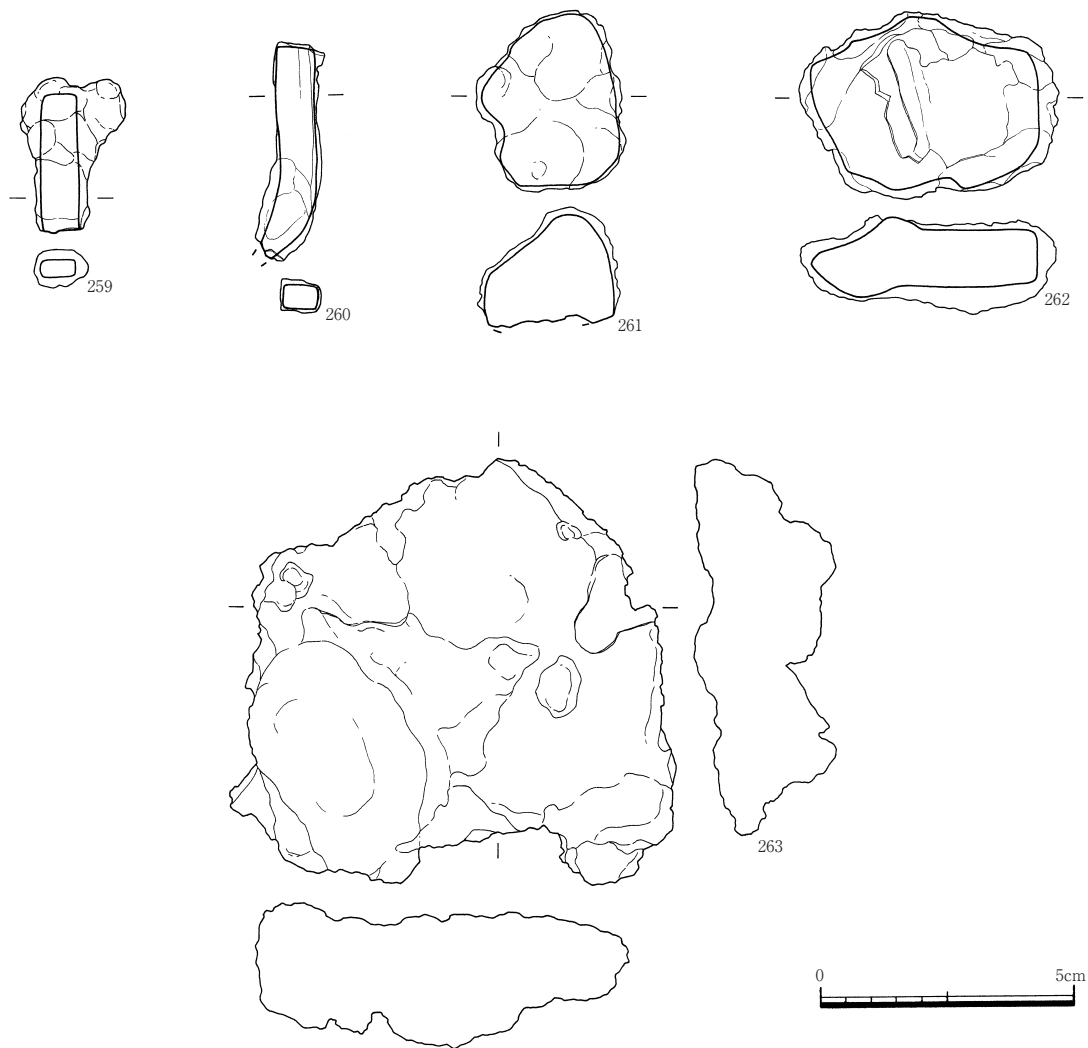


Fig.23 II A区 出土鉄器 (P1: 261、包含層: 259・260・262・263)

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
1	SD1	土師器 杯	(2.6)	—	—	7.2		精選された胎土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ	
2	SD1	土師器 杯	(1.7)	—	—	7.8		精選された胎土	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。外底脇ににぶい沈線。	
3	SD1	土師器 杯	(1.0)	—	—	9.8		赤色風化礫の粗・細粒を多く含む	橙色	ヘラ切り。器表荒れ。	
4	SD1	土師器 杯	2.6	12.8	—	7.8	20.3	チャート他の粗・細粒砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ	
5	SD1	土師器 杯	2.8	12.4	—	7.5	23.4	精選された胎土	橙色	内外面ヨコナデ。	外面煤附着。
6	SD1	土師器 杯	0.7	—	—	(7.8)		あまり砂粒を含まない	にぶい橙色		
7	SD1	土師器 杯	(1.7)	—	—	(7.2)		精選された胎土	橙色	ヨコナデ。直立した高台。	
8	SD1	黒色土器 A類椀	(2.0)	—	—	—		角閃石を多く含む	橙色	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ。	搬入品。外面赤彩。
9	SD1	黒色土器 A類椀	(0.7)	—	—	(9.4)		金雲母、石英粒を含む。	明赤褐色	断面三角形の貼付高台。内面細かなヘラミガキ。	搬入品。外面赤彩。
10	SD1	土師器 甕	(3.3)	(21.6)	—	—		チャートの粗粒砂を僅かに含む	にぶい橙色	口縁端部を上方に拡張し強いヨコナデ。口縁外面タテハケ・ヨコナデ。内面ヨコハケ。体部外面タテハケ、内面ヨコハケ。	
11	SD1	土師器 甕	(4.2)	(22.4)	—	—		チャートの粗粒砂を含む	にぶい橙色	口縁端部を上方に拡張し強いヨコナデ。口縁外面ヨコハケ・ヨコナデ。内面ヨコハケ。体部外面タテハケ、内面ヨコハケ。	内外面煤附着
12	包含層	土師器 杯	2.3	(10.6)	—	(7.0)	21.7	精選された胎土	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。	
13	包含層	土師器 杯	1.6	(12.0)	—	(8.6)		精選された胎土	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。	
14	包含層	土師器 杯	(2.2)	(12.6)	—	—	17.5	精選された胎土	橙色	内外面ヨコナデ。	
15	包含層	土師器 杯	2.8	(12.0)	—	(8.0)	23.3	精選された胎土	橙色	外底ヘラ切り・ナデ。	
16	包含層	土師器 杯	(2.2)	—	—	8.8		赤色風化礫を多く含む	橙色	外底ヘラ切り、ヨコナデ。	
17	包含層	土師器 杯	2.2	(12.2)	—	(7.0)	18.3	チャートの細粒砂を含む	橙色	内外面ヨコナデ。	
18	包含層	土師器 杯	(1.9)	—	—	(12.6)		精選された胎土	橙色	非回転台成形。内底・外底立ち上がり部ヨコナデ。外底凹凸あり。	
19	包含層	土師器 杯	(2.4)	(12.4)	—	(7.2)	19.4	精選された胎土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。底部脇が窪む。	
20	包含層	土師器 杯	(2.6)	(13.0)	—	(8.0)	2.0	チャート、赤色風化礫の粗・細粒砂を含む。	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。	
21	包含層	土師器 杯	(2.3)	(12.3)	—	—		精選された胎土	橙色	口縁外反しない。	
22	包含層	土師器 杯	(1.5)	—	—	(10.4)		チャート他の細粒を多く含む	浅黄橙色		
23	包含層	土師器 杯	(2.1)	—	—	8.2		チャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。	橙色	外底ヘラ切り。器表摩耗。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
24	包含層	土師器 杯	(3.7)	—	—	6.2	チャート、赤色 風化礫の粗・細粒 砂を含む。	にぶい橙色	ベタ高台。内外面ヨコナデ。糸切 り。		
25	包含層	土師器 杯	(2.6)	(13.0)	—	—	チャートの細粒 砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ。		
26	包含層	土師器 杯	(3.3)	—	—	9.0	チャート、長石、 赤色風化礫の粗・ 細粒砂を含む。	橙色	内外面ヨコナデ。高台高1cm。	外底高台に煤 附着	
27	包含層	土師器 杯	(2.4)	—	—	8.2	チャートの細粒 砂を多く含む	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。外面に粘土紐の 単位。		
28	包含層	土師器 杯	(2.2)	—	—	(8.4)	精選された胎土	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。		
29	包含層	土師器 杯	(3.3)	—	—	(11.0)	チャートの細粒 砂を多く含む	にぶい橙色			
30	包含層	土師器 杯	(2.5)	—	—	8.8	チャート、赤色 風化礫の細粒砂 を含む。	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。		
31	包含層	土師器 皿	(1.6)	(14.0)	—	—	11.4	チャート、赤色 風化礫の粗・細粒 砂を含む。	橙色	内外面ヨコナデ。	
32	包含層	土師器 皿	1.45	(12.6)	—	—	11.5	チャート、赤色 風化礫の細粒砂 を含む。	橙色	内外面ヨコナデ。外底ヘラ切り・ ナデ。	内面煤附着
33	包含層	土師器 皿	2.1	(17.8)	—	—	11.8	チャート他の細 粒を多く含む	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	内面煤附着
34	包含層	土師器 皿	2.6	(18.4)	—	(13.4)	14.1	精選された胎土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	
35	包含層	須恵器 杯	2.3	(13.6)	—	—		精選された胎土	灰黄色	内外面丁寧なヨコナデ。	
36	包含層	須恵器 杯	(3.3)	(12.8)	—	—		精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。	
37	包含層	須恵器 杯	4.0	(13.0)	—	—	30.8	精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。	
38	包含層	須恵器 杯	(3.0)	(15.6)	—	—		精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ。	
39	包含層	須恵器 杯	(1.8)	—	—	(8.6)		精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。	
40	包含層	須恵器 杯	(1.4)	—	—	(10.2)		精選された胎土	灰白色	外底削り・ヨコナデ。内底ナデ。	
41	包含層	須恵器 蓋	(1.2)	—	—	—		精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。環状つまみ。	
42	包含層	須恵器 杯	(1.2)	—	—	(10.6)		精選された胎土	灰白色	内外面丁寧なヨコナデ。	
43	包含層	須恵器 蓋	(1.9)	—	—	—		精選された胎土	灰黄色	内外面丁寧なヨコナデ。宝珠つま み。	外面自然釉。
44	包含層	須恵器 蓋	(1.7)	—	—	(13.0)		極めて精選され た胎土	灰黄色	内外面ヨコナデ。	
45	包含層	灰釉椀	(1.7)	—	—	(6.6)		精選された胎土	灰黄色	外方に踏んばるしっかりした高 台。外底削り・ヨコナデ。内底蛇 の目状に施釉。	猿投窯。9C 後半。
46	包含層	灰釉皿	(2.0)	—	—	—		やや粗い胎土	灰白色	口縁僅かに外方に肥厚。	猿投窯。9C 後半尾野編年 IV期、K90。
47	包含層	緑釉椀	(1.7)	—	—	—		精選された胎土	灰白色		洛北産。9C 中頃の古い段 階。幡多枝。

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
48	包含層	灰釉椀	(3.1)	—	—	8.8		精選された胎土	灰白色	見込赤彩。しっかりした削り出し高台。畳付丸味を帯びる。やや緑がかった釉。	東海。平安京Ⅱ新～Ⅱ中(9C後半～10C初め)。
49	包含層	緑釉椀	1.3	—	—	(7.0)		精選された胎土	灰白色	貼付高台。内外面ヨコナデ。内外に施釉がみられるが、釉がとけていない。	猿投窯。9C後半。
50	包含層	緑釉皿	(1.9)	—	—	7.3		精選された胎土	灰白色	外底糸切り・削り+ミガキ。畳付は削ってからナデ。内底ミガキ、目跡らしきものがある。	洛北産9C中～後半。幡多枝周辺、岩倉十倉院。
51	包含層	土師器 椀	(1.8)	—	—	(7.0)		チャートの粗粒砂を僅かに含む	橙色	高台高1cm、断面逆台形。	
52	包含層	土師器 椀	3.5	(12.6)	—	6.8	27.8	精選された胎土	橙色		
53	包含層	土師器 椀	(2.0)	—	—	(8.8)		チャートの細粒砂を多く含む	橙色	高台高1cm、断面に粘土紐の接合痕を認める。	
54	包含層	土師器 椀	(5.2)	(14.0)	—	—		チャート、赤色風化礫の細粒砂を多く含む。	にぶい黄橙色		
55	包含層	黒色土器 A類椀	(1.8)	(16.0)	—	—		石英、角閃石粒を含む。	暗灰、にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。口縁内面僅かに沈線を認める。	搬入品
56	包含層	黒色土器 A類椀	(3.1)	17.9	—	—		石英、角閃石粒他を含む。	にぶい黄橙色	口縁内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコヘラミガキ。	搬入品
57	包含層	黒色土器 A類椀	—	—	—	—		金雲母を多く含む。角閃石、長石、石英粒を含む。	にぶい橙色	口縁外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕、内面ヘラミガキ。	搬入品
58	包含層	黒色土器 A類椀	—	14.0	—	—		角閃石、石英粒を多く含む。	茶色	外面ナデ。内面丁寧なヨコヘラミガキ。	搬入品
59	包含層	黒色土器 A類椀	(0.7)	—	—	(10.2)		石英、角閃石粒を含む。	にぶい黄橙色	断面三角形の小高台貼付。内面ヘラミガキ。	搬入品
60	包含層	黒色土器 A類椀	(1.0)	—	—	(10.4)		石英、角閃石、金雲母粒を含む。	にぶい黄橙色	断面三角形の高台。高台高0.3cm、径10.4cm。内面ヘラミガキ。	搬入品
61	包含層	黒色土器 A類椀	(0.8)	—	—	(7.4)		雲母、角閃石の細粒砂を含む。	にぶい黄橙色	断面三角形の貼付高台。高台高0.4cm、径7.4cm。	搬入品
62	包含層	黒色土器 A類椀	(2.3)	—	—	7.2		石英、角閃石の細粒砂を多く含む。	にぶい黄橙色	高台高0.7cm、ハの字状にしっかりふん張る。外面ナデ。内面丁寧なヘラミガキ。外底ナデ。	搬入品。外面煤付着。赤彩。
63	包含層	黒色土器 A類椀	(2.6)	—	—	(9.0)		石英、角閃石粒他を含む。	明褐色	高台ハの字状にふん張る。外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	搬入品。赤彩。
64	包含層	黒色土器 A類椀	(2.2)	—	—	(7.6)		石英、角閃石粒他を含む。	橙色	ハの字状にふん張る貼付高台。外面左→右ヘラケズリ・ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	搬入品。赤彩。
65	包含層	黒色土器 A類椀	(2.3)	—	—	(6.6)		石英粒他を含む	明赤褐色	高台ハの字状にふん張る。外面左→右ヘラケズリ・ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	搬入品。赤彩。
66	包含層	黒色土器 A類椀	(2.1)	—	—	(9.4)		チャートの細粒他を含む	にぶい黄橙色	外方に踏んばるしっかりした高台。内面ヘラミガキ。高台径9.3cm。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
67	包含層	土師器 甕	(3.4)	—	—	—	チャートの細粒 砂を多く含む	にぶい褐色	擬口縁の可能性。外面ヨコハケ1 帯、以下タテハケ。内面ヨコナデ。	外面煤付着。 胎土②類。	
68	包含層	土師器 甕	(4.7)	17.4	—	—	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい橙色	口縁端部つまみ上げ・ヨコナデ。 口縁内外ヨコナデ。胴部外面タテ ハケ。内面ヨコハケ。	胎土②類。	
69	包含層	土師器 甕	(4.3)	(22.4)	—	—	石英粗粒砂を含 む。雲母多く含 む。	灰黄褐色	口唇面取り、上方につまみ上げて ヨコナデ。口縁外面ヨコナデ、内 面ヨコハケ。胴部外面タテハケ。	胎土①類。	
70	包含層	土師器 甕	(2.9)	21.2	—	—	石英、長石他の 粗粒砂を多く含 む。		口縁端部つまみ上げてヨコナデ。 口縁外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。	外面煤付着。 胎土①類。	
71	包含層	土師器 甕	(4.5)	22.0	—	—	石英、雲母粒多 く含む。	褐灰色	口縁端部つまみ上げて強いヨコナ デ。口縁内外面ヨコハケ・ヨコナ デ。胴部外面タテハケ・ナデ。内 面ヨコハケ。	外面煤付着。 胎土①類。	
72	包含層	土師器 甕	(5.7)	(24.0)	—	—	金雲母、角閃石、 石英粒を多く含 む。	にぶい褐色	口縁端部つまみ上げヨコナデ。口 縁内外ヨコナデ。胴部外面タテハ ケ/内面ヨコナデ。	外面煤付着。 胎土①類。	
73	包含層	土師器 甕	(6.0)	20.9	—	—	石英粒を多く含 む	にぶい黄橙 色	口縁端部上方につまみ上げヨコナ デ。口縁内外ヨコハケ、ヨコナデ。 胴部外面タテハケ。	外面煤付着。 胎土①類。	
74	包含層	土師器 甕	(5.4)	(23.8)	—	—	石英粗粒砂を多 く含む	にぶい橙色	口縁端部つまみ上げ、ヨコナデ。 口縁外面タテハケ・ヨコナデ。内 面ヨコハケ・ヨコナデ。胴部外面 タテハケ、内面ヨコハケ。	胎土①類。	
75	包含層	土師器 甕	(6.2)	(26.0)	—	—	石英粒を多く含 む	灰黄褐色	口唇面取り、上方につまみ上げて ヨコナデ。口縁内外面ヨコハケ・ ヨコナデ。胴部外面タテハケ、内 面ヨコハケ・指ナデ。	外面煤付着。 胎土①類。	
76	包含層	土師器 甕	(7.9)	(19.9)	—	—	チャート、赤色 風化礫の粗粒砂 を含む。	にぶい橙色	口唇面取り、上下に拡張。口縁外 面ヨコナデ、内面ヨコハケ・ヨコ ナデ。胴部外面タテハケ・ヨコハ ケ。内面ヨコハケ。	内外面煤付 着。胎土②類。	
77	包含層	土師器 甕	(5.0)	(22.0)	—	—	金雲母、チャー ト粒他を含む。	にぶい黄褐 色	口縁僅かに肥厚、内外面ヨコナデ。 胴部外面タテハケ・ヨコハケ。	内外面煤付 着。胎土②類。	
78	包含層	土師器 羽釜	(4.8)	(20.6)	—	—	石英、角閃石を 多く含む。	にぶい橙色	台形状の太い鑊。口縁部までヨコ ナデ。胴部外面タテハケ、内面ナ デ。	胎土①類。	
79	包含層	甌 把手	全長 5.4	全幅 3.7	全厚 3.8	重量 58.6g	チャート他の粗 粒砂を含む	茶色			
80	包含層	製塩土器	(3.3)	(9.0)	—	—	チャートの粗粒 砂を多く含む	灰色	内面布目圧痕。		
87	P1	土師器 杯	(2.2)	—	—	7.2	チャート他の細・ 粗粒砂多い	にぶい橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。		
88	P3	土師器 杯	2.6	13.0	—	8.1	チャート他の細・ 粗粒砂多い	橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。外底 平行圧痕。		
89	P7	土師器 皿	1.4	11.2	8.0	—	精選された胎土	浅黄褐色	内外面ヨコナデ		
90	P7	土師器 杯	(1.65)	—	—	7.8	精選された胎土	にぶい橙色	外底ヘラ切り。内外面ヨコナデ。		
91	P5	黒色土器 A 類 椀	(1.35)	—	—	7.5	精選された胎土	にぶい橙色	外方に踏んばる高台。内外面ヨコ ナデ、内面ヘラミガキ。		

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
92	P6	須恵器 皿	2.45	15.4	—	12.2	15.9	精選された胎土	淡黄色	端部内面凹む。内外面ヨコナデ。	
93	P9	須恵器 杯	3.9	13.8	—	9.2	26.1	精選された胎土	灰色	ヘラ切り。高台壘付凹状。内外面ヨコナデ。	
94	P4	須恵器 杯	(4.0)	—	—	12.9		精選された胎土	灰白色	高台壘付凹状。内外面ヨコナデ。	
95	P2	須恵器 壺	—	—	—	—		粗・細粒砂を含む	灰色		外面自然釉。
96	P8	土師器 高杯	(6.0)	—	—	14.8		精選された胎土	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。	
97	P10	弥生土器 高杯	(10.6)	—	—	—		チャートの粗粒砂を含む	淡黄色	外面タテヘラミガキ。内面しぼり目。	
99	SX1	土師器 杯	2.6	11.2	—	—	23.2	精選された胎土	にぶい橙色	ヘラ切り。器表の荒れが激しい。	
100	SX1	土師器 杯	1.5	—	—	8.0		細粒砂を多く含む	にぶい橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。内外面破損後被熱。	煤付着
101	SX1	土師器 杯	4.9	15.2	—	10.3	30.3	細・粗粒砂を含む	橙色	貼付高台。ハの字状にしっかり踏んばる。内外面器表の荒れが激しい。	
102	SX1	土師器 杯	(3.75)	17.5	—	—		精選された胎土	にぶい黄橙色	口縁端部上方につまみ上げる。内外面ヘラミガキ。	
103	SX1	土師器 杯	3.1	—	—	11.0		細粒砂を多く含む	明赤褐色	外底左←→右の削り・ナデ。内底と体部内外面ヘラミガキ。内外面化粧土、スリップ。	
104	SX1	土師器 蓋	1.3	—	—	15.6		赤色風化礫の粗粒を多く含む	橙色	器表の荒れが激しい。	
105	SX1	土師器 蓋	(2.2)	—	—	20.6		チャートの粗・細粒砂を多く含む	にぶい橙色	内外面ヘラミガキ。	内面に大きな黒斑。
106	SX1	土師器 蓋	2.0	—	—	24.0		精選された胎土	橙色	内外面器表の荒れが激しい。	
107	SX1	土師器 蓋	(2.3)	25.8	—	—		チャートの粗・細粒砂を多く含む	にぶい橙色	内外面ヘラミガキ。外面は下地に左←右のヘラ削り。	
108	SX1	須恵器 蓋	(2.1)	13.8	—	—		精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。	
109	SX1	須恵器 蓋	1.1	—	—	18.0		チャートの粗粒砂を多く含む	灰色	内外面ヨコナデ。	
110	SX1	須恵器	(1.5)	—	—	12.0		精選された胎土	灰色	高台、貼付部で剥離。内外面ヨコナデ。	
111	SX1	須恵器 杯	(5.3)	13.0	—	—		細粒砂を含む	灰白色	内外面ヨコナデ。	
112	SX1	須恵器 杯	(2.55)	—	—	11.2		細粒砂を多く含む	灰色	壘付は凹状。内外面ヨコナデ。	
113	SX1	須恵器 杯	4.4	15.6	—	10.4		細粒砂を多く含む	灰白色	壘付は凹状。内外面ヨコナデ。外底ヘラ切り・削り・ナデ。	
114	SX1	土師器 甕	7.4	30.0	—	—		チャートの粗粒砂を多く含む	にぶい赤褐色	口縁内外面ヨコナデ、口唇凹状。胴部外面タテハケ。	外面煤付着
115	SD2	土師器 杯	2.1	9.4	—	5.8	22.3	細粒砂を多く含む	にぶい橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
116	SD2	土師器 杯	2.58	10.9	—	7.2		細粒砂を多く含む	にぶい黄橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	内外面煤付着
117	SD2	土師器 杯	2.7	11.0	—	7.2	24.5	精選された胎土	にぶい黄橙色	ヘラ切り、ナデ。内外面ヨコナデ。	
118	SD2	土師器 杯	4.2	11.8	—	6.5	35.6	赤色風化礫を多く含む	橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
119	SD2	土師器 杯	2.8	12.8	—	8.5	21.9	チャートの粗・細粒砂を多く含む	にぶい黄橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。	
120	SD2	土師器 杯	(2.5)	12.3	—	—	20.3	砂粒をほとんど含まない	浅黄橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。	
121	SD2	土師器 杯	3.0	12.2	—	7.6	24.6	粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	ヘラ切り・ナデ。内外面ヨコナデ。	
122	SD2	土師器 皿	2.1	14.2	—	—	14.8	チャートの粗・細粒砂を多く含む	橙色	ヘラ切り・ナデ。内外面ヨコナデ。二次的に被熱。	
123	SD2	土師器 皿	(1.5)	13.0	—	—		精選された胎土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	

Ⅱ A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
124	SD2	土師器 皿	(2.25)	13.0	—	—	16.9	チャート他の粗・細粒砂を多く含む	橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。	
125	SD2	土師器 杯	(3.5)	—	—	7.8		細粒砂を多く含む	にぶい橙色	ヘラ切り・ナデ。内外面ヨコナデ。	
126	SD2	土師器 杯	(4.05)	—	—	8.0		細粒砂を含む	にぶい黄橙色	高台高2cm。糸切り。内外面ヨコナデ。	
127	SD2	土師器 杯	(3.25)	—	—	7.8		精選された胎土	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。	
128	SD2	土師器 杯	(1.85)	—	—	4.6		細粒砂を含む	灰白色	ベタ高台。糸切り。	
129	SD2	土師器 杯	(3.4)	—	—	10.0		杯身：精選された胎土、高台：細粒砂を多く含む	橙色	高台高2cm。内外面ヨコナデ。	
130	SD2	土師器 杯	(3.8)	—	—	12.6		砂粒をほとんど含まない	黄灰色	内外面ヨコナデ。	内外面煤付着
131	SD2	土師器 杯	(4.0)	—	—	—		赤色風化礫の粗粒砂を少量含む	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。	
132	SD2	土師器 杯	(4.5)	—	—	12.9		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む	灰白色	内外面ヨコナデ。	
133	SD2	須恵器 蓋	(2.2)	17.5	—	—		精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ	内面煤付着
134	SD2	緑釉皿	(1.3)	—	—	5.8		やや粗い胎土	暗オリーブ灰色	釉は深緑。外底は蛇の目状に削る。左←右のケズリ(ロクロ右まわり)。外底縁辺まで施釉。	9C後半。篠窯。
135	SD2	須恵器 杯	(2.1)	—	—	10.4		精選された胎土	灰色	やや高めめの貼付高台。内外面丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り・ケズリ・ナデ。	
136	SD2	緑釉皿	(1.8)	—	—	6.4		やや粗い胎土	灰オリーブ色	やや濁った緑色の釉。量付まで施釉。外底内面ミガキ。	小塩窯の一番新しい段階。10Cにかかる(篠窯で焼成)。
137	SD2	緑釉碗	4.1	13.0	—	6.6		粒子が見えないほど細かい胎土	オリーブ黄色、胎土灰色。	削り出し高台。ハの字状に踏んばる。内外面ヨコナデ。外底ケズリ・ヨコナデ。	篠黒岩窯、10C中頃以前~初頭にかかる
138	SD2	灰釉皿	(1.8)	10.0	—	—		粗い胎土	灰白色	内外面ヨコナデ	
139	SD2	緑釉碗	—	—	—	—		きめ細かい胎土	灰白色	釉はやや黄味を帯びる。内面の上方のみミガキ。他はヨコナデ。きれいなつくり。	篠前山窯か。平安I期新(10C第一四半期)
140	SD2	緑釉皿	2.1	—	—	7.6		やや粗い胎土	オリーブ黄色	釉はやや黄味を帯びた緑色。外底まで施釉。重ね焼きの痕跡を認める。外底ミガキ。内面花文。	典型的な小塩の製品(洛西)。9C後半。
141	SD2	緑釉碗か	(1.8)	—	—	7.6		やや粗い胎土	灰白色	釉は黄味を帯びる。貼付高台。内面に凹状の罫線。	猿投窯(東濃)。9C後半。
142	SD2	緑釉碗か	(1.8)	22.2	—	—		砂粒を多く含む(軟陶)	明オリーブ灰色	釉は薄い緑色、内面ににぶい凹線。外面ヨコナデ、内面ヨコヘラミガキ。	内面凹線より洛北。本山官山窯段階くらい。
143	SD2	須恵器 高杯	(9.8)	—	—	—		精選された胎土	灰白色	丁寧なヨコナデ	
144	SD2	土師器 碗	(2.0)	—	—	7.9		赤色風化砂粒を多く含む	橙色	外方にハの字状に踏んばるしっかりした高台。	
145	SD2	土師器 碗	(4.1)	—	—	—		チャート他の粗・細粒砂を多く含む	にぶい橙色	貼付高台剥離。内外面ヨコナデ。	
146	SD2	土師器 碗	(3.7)	—	—	7.0		赤色風化礫の細粒を多く含む	にぶい黄橙色	ベタ高台。糸切り。内外面ヨコナデ。	
147	SD2	土師器 碗	(2.7)	—	—	6.3		精選された胎土	灰白色	ベタ高台。糸切り。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
148	SD2	土師器 椀	(4.8)	14.4	—	—		細粒砂を含む	灰黄褐色	内外面ヨコナデ。	外面煤付着
149	SD2	土師器 椀	5.3	14.8	—	6.5	32.4	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む	橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
150	SD2	土師器 椀	(4.9)	18.0	—	—		赤色風化礫の砂粒を多く含む	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	外面煤付着
151	SD2	須恵器 椀	(2.4)	13.0	—	—		砂粒をほとんど含まない	灰白色	内外面ヨコナデ。	外面火樺
152	SD2	須恵器 椀	(4.4)	13.6	—	—		チャート、小礫、粗粒砂を多く含む	灰白色	内外面ヨコナデ。	
153	SD2	須恵器 椀	(4.5)	14.8	—	—		チャートの細粒を僅かに含む	淡黄色	内外面丁寧なヨコナデ。	内外面火樺
154	SD2	須恵器 椀	(1.65)	—	—	7.4		精選された胎土	灰黄色	糸切り。内外面ヨコナデ。	内面火樺
155	SD2	須恵器 椀	4.35	14.0	—	8.2		細粒砂を少量含む	灰白色	ベタ高台。糸切り。内外面ヨコナデ。	内外面火樺、外面煤付着。
156	SD2	黒色土器 A 類椀	(2.1)	—	—	8.2		チャート他の細粒砂を含む	にぶい黄橙色	断面三角形の貼付高台。高台脇に鑿状の突起が残る。	
157	SD2	黒色土器 A 類椀	5.7	14.3	—	8.6	39.9	細・粗粒砂を含む	黒褐色	球形状の底部に大きな高台がつく。外面ヨコナデ、内面ミガキ。	内外面激しく煤付着
158	SD2	黒色土器 A 類椀	(1.9)	—	—	—		細粒砂を含む	灰黄色	貼付高台剥離。底部糸切り・ナデ。外面ケズリ左←右(ロクロ右まわり)、内面ヘラミガキ。	
159	SD2	黒色土器 A 類椀	—	—	—	9.2		石英その他の砂粒を多く含む	灰褐色	外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ。	外面煤付着
160	SD2	須恵器 壺	(5.3)	15.4	—	—		精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。	
161	SD2	須恵器 壺	—	—	—	—		精選された胎土	灰白色	外面に松葉状のヘラ描き沈線による文様あり。内面ヨコナデ。	外面自然釉。
162	SD2	須恵器 甕	(6.3)	—	—	—		長石粒を多く含む	灰色	外面平行タタキ。内面ヨコナデ。	
163	SD2	須恵器 壺	(3.5)	—	—	3.3		精選された胎土	オリーブ灰色	壺付は凹状。内外面ヨコナデ。外底指頭圧痕。	
164	SD2	土師器 甕	(3.2)	11.8	—	—		精選された胎土	灰黄褐色	上胴部は強く内側に傾き、口縁は短く外反し端部は丸くおさめる。内外面ヨコナデ。	外面激しく煤付着
165	SD2	土師器 甕	(4.7)	17.0	—	—		石英、長石の細粒砂を含む	褐灰色	口縁内外面ヨコナデ、口唇水平な面をなす。胴部外面は指頭圧痕。	搬入品。外面激しく煤付着
166	SD2	土師器 甕	(4.3)	16.0	—	—		石英、長石他の細・粗粒砂を含む	灰黄褐色	口縁内外面ヨコナデ、上面は水平な面。胴部外面は指頭圧痕顕著。	搬入品
167	SD2	土師器 甕	(10.0)	25.0	—	—		石英、角閃石を多く含む	にぶい黄褐色	口縁端部上方につまみ上げ強くヨコナデ。口縁内外面ヨコハケ・ヨコナデ。胴部外面タテハケ。内面ヨコハケ。	
168	SD2	土師器 甕	(9.6)	27.6	—	—		チャートの粗粒砂を多く含む	灰黄褐色	口縁部上方に大きく拡張しヨコナデ。口縁内外面ヨコハケ。胴部外面タテハケ、ヨコハケ。内面ヨコハケ。	内外面煤付着
169	SD2	土師器 羽釜	(6.1)	20.3	—	—		石英の粗粒砂を多く含む	橙色	口唇斜めに面取り。内外面ヨコナデ。	外面激しく煤付着
170	SD2	土師器 羽釜	(5.1)	23.4	—	—		石英の粗粒を多く含む	にぶい褐色	口縁端部は内傾、口唇は外傾し、強いヨコナデ。鑿は三角形を呈し、強いヨコナデ。	内外面煤付着
171	SD2	土師器 羽釜	(5.6)	23.0	—	—		石英の粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	口唇面取り。幅2.6cmの鑿が巡る。鑿上下、端部ともに強いヨコナデ。胴部外面ヨコナデ。	内外面激しく煤付着
182	包含層	土師器 皿	1.0	7.9	—	—	12.7	精選された胎土	浅黄褐色	糸切り。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
183	包含層	土師器 皿	1.5	9.0	6.0	—	16.7	精選された胎土	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。	
184	包含層	土師器 皿	1.4	9.0	—	—	15.6	細粒砂を多く含む	にぶい橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
185	包含層	土師器 皿	1.6	10.0	—	—	16.0	精選された胎土	浅黄色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。	
186	包含層	土師器 皿	1.4	9.9	—	—	14.1	精選された胎土	浅黄橙色	外底ヘラ切り・ケズリ・ナデ。外底に平行圧痕あり。内外面ヨコナデ。	
187	包含層	土師器 皿	1.5	8.6	—	5.6	17.4	細粒砂を含む	浅黄橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
188	包含層	土師器 皿	(2.0)	—	—	—		石英、長石他の細粒砂を含む	にぶい橙色	内面暗文。内外面ヨコナデ。底外面ナデ。	搬入品
189	包含層	土師器 皿	(1.6)	11.2	—	—	14.3	精選された胎土	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。	
190	包含層	土師器 皿	1.5	14.0	—	—	10.7	細粒砂を含む	橙色	内外面器表の剥離激しい。	
191	包含層	土師器 皿	1.7	13.0	—	—	13.1	細粒砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ。	
192	包含層	土師器 皿	1.4	14.0	—	—	10.0	細粒砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ。	
193	包含層	土師器 皿	2.2	14.8	—	10.4	14.9	細・粗粒砂を多く含む	にぶい黄橙色	ヘラ切り・ナデ。内外面ヨコナデ。	
194	包含層	土師器 皿	(2.1)	17.0	—	—	12.4		明赤褐色	口縁内外面強いヨコナデ、端部肥厚。手づくねによる成形。	搬入品。外底煤付着。
195	包含層	土師器 杯	(1.4)	—	—	7.2		精選された胎土	にぶい黄橙色	糸切り。	
196	包含層	土師器 杯	3.2	10.4	—	—	30.8	精選された胎土	橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ。外底に粘土紐単位痕を認める。	
197	包含層	土師器 杯	(2.95)	—	—	7.6		細・粗粒砂を多く含む	浅黄橙色	糸切り。外面沈線が巡る。内面ヨコナデ。	
198	包含層	土師器 杯	(2.7)	—	—	8.0		石英粒を多く含む	橙色	ヘラ切り・ナデ。	
199	包含層	土師器 杯	(3.6)	—	—	9.2		砂粒をほとんど含まない	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	
200	包含層	土師器 杯	2.8	12.6	—	8.4		精選された胎土	橙色	内外面ヨコナデ。	
201	包含層	土師器 杯	(3.8)	—	—	8.0		チャート他の粗・細粒砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ。	
202	包含層	土師器 杯	2.6	11.7	—	—	25.8	精選された胎土	にぶい橙色	外底ヘラ切り後丁寧なナデ。内外面ヨコナデ。	
203	包含層	土師器 杯	2.25	13.0	—	9.3	16.9	赤色風化礫の細粒を含む	にぶい橙色	ヘラ切りか。内外面ヨコナデ。	
204	包含層	土師器 杯	4.2	14.7	—	7.8	28.6	チャート他の粗・細粒砂を含む	橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。	
205	包含層	土師器 杯	(3.5)	—	—	7.5		チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。	
206	包含層	須恵器 蓋	—	—	—	—		精選された胎土	灰色	摘み。	
207	包含層	須恵器 蓋	(1.25)	—	—	—		精選された胎土	灰色	摘みは凹状。内外面ヨコナデ。	
208	包含層	須恵器 蓋	(2.0)	21.6	—	—		精選された胎土	灰白色	内外面丁寧なヨコナデ。天井外面粗雑なナデ。	
209	包含層	須恵器 蓋	(2.8)	15.6	—	—		細・粗粒砂を多く含む	灰色	内外面ヨコナデ。ロクロ右まわり。	
210	包含層	須恵器 蓋	(1.8)	16.2	—	—		精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ。	
211	包含層	須恵器 杯	(1.5)	—	—	8.0		精選された胎土	灰白色	外底ヘラ切り・ケズリ・ヨコナデ。	
212	包含層	灰釉杯	(2.3)	14.5	—	—		精選された胎土	灰白色	内面全体施釉。	
213	包含層	須恵器 杯	(2.6)	—	—	8.3		精選された胎土	灰色	内外面摩耗が激しい。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
214	包含層	須恵器 椀	(2.1)	—	—	6.0	粗粒砂を多く含む	黒灰色	内外面ヨコナデ。		
215	包含層	須恵器 杯	(2.6)	—	—	13.0	細・粗粒砂を含む	灰色	外底爪状の連続圧痕あり。外底ケズリ・ナデ。		
216	包含層	須恵器 杯	(1.8)	—	—	7.4	精選された胎土	にぶい黄橙色	糸切り。内外面ヨコナデ。		
217	包含層	土師器 椀	(1.95)	—	—	7.6	精選された胎土	灰白色	外底糸切り・ナデ。内外面ヨコナデ。		
218	包含層	土師器 椀	(1.7)	—	—	7.7	石英粒を多く含む	橙色	ベタ高台。ヘラ切り。内外面ヨコナデ。		
219	包含層	土師器 椀	(5.5)	13.9	—	—	チャート、石英粒を多く含む	浅黄橙色	ベタ高台。糸切り。内外面ヨコナデ。外面ヨコナデ調整痕顕著。		
220	包含層	黒色土器 椀	(1.6)	—	—	8.0	石英、金雲母、赤色風化礫の細粒砂を含む	橙色	内黒。断面三角形の貼付高台。内面ヘラミガキ。		
221	包含層	黒色土器 椀	(2.0)	—	—	8.4	石英、長石の細・粗粒砂を含む	橙色	内黒。器表の荒れが激しい。		
222	包含層	須恵器 椀	(4.4)	15.6	—	—	チャートの細粒砂を含む	灰白色	口縁肥厚。内外面ヨコナデ。		
223	包含層	須恵器 椀	(3.5)	—	—	6.0	精選された胎土	灰白色	糸切り。内外面ヨコナデ。		
224	包含層	須恵器 椀	(2.5)	—	—	6.25	精選された胎土	淡黄色	しっかりした貼付高台。外底糸切り・ナデ。外面ケズリ左←右(ロクロ右まわり)。内外面ヨコナデ。	225 と同一個体の可能性	
225	包含層	須恵器 椀	(4.8)	16.8	—	—	精選された胎土	淡黄色	内外面ヘラケズリ、ヨコナデ。内外面火襷。	224 と同一個体の可能性	
226	包含層	瓦器 椀	(3.15)	14.6	—	—	精選された胎土	灰色	口縁内外面ヨコナデ。体部外面は指頭圧痕。内面ナデ。		
227	包含層	土師器 椀	5.4	16.8	—	6.2	石英他の粗・細粒砂を含む	にぶい黄橙色	貼付高台、糸切りか。ロクロ成形。外面下半かなり顕著なケズリ左←右(ロクロ右まわり)。		
228	包含層	瓦器 椀	(1.65)	—	—	高台径 4.4	精選された胎土	灰色	断面台形の低い高台。外面は指頭圧痕顕著。内面直線化した暗文。		
229	包含層	白磁	(2.8)	—	—	5.8	精緻な胎土	灰白色	釉は白濁色。外底、高台内外面強いケズリ。		
230	包含層	白磁 椀	(2.8)	—	—	6.0	精緻な胎土	灰白色	釉は透明度が高く高台外面まで施釉。外底・高台内外面強いケズリ(左←右)。		
231	包含層	白磁 椀	(2.6)	—	—	7.4	精緻な胎土	灰白色	釉は高台外面まで施釉。断面台形状の削り出し高台。ヘラケズリ後丁寧なナデ。		
232	包含層	白磁 椀	(1.7)	16.4	—	—	精緻な灰白色の胎土	灰白色	白色の釉。		
233	包含層	白磁 椀	(2.2)	18.2	—	—	精緻な白色の胎土	灰白色	玉縁。釉は透明度のある白濁色。貫入。		
234	包含層	白磁 椀	(2.55)	17.7	—	—	精緻な胎土	灰白色	玉縁口縁。釉はやや黄味を帯びた白濁色。		
235	包含層	白磁 椀	(2.35)	18.0	—	—	精緻な白色の胎土	灰白色	釉は白濁色。貫入。		
236	包含層	須恵器 壺	(4.9)	—	—	13.0	精選された胎土	灰色	外面左←右の削り、ヨコナデ。ロクロ左まわり。		
237	包含層	土師器 高杯	(5.6)	—	—	—	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む	橙色			
238	包含層	土師器 高杯	(5.2)	23.0	—	—	チャートの粗粒砂を含む	橙色	内外面器表剥離。		
239	包含層	須恵器 甕	—	18.5	—	—	精選された胎土	灰オリーブ色	口縁面取り。上端は刻目状の連続圧痕あり。口縁内外面ヨコナデ。胴部外面タタキ。	外面自然釉。	

II A 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高指 数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
240	包含層	土師器 甕	(4.0)	21.5	—	—	石英、長石の粗粒を含む	灰黄褐色	口縁端部上方につまみ上げ強くヨコナデ。口縁内外面ヨコハケ・ヨコナデ。体部外面タテハケ。内面ヨコハケ。		
241	包含層	土師器 甕	(6.5)	12.3	—	—	石英、角閃石を多く含む	にぶい黄褐色	口縁内面ヨコハケ。胴部外面タテハケ。		
242	包含層	土師器 甕	(6.9)	18.0	—	—	石英粗粒、金雲母を多く含む	にぶい黄橙色	口縁内外面強いヨコナデ、端部は上方につまみ上げて強いナデ。外面タテハケ、内面ナデ。		
243	包含層	土師器 甕	(4.3)	27.3	—	—	石英、角閃石を多く含む	にぶい黄褐色	口縁内外面ヨコナデ。端部は上方に拡張し、強いナデ。外面タテハケ。		
244	包含層	土師器 甕	(9.2)	23.8	—	—	石英、角閃石を多く含む	にぶい褐色	口縁内外面ヨコハケ・ヨコナデ。口唇強いヨコナデ。胴部外面タテハケ。内面ナデ。		
245	包含層	土師器 甕	(7.0)	29.0	—	—	石英の粗粒砂を多く含む	にぶい黄橙色	口縁内外面ヨコハケ・強いヨコナデ。端部は上方につまみ上げ強いヨコナデ。外面タテハケ。内面ヨコハケ・ナデ。		
246	包含層	土師器 甕	(6.2)	27.9	—	—	チャート、石英粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	口縁内外面強いヨコナデ。端部はつまみ上げて強いヨコナデ。外面タテハケ。内面ヨコナデ。	内外面煤付着	
247	包含層	土師器 甕	(4.5)	29.8	—	—	石英、角閃石を多く含む	浅黄色	口縁は上方に拡張し強いヨコナデ。内面ヨコハケ。胴部外面タテハケ、内面ヨコハケ。		
248	包含層	土師器 羽釜	(5.3)	20.0	—	—	石英、角閃石を多く含む	にぶい黄橙色	口縁および鏝上下ヨコナデ。体部外面タテハケ。		
249	包含層	土師器 羽釜	(4.0)	25.0	—	—	チャート、石英粗粒を多く含む	明褐色	内外面ヨコナデ。		
250	包含層	土師器 羽釜	(5.8)	22.0	—	—	石英の粗粒砂を多く含む	灰黄褐色	幅広い鏝を貼付。鏝および口縁内外面強いヨコナデ。		
251	包含層	移動式甕	—	—	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	鏝部。	煤付着	

II A 区瓦

図版 番号	出土地 点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	特徴	備考
174	SD2	瓦	9.6	9.1	2.05	220.0		淡黄色	内面布目圧痕。	
256	包含層	瓦	15.4	10.8	1.5		チャートの粗・細粒砂を多く含む	橙色	内面布目圧痕。	
257	包含層	瓦	8.95	11.0	1.6		チャートの細粒砂を多く含む	灰白色	内面布目圧痕。	

Ⅱ A 区石器

図版番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
86	包含層	石錘	10.0	7.5	2.7	304.0	砂岩	打欠。両端部を両側から打割している。二次的に被熱。	
98	SX1	叩石	9.6	7.35	4.5	410.0		両主面中央部、縁辺に使用痕。	
172	SD2	石斧	12.75	5.1	2.7	285.0		扁平片刃石斧。横断面は台形状。右側縁、基部付近には剥離痕や敲打痕が残る。	
173	SD2	砥石	11.4	5.5	3.9	355.0	砂岩	2面使用。条線が多く見られる。	
175	SD2	砥石	16.3	17.4	9.6	3100.0	砂岩	1面使用。	全体に煤付着
176	SD2	砥石	17.6	12.5	6.3	900.0	石英粗面岩	1面使用。多数の条線が走る。	
177	SD2	台石	26.2	20.7	6.2	5400.0	砂岩	中央部に凹み。礎石か。	上面煤付着
258	包含層	砥石	8.6	2.4	2.3	187.0	砂岩	4面使用。	

Ⅱ A 区土錘

図版番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	特徴	備考
81	包含層	土錘	4.7	1.1	1.0	3.3	精選された胎土	淡黄色	孔径 0.5cm 前後	
82	包含層	土錘	3.9	2.6	2.5	20.4	精選された胎土	淡茶色	孔径 0.8cm 前後	
83	包含層	土錘	3.3	2.2	2.0	13.1	精選された胎土	淡茶色	孔径 0.5cm 前後	
84	包含層	須恵器 土錘	5.2	2.2	1.9	23.4	精選された胎土	灰色	孔径 0.5cm 前後	
85	包含層	土錘	3.9	2.6	2.5	22.8	精選された胎土	淡茶色	孔径 0.8cm 前後	
178	SD2	土錘	6.75	3.1	2.95	63.1	砂粒をほとんど含まない		孔径 1.0cm 前後	
179	SD2	土錘	4.8	2.05	2.05	18.0	精選された胎土		孔径 0.6cm 前後	
252	包含層	土錘	3.7	1.2	1.05	3.5	細粒砂を含む	灰白色	孔径 0.5cm 前後	
253	包含層	土錘	3.35	1.8	1.6	7.4	精選された胎土	橙色	孔径 0.6cm 前後	
254	包含層	土錘	3.55	2.1	2.0	14.2	精選された胎土	灰黄色	孔径 0.8cm 前後	
255	包含層	土錘	4.75	1.4	1.3	7.9	細粒砂を含む	灰白色	孔径 0.5cm 前後	

Ⅱ A 区木

図版番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	特徴	備考
180	SD2	木片	8.4	1.8	1.1	9.3	つけ木とみられる。下端が炭化。	
181	SD2	木片	10.5	1.1	0.8	7.2	つけ木とみられる。下端が炭化。	

Ⅱ A 区鉄

図版番号	調査区	遺構 / 層序	分類	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	備考
259	Ⅱ A 南区	包含層	棒状鉄片	2.75	0.80	0.35	6.20	断面扁平。
260	Ⅱ A 南区	SD2 東側	棒状鉄片	4.15	0.75	0.45	6.70	断面扁平。先端が湾曲する。
261	Ⅱ A 南区	P10	鉄塊	3.40	2.70	2.10	31.10	
262	Ⅱ A 南区	包含層	板状鉄片	4.50	3.40	1.15	54.60	一端が屈曲する。
263	Ⅱ A 区	包含層Ⅱ層	腕状鉄滓	8.40	8.80	2.90	280.90	

3 II B区の調査

(1) 基本層準 (Fig.25)

① 北壁セクション

X層：黄褐色シルト層で調査区の基盤となっている層準である。弥生時代の遺構検出面である。
無遺物層である。

IX層：暗褐色シルトに黄褐色シルトが混ざっている層準である。最も厚いところで層厚30cmを測る。
弥生時代後期末の遺構、古代の検出面である。

VIII層：古代の大溝SD1の埋土である。

VII層：暗灰黄色シルトにマンガンを少量含む層準である。層厚10cm前後を測り、古代の遺物包含層である。

VI層：VII層に類似するがマンガンを多く含む層準である。層厚は5cm前後である。

V層：灰色粘土質シルトに鉄分を含む層準である。東部では堆積が見られない。層厚は0～25cmを測る。

IV層：III層に類似するが、若干鉄分を含む。層厚は0～10cmを測る。旧耕作土である。

III層：青灰色粘土質シルトに小礫が入っている。層厚は厚いところで25cmを測る。旧耕作土でII層を盛土する際にかなり削平されているところがある。

II層：客土である。最も厚いところでは60cmを測る。圃場整備で盛土された山土である。

I層：現在の耕作土である。層厚40cm前後を測る。

② 南壁セクション

X層：褐色シルト層で調査区の基盤となっている層準である。無遺物層である。

IX層：暗褐色粘土質シルトに褐色土が混ざっている層準である。層厚は0～5cm前後で東部の一部にのみ認められる。

VIII'層：VIII層に類似して炭化物を含む。東部の一部にのみ堆積する。

VIII層：暗褐色粘土質シルトで、層厚5～20cmを測る。弥生時代の遺構が掘り込まれている。

VII層：暗褐色シルトに黄褐色シルト、炭化物を含む。層厚6～15cmを測る。弥生時代の遺構が掘り込まれている。

VI層：暗褐色シルトに黄褐色シルトが混ざる。層厚15～30cmを測る。弥生時代の遺構が掘り込まれている。北壁のIX層に対応する。

V層：暗灰色シルトにマンガンを含む。層厚0～20cmを測る。調査区の東部に堆積する。

IV層：灰色粘土質シルトに褐色粘土を含み、鉄分も含まれる。層厚5cm前後である。北壁のV層に対応する。

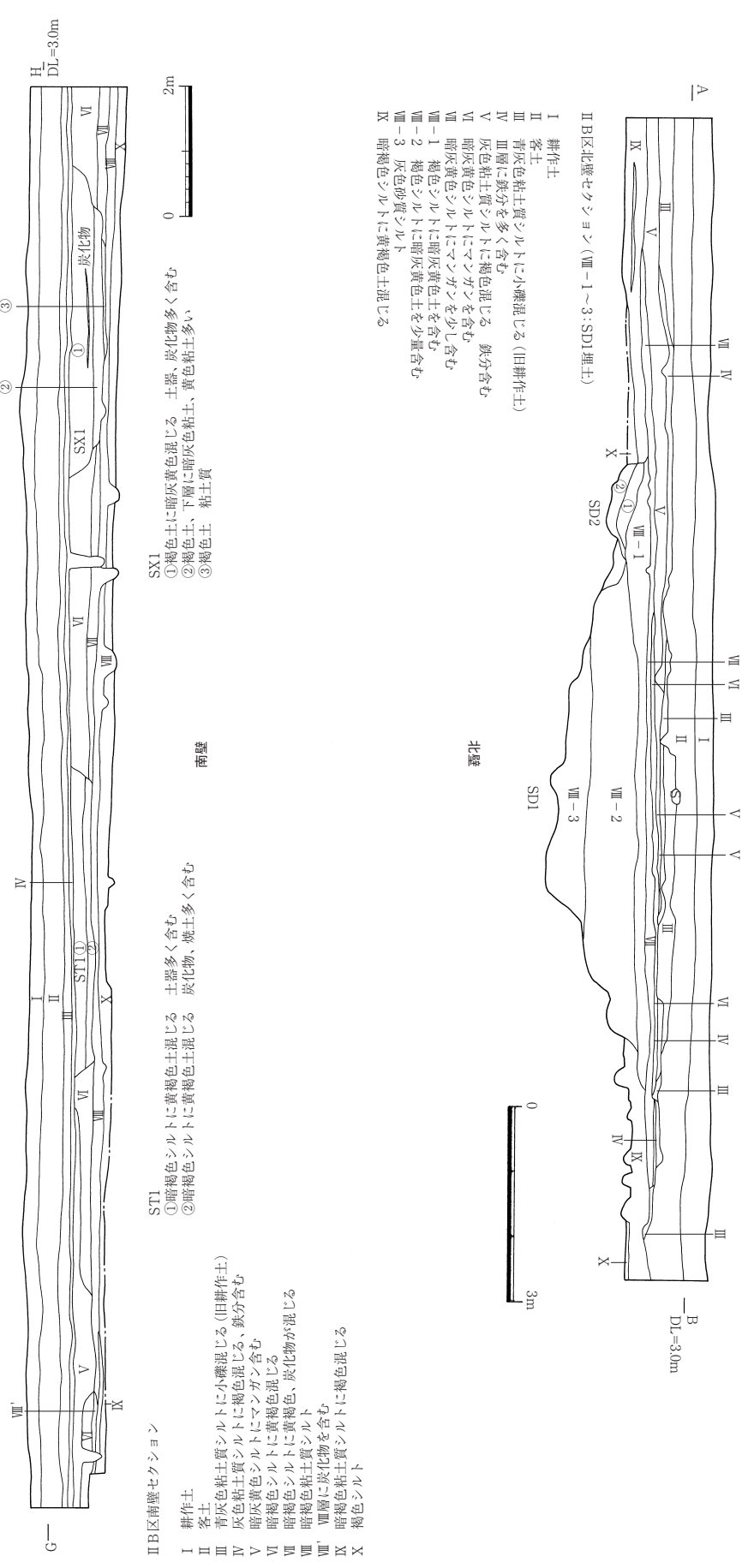
III層：青灰色粘土質シルトに小礫が入っている。北壁のIII層に対応する。旧耕作土である。

II層：客土である。層厚30～40cmを測る。圃場整備で盛られた山土である。

I層：現在の耕作土である。層厚20cm前後を測る。



Fig.24 II B区 全体図



- II B区北壁セクション (Ⅷ-1~3; SD1埋土)
- I 耕作土
 - II 客土
 - III 青灰色粘土質シルトに小礫混じる (旧耕作土)
 - IV 血層に鉄分を多く含む
 - V 灰色粘土質シルトに褐色混じる 鉄分含む
 - VI 暗灰黄色シルトにマンガンを含む
 - Ⅷ 暗灰黄色シルトにマンガンを少し含む
 - Ⅷ-1 褐色シルトに暗灰黄色土を含む
 - Ⅷ-2 褐色シルトに暗灰黄色土を少量含む
 - Ⅷ-3 灰色砂質シルト
 - IX 暗褐色シルトに黄褐色土混じる

- 北壁
- ① 褐色土
 - ② 褐色土
 - ③ 褐色土

- 南壁
- ① 暗褐色シルトに黄褐色土混じる
 - ② 暗褐色シルトに黄褐色土混じる

- II B区南壁セクション
- X 褐色シルト
 - Ⅸ 暗褐色粘土質シルトに褐色混じる
 - Ⅷ 暗褐色粘土質シルト
 - Ⅵ 暗褐色粘土質シルト
 - Ⅴ 暗褐色シルトに黄褐色土混じる
 - Ⅳ 暗褐色シルトに黄褐色土混じる
 - Ⅲ 暗褐色シルトに黄褐色土混じる
 - Ⅱ 暗褐色シルトに黄褐色土混じる
 - I 暗褐色シルトに黄褐色土混じる

Fig.25 II B区 基本層準

(2) 検出遺構

調査区の中央部では、北壁基本層準Ⅸ層で弥生時代後期末から古代の遺構を検出できたが、東部と西部はⅩ層まで下げなければ弥生後期末から古墳時代の遺構を検出することができなかった。Ⅸ層で検出した遺構を上層、Ⅹ層で検出した遺構を下層として全体図に示した。各遺構の記述では下層該当の遺構についてのみ下層の文言を入れた。

① 溝

SD1 (Fig.26～33・43)

調査区の東端で検出した古代の大溝である。基本層準北壁のⅨ層、南壁のⅥ層を掘り込んでいゝる。南西方向から東北方向(N-26°-E)に延びる。上場の幅3.5m、下場の幅2.2m、深さは南壁で90cm、北壁で130cmを測る。立ち上がりは比較的緩やかである。南壁側の床面には凹凸が認められる。埋土はシルトを基調とする。

遺物の取り上げは、床面と埋土中とに分け、埋土は10～20cm毎に5回に分けて人工層位で取り上げた。床面、埋土下層(4・5回)、埋土中層(3回)、埋土上層(1・2回)出土の遺物として図示した。須恵器供膳形態は床面からの出土が群を抜いて多く、土師器供膳形態は埋土上層からの出土が多い。床面出土遺物 (Fig.27・28・31)

供膳形態は、土師器皿(1)、須恵器皿(2～6)、同杯(7～16)、同蓋(17～23)、同高杯脚部(24・25)、緑釉椀(26)、同皿(27・28)が見られる。皿は土師器・須恵器ともに精選された胎土が使われ、丁寧な横ナデ調整がなされている。須恵器皿の口縁部は面取りしているもの(2)、摘み上げるもの(3・4・6)、丸くおさめるもの(5)が見られる。杯も総じて精選された胎土が用いられている。底部はヘラ

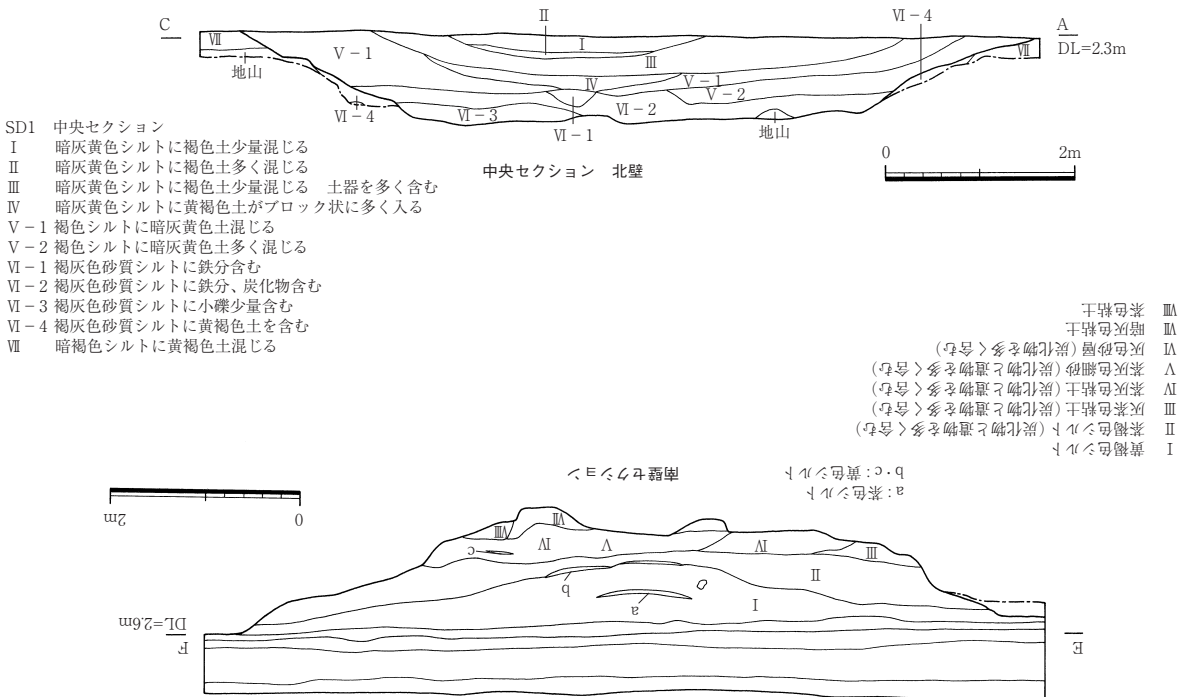


Fig.26 SD1 セクション

切り後、削り+ナデ調整で丁寧に仕上げられているものが多い。10の外底には×のヘラ記号が見られる。高台は外縁部に付くタイプ(8・14・16)とやや内側に付くタイプ(10・12)が見られるが、高台置付は総じて凹状をなしている。蓋も精選された胎土が用いられ丁寧な横ナデ調整で仕上げられている。18は環状摘み、20は宝珠摘みを持つ。23外面には「大」の線描きが見られる。高杯24は杯部が接合部から剥離している。緑釉はすべて陶胎、27の外底は糸切り+削り+ナデが施される。篠窯の製品で9世紀後半に属する。28は蛇目高台を有する。

貯蔵形態は壺(29・32・134)、甕(30・31)が見られる。134は底部片で内面には指頭ナデが顕著に残る。

煮沸形態は甕(33・34)が見られる。33は砂粒を含まない精選された胎土、34は先述の胎土①類に属する。35・36は製塩土器口縁部細片で、内面に布目圧痕が認められる。37～45は土錘で43が須恵質、他は土師質である。47・48は平瓦細片で凹面に布目、凸面に格子目の叩きが見られる。49は丸瓦の玉縁部分である。凸面は丁寧なナデ、凹面には布目圧痕が見られる。46は扁平片刃石斧の基部片である。両側縁が欠落しているが刃部に向かって撥状に広がる平面形態をなすものである。石材は超塩基性岩である。

下層出土の遺物(Fig.29・31・32・43)

供膳形態は、土師器皿(50～52)、同杯(53～59)、同高杯(76)、須恵器皿(60・61・63・64)、同杯(62・65・66・69)、同椀(67)、同高杯(73)、同蓋(70・71)、緑釉皿(68)が見られる。この他図示し得なかったが黒色土器A類の細片が1点出土している。土師器は各器種ともに精選された胎土が用いられ、51と76にはヘラミガキが認められる。51は高台が剥離している。56は椀の可能性もある。須恵器皿は精選された胎土を用い、丁寧なナデ調整がなされている。口縁部は端部を摘み上げるもの(60・61・64)、外方に摘み出すもの(63)が見られる。杯は精選された胎土が用いられ丁寧な横ナデ調整がなされるもの(62・65・69)と砂粒を多く含み粗雑な仕上げの66がある。66は高台形態もかなり異なっている。69は高台が剥離している。椀(67)は糸切りである。73は高杯脚部である。蓋(70・71)も精選された胎土が用いられ丁寧な横ナデ調整で仕上げられている。70には宝珠摘みがある。緑釉皿底部(68)は、軟胎、高台を削り出し外底は糸切り+削り+ナデ仕上げ、洛北産9世紀前半に属する。この他に鉄鉢(74)が見られる。

貯蔵形態は須恵器壺(75・78・79・80・133)、甕胴部細片(81)、平瓶の把手(77)である。壺はすべて精選された胎土が用いられる。80はいびつに変形している。置付は内傾する。81は外面格子の叩き、内面は著しく研磨されている。転用品の可能性もある。77の断面は六角形である。72は壺蓋である。

煮沸形態は甕(139)、移動式竈の傘と見られる(145)がある。甕は胎土①類である。145は端部を面取り、外面は粗いハケ調整が認められる。

この他、製塩土器口縁部片(142・143)、土師質土錘(146)、平瓦(151)、棒状の鉄片(216)が見られる。151の凹面は布圧痕と3cm幅の模骨痕が認められる。

中層出土の遺物(Fig.30)

供膳形態は、土師器皿(82・83・85・86)、同杯(84)、須恵器皿(87・89)、同杯(88・91～94)、同蓋(90)、緑釉(95～97)である。82は糸切りの小皿である。83・85・86は精選された胎土が用いられ83にはヘラミガキが認められる。杯(84)も精選された胎土で内面にはヘラミガキが施される。須恵器

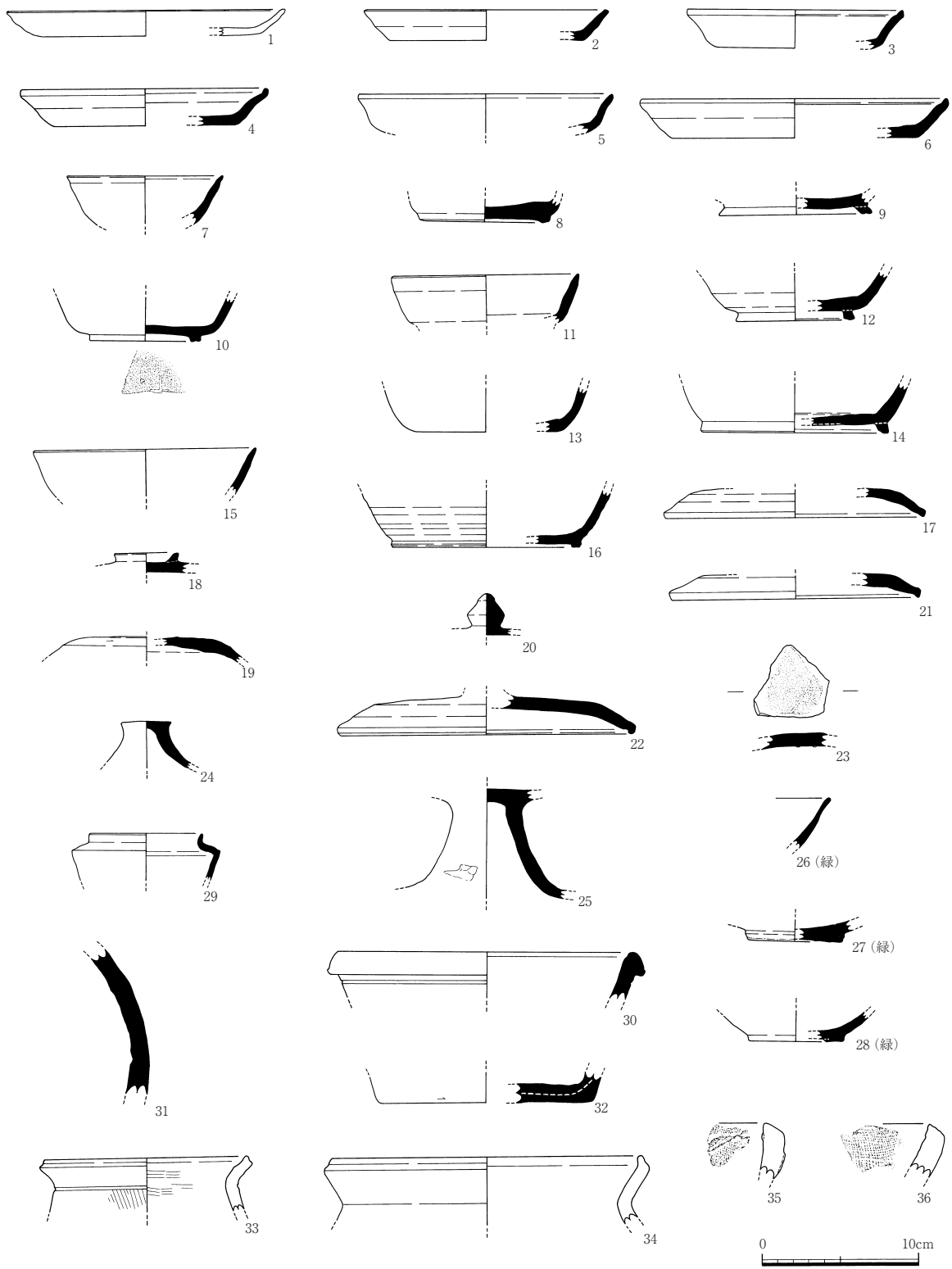


Fig.27 SD1 床面出土遺物 (1)

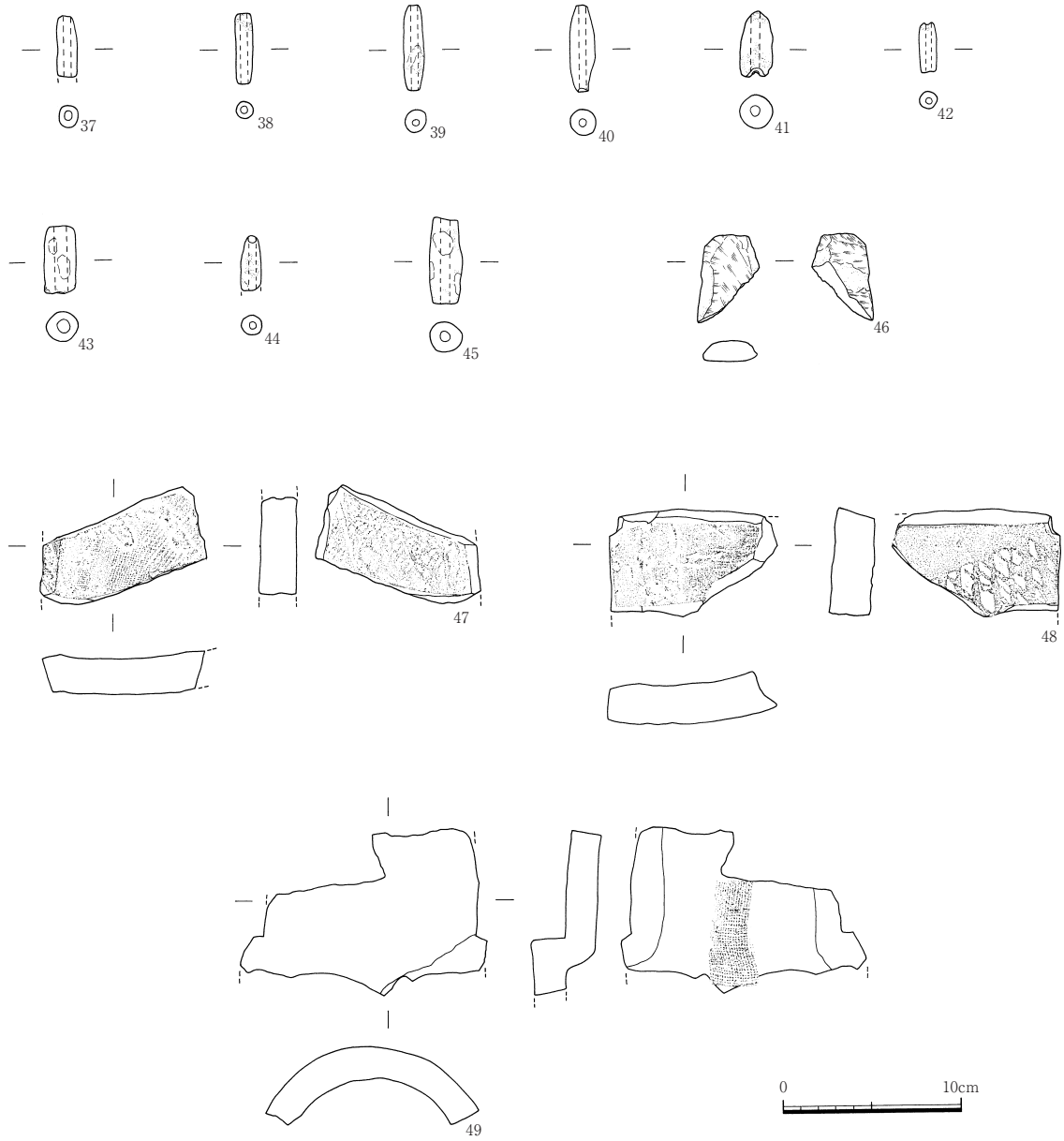


Fig.28 SD1 床面出土遺物(2)

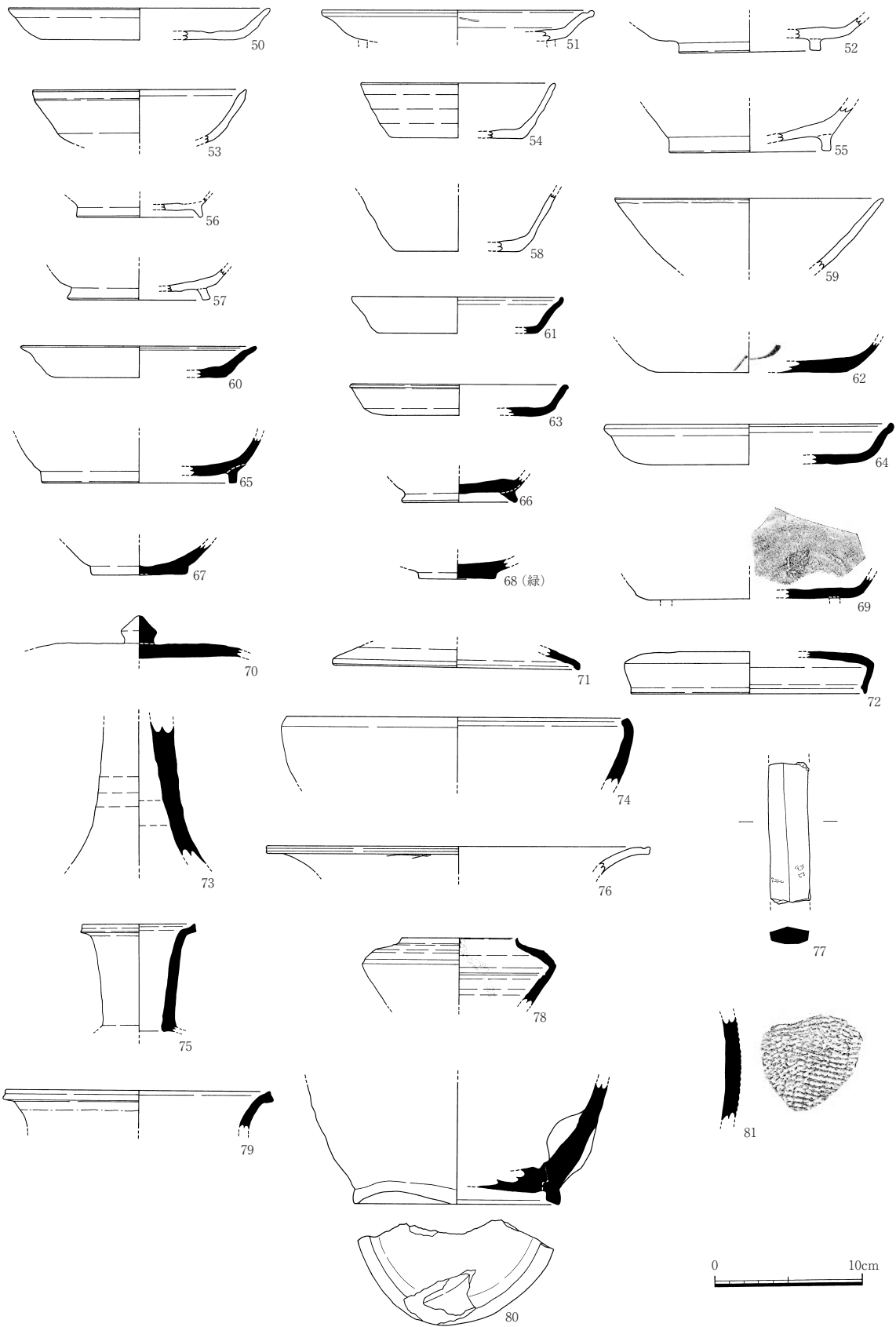


Fig.29 SD1 下層出土遺物

皿も精選された胎土で口縁部を摘み上げている。丁寧な横ナデ調整がなされている。杯は92が粗粒砂を含むが他は精選された胎土が用いられ、丁寧な横ナデ調整がなされる。92は見込に鈍い沈線が巡る。92・93の畳付は凹状を呈する。蓋(90)は口縁部端部が凹状をなす。緑釉は95・96が軟胎、96は陶胎である。97外面には太い沈線が巡る。

貯蔵形態は須恵器壺頸部(98)と同胴部(99・100)が見られる。後者は高台を有する。

煮沸形態は、土師器甕(101～104)である。101は口縁部が直線的に立ち上がる。他は「く」字状に外反する。胎土はともに①類である。この他平瓦(105)、土錘(106)が見られる。平瓦は凹面に布目圧痕、凸面に縄蓆の叩きが施されている。

上層出土の遺物(Fig.31・32・42)

供膳形態は、土師器皿(111・112)、同杯(107～110・113)、須恵器皿(114・115)、同杯(116～118・121・122)、同蓋(119・120)、同高杯(131・132)、緑釉(124・126～130)、灰釉(125)、黒色土器A類椀(123)が見られる。土師器皿は高台を有し、111は足高高台である。杯(107・109)は精選された胎土で丁寧な横ナデ調整がなされている。112は回転ナデ調整痕が顕著に見られる。須恵器皿は精選された胎土で丁寧な横ナデ調整がなされ、口縁部は摘み上げている。杯は121が粗粒砂を含むが、他は精選された胎土である。122の高台畳付は凹状をなす。121の外底は糸切りと見られる。蓋は擬宝珠摘みを持つ。高杯(131)は、粗粒砂を含む胎土で脚に沈線を巡らす。緑釉・灰釉は細片である。124・127・129・130は軟胎、126・128は陶胎である。124・128は口縁部が外反し、126は口縁部外面に沈線が巡る。

貯蔵形態は須恵器長頸壺口縁部(135)と同胴部把手(136)が見られる。前者は胴部との接合部で剥離している。後者は径1cmの円孔が穿たれている。煮沸形態は黒色土器甕(137)、土師器甕(138)、同羽釜(140)が見られる。137は搬入品である。口唇部は丁寧に面取られ、胴部外面は横方向のヘラミガキがなされる。138・139は胎土①類である。

この他、製塩土器(141・144)、土錘(147～149)、平瓦(150)、打ち欠き石錘(151)、中国鏡(215)、鉄片(217・220・221)、鉄滓(223)が見られる。150は凹面布目圧痕、凸面縄蓆の叩きが見られる。石錘は砂岩製で65gを測る。中国鏡はSD1の検出面から出土している。3.5×2.8cmの鏡片で漆黒色に発色し重量感がある。内区に櫛目文が見られる。一端に径5mmの円孔が穿たれており懸垂鏡として使用されたものと考えられる。鏡面・裏面ともに摩滅が著しい。平縁部の一方の破断面と内区側の破断面は摩滅が認められるが、他の破断面は摩滅が全く認められない。付近に弥生後期末の遺構が存在することから当該期に廃棄されたものが混入したものであろう。217は棒状、他は扁平な板状である。220は刀子の可能性もある。

SD1の掘削時期を明らかにすることは難しいが、床面に9世紀前半代の緑釉陶器が認めることから、この時期にはすでに機能しており、中層に10世紀代の糸切り小皿が出土していることから、埋没年代は10世紀代に求めることができよう。

SD2(Fig.24・33)

SD1の西肩部に接して検出した。SD1に切られている。確認延長5.8m、最大幅は北壁部分で1.5m、深さ40cm前後を測る。鉤に屈曲し北に向かって幅・深さを増している。埋土は暗褐色のシルトを基調とする。遺物は弥生後期終末から古墳時代初頭の土器細片が多く出土しているが、図示できた

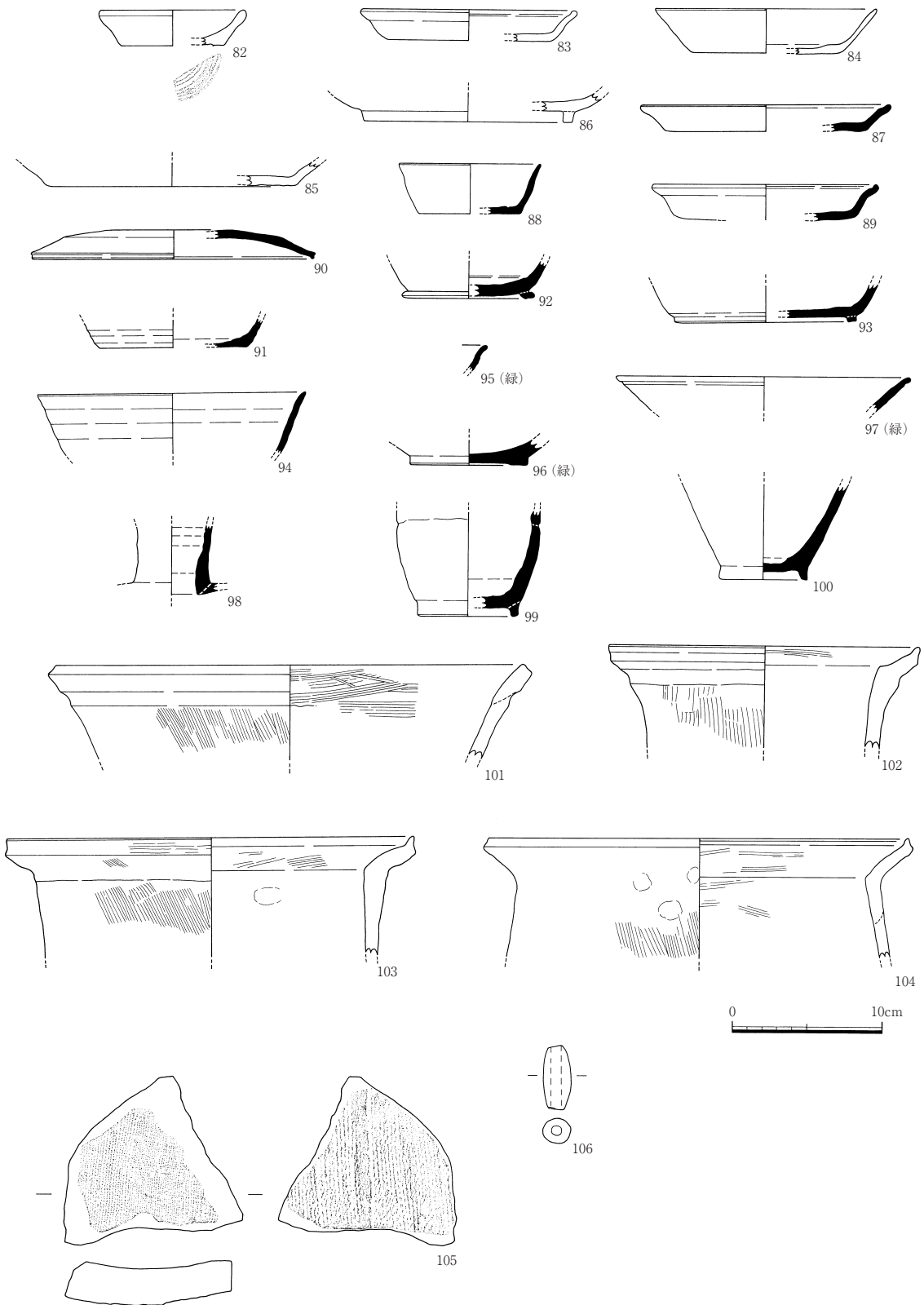


Fig.30 SD1 中層出土遺物

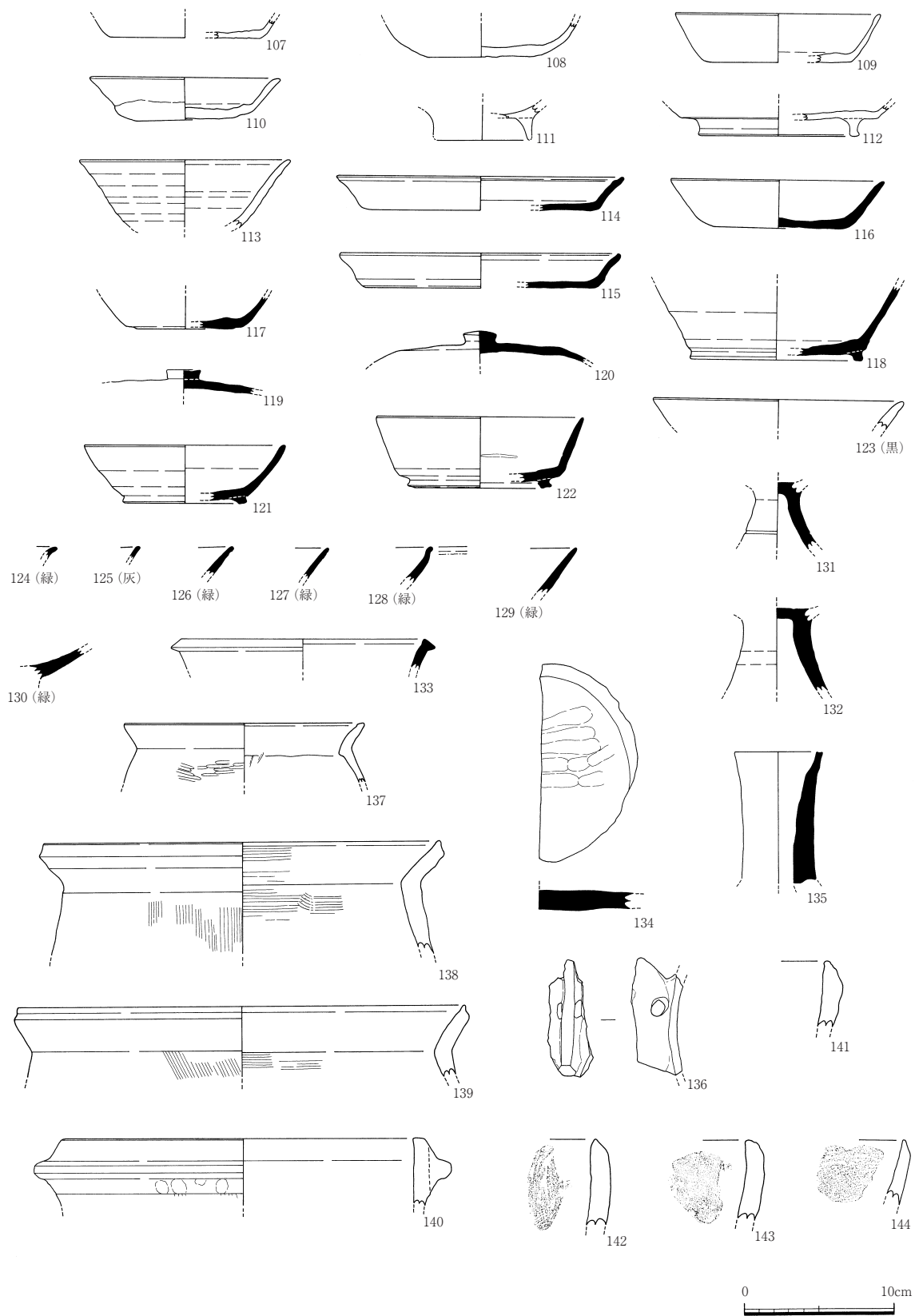


Fig.31 SD1 上層・下層・床出土遺物
 (上層: 107~132・135~138・140・141・144、下層: 133・139・142・143、床: 134)

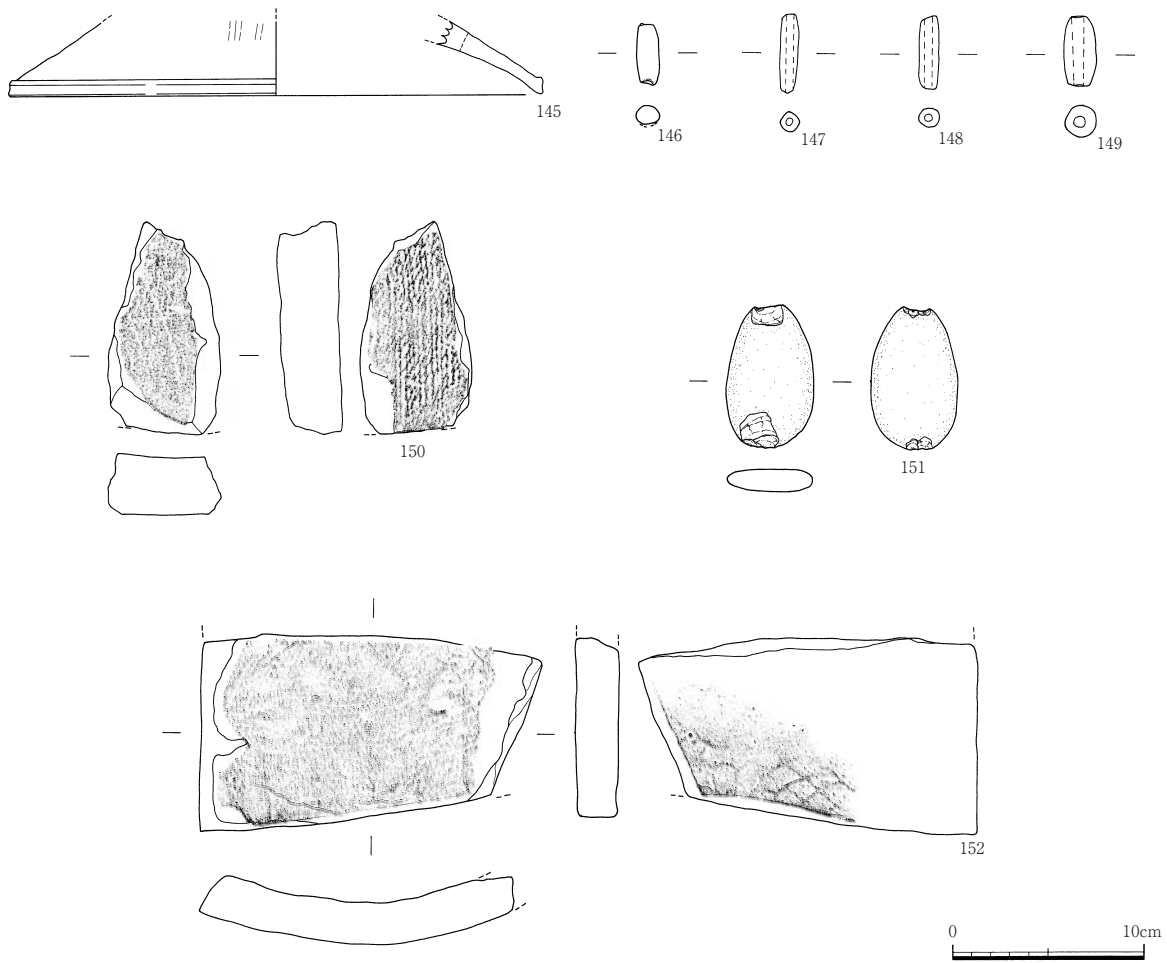


Fig.32 SD1 上層・下層出土遺物
 (上層：147～150・152、下層：145・146・151)

ものは甕の口縁部細片1点(153)のみである。河内産庄内甕の搬入品である。

SD3 (Fig.24・33)

調査区中央部で検出した細長い溝である。確認延長2.2m、最大幅20cm、深さ6cmを測り、北に向かって幅・深さを増している。埋土は褐色粘土で近世陶磁器碗の底部が1点(156)出土している。

SD4 (Fig.33)

調査区西部で検出した。古代の遺物包含層を切って掘削された溝である。南西から北東方向(N-23°-E)に走る確認延長9.3mの大溝であるが、激しく攪乱を受けている。また埋没後に近世の溝が重複して掘られていることが南壁セクションで判明した。幅は4～7m、深さ90cm前後を測る。北に向かって幅を広げている。埋土はシルトを基調とする。遺物は弥生時代後期末、古代、中世の土器が出土しているが出土量は少ない。白磁小皿(154)、同皿(155)、青磁碗(157)、土師器脚部

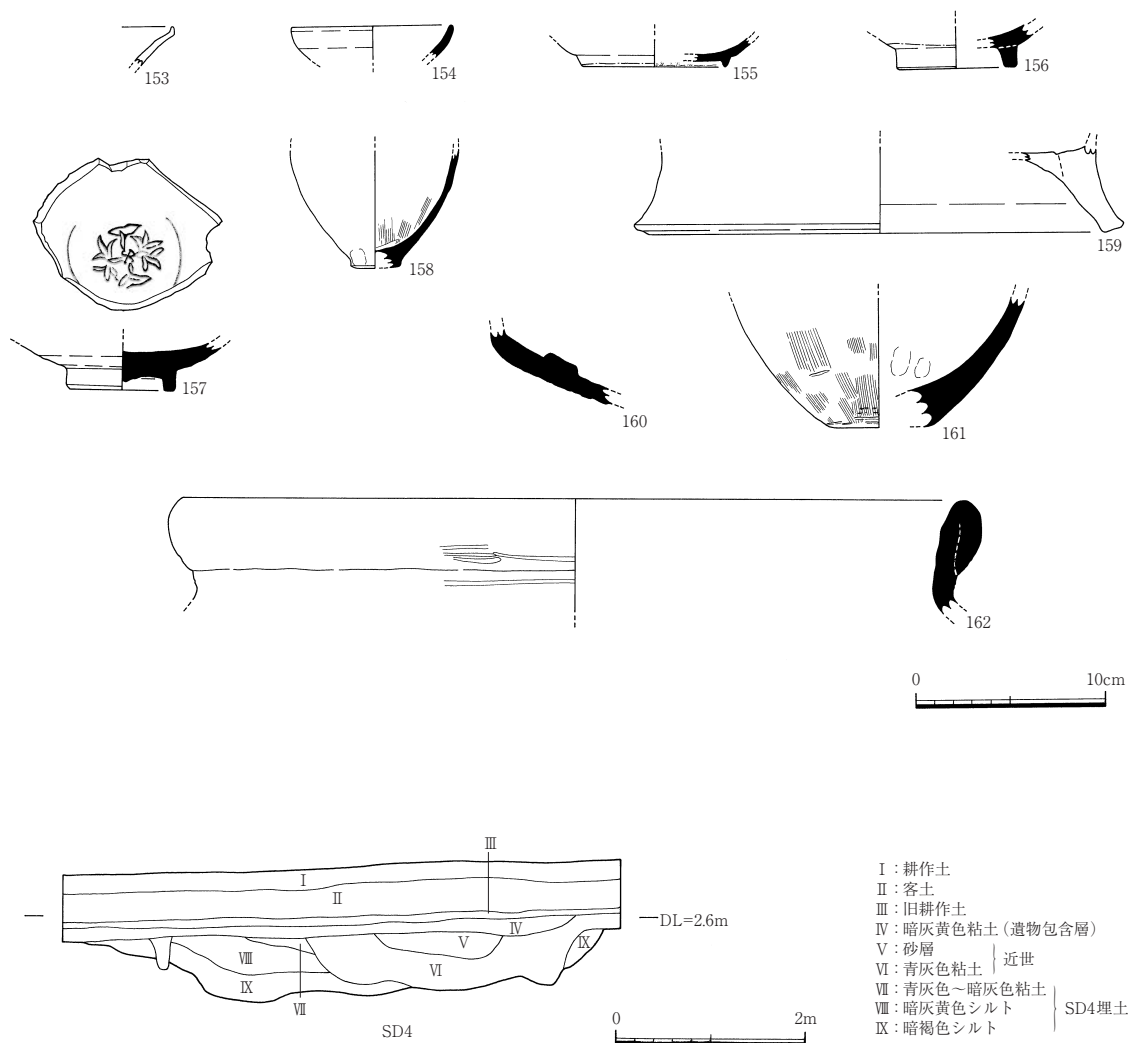


Fig.33 SD2出土遺物・SD4セクション・出土遺物

(159)、須恵器大甕(160)、備前甕(162)を図示した。154は森田勉分類のD類、155はE類に属する⁽¹⁾。157は内面に印花文が見られる。胎土は褐色を呈し重量感がある。上田秀夫編年のD類に属する⁽²⁾。160は肩部外面に円形浮文が貼付されている。SD4の掘削時期を明らかにすることはできないが、貿易陶磁器や備前焼などから15世紀後半～16世紀初めには一旦埋没し、その後近世に至って小規模な溝が掘削されたものである。

SD5 (Fig.24)

近代の暗渠である。

SD6 (Fig.24・33)

調査区中央部に位置する。南東から北西方向(N-20°-W)に走る溝である。確認延長5m、幅15～37cm、深さ7～12cm、北に向かって幅・深さを増している。埋土は暗褐色シルト、遺物は弥

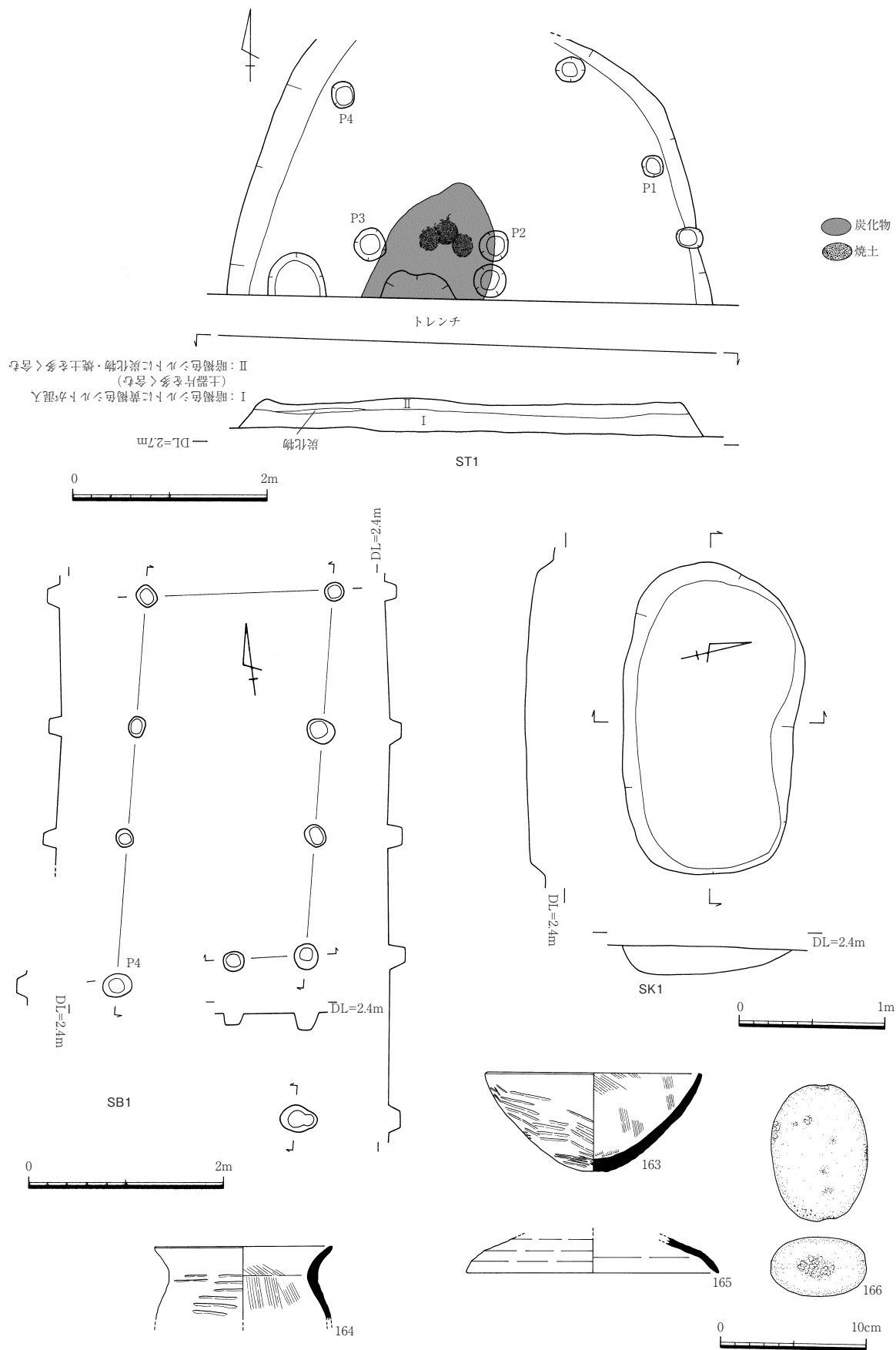


Fig.34 ST1・SB1・SK1 平面・セクション及びST1・SK1出土遺物

生後期末から古墳時代初頭の土器が出土している。床面出土の底部を2点(158・161)図示し得た。弥生後期末から古墳時代初頭の溝である。

② 竪穴住居

ST1 (Fig.34)

調査区中央、南寄りに位置する。プランから竪穴住居として把握した。長軸5m前後の隅丸方形あるいは楕円形状の竪穴住居が想定されるが、北壁の一部はラインを捉えることができなかった。南壁の断面では深さ30cmを測る。埋土はシルトを基調とするI、II層である。壁は斜めに立ち上がっている。床面南部には炭化物の広がりや焼土が認められる。炭化物の下で、南の調査区外にかかる土坑状の落ち込みが見られる。中央ピットである可能性もある。断面においては壁溝らしき落ち込みも認められるがプランでは捉えることができなかった。壁際に4個、中央部に3個のピットがあるが、竪穴住居との関係を明らかにすることはできない。

遺物は、埋土I層に多いが図示できたのは甕(164)、鉢(163)、叩石(166)のみである。叩石は激しく被熱赤変している。P1～P4からも土器細片が出土している。ST1は弥生後期末から古墳時代初頭に属する。

③ 掘立柱建物 (Fig.34)

ST1と一部重複しているが先後関係は不明である。梁間1間(5.5m)、桁行4間(1.9m)、棟方向N-14°-Eの建物である。柱穴は径15cm前後の円形、深さは10cm前後である。遺物はP4から弥生土器細片が少量出土しているのみである。

⑤ 土坑

SK1 (Fig.34)

調査区東寄りに位置する。楕円形のプランを呈し長軸2.1m、短軸1.2m、深さ20cmの土坑である。断面は皿状である。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は、弥生後期末・古墳時代初頭から古代の土器細片が出土しているが、図示できたものは須恵器蓋1点(165)のみである。

SK2 (Fig.35)

調査区中央部に位置し、SK11とSX1を切っている。北側が攪乱を受けているが、楕円形のプランを呈し長軸1.9m、短軸1.7m、深さ50cmの土坑である。断面は逆台形状を呈する。埋土は黄褐色シルトを基調とする。床面および埋土中より土師器杯(167～169)、須恵器蓋(170)が出土している。土師器杯は精選された胎土が用いられ、手捏成形である。167・168は口縁部内面に鈍い沈線が巡り内面には放射状の暗文が施されている。169は外面にヘラミガキ、内面には螺旋状の暗文が施されている。168と同一個体の可能性が高い。170は口縁部を下方に摘みだし、外面は丁寧に面取りが成されている。当地域においては数少ない手捏成形の土師器の一括資料である。

SK6 (Fig.36)

調査区中央部に位置する。長楕円形のプランを呈し長軸1.7m、短軸0.5m、深さ10cm、断面皿状の土坑である。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが、甕底部1点(171)を図示し得たのみである。

SK7 (Fig.36)

調査区西寄りに位置する。SD5に西半分を大きく切られている。長軸60～70cm前後の楕円形

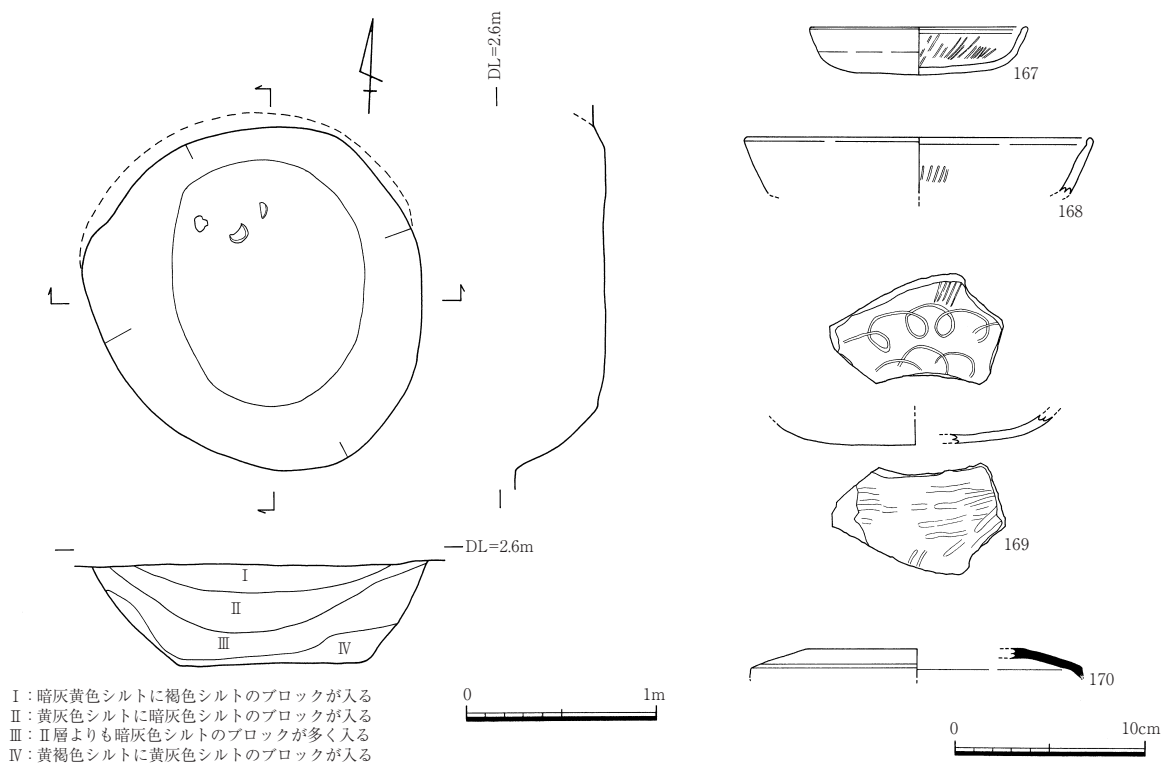


Fig.35 SK2 平面・セクション及び出土遺物

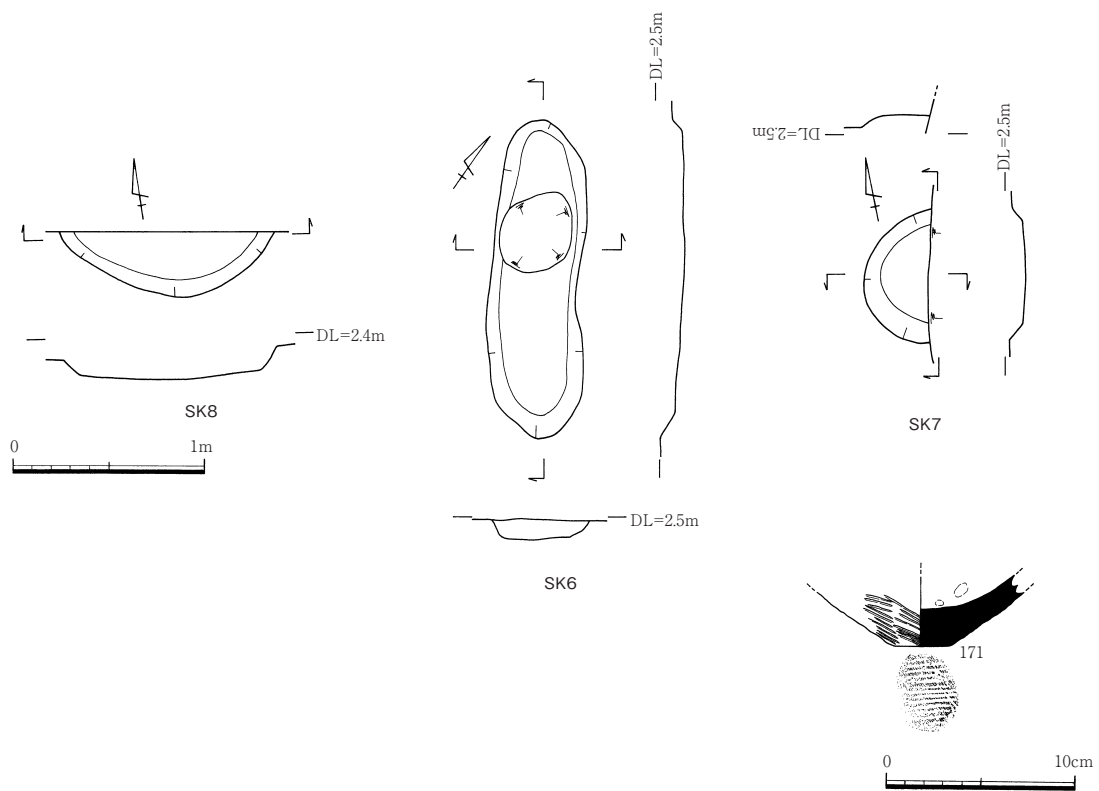


Fig.36 SK6~8 平面・セクション及びSK6出土遺物

ランを呈するものと考えられる。深さ10cm、断面形は皿状である。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK8 (Fig.36)

調査区西部、下層で検出した。北側を攪乱によって大きく切られており規模は不明である。

SK9 (Fig.37)

調査区西部、下層で検出した。北側半分が攪乱を受けている。細長い溝状の土坑である。長軸3.8m、短軸0.9m、深さ30cmを測る。埋土は褐色シルトを基調とし炭化物を多く含んでいる。遺物は、床面および直上層から弥生後期末から古墳時代初頭の土器片が比較的多く出土しているが、図示できたものは甌(172)、底部(173)、鉢(174)である。172は焼成前底部穿孔である。

SK10 (Fig.37)

調査区西部、下層で検出した。北半分は攪乱によって削平されている。長楕円形のプランが想定されるが規模は不明である。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK11 (Fig.37)

中央部に位置しSK2に切られている。楕円形のプランを呈し、長軸1.7m、短軸0.9m、深さ10cmを測り、断面形は皿状である。埋土は黄褐色シルトを基調とする。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK12 (Fig.37)

調査区の東寄りに位置し一部をSK1に切られている。楕円形状のプランを呈し長軸1.5m、短軸0.7m、深さ10～20cmを測り、断面形は船底状である。埋土は黄褐色シルトを基調とし、床面に炭化物が薄く層をなして堆積している。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK13 (Fig.37)

調査区東端部、下層で検出した。楕円形のプランをなし長軸1.2m、短軸0.56m、深さ10cmを測る。周辺部に炭化物が広がる。埋土は褐色シルトを基調としII層には炭化物を多く含んでいる。遺物は弥生後期末から古墳時代初頭の土器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK14 (Fig.37)

調査区中央部の南に位置する。大部分が調査区外に出ており、規模は不明である。埋土は褐色シルトを基調とし、遺物は見られない。

SK15 (Fig.37)

調査区中央部北に位置する。隅丸方形ないしは楕円形状のプランで短軸1.1m、深さ25cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐色シルトを基調とし、遺物は認められない。

⑥ ピット

P1 (Fig.38・39)

調査区の東端、下層で検出した。径50cmの円形で深さ20cmを測り、断面は台形である。後述する土器集中2の土器群を取り上げた後に検出した。埋土は茶褐色シルトで、埋土中から比較的多くの土器が出土している。壺(176・177)、甕(179・180)、鉢(175)、高杯(182)、底部(183・185)を図

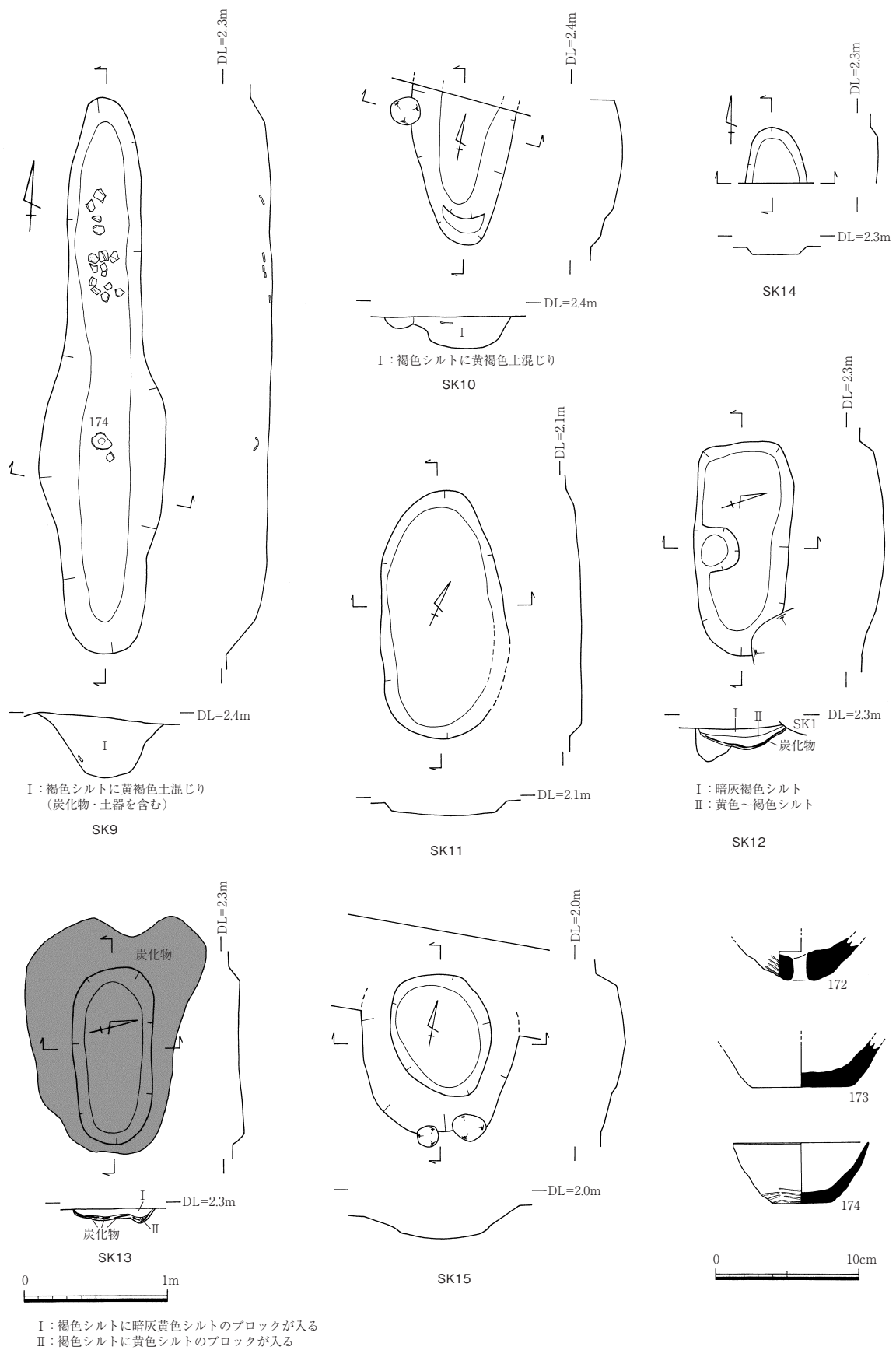


Fig.37 SK9～15 平面・セクション及びSK9出土遺物

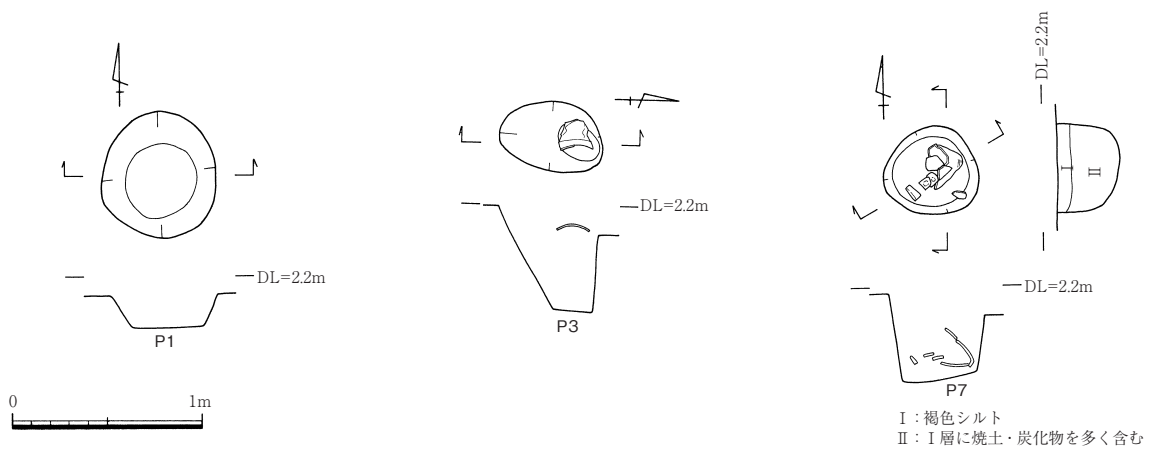


Fig.38 P1・P3・P7 平面・セクション

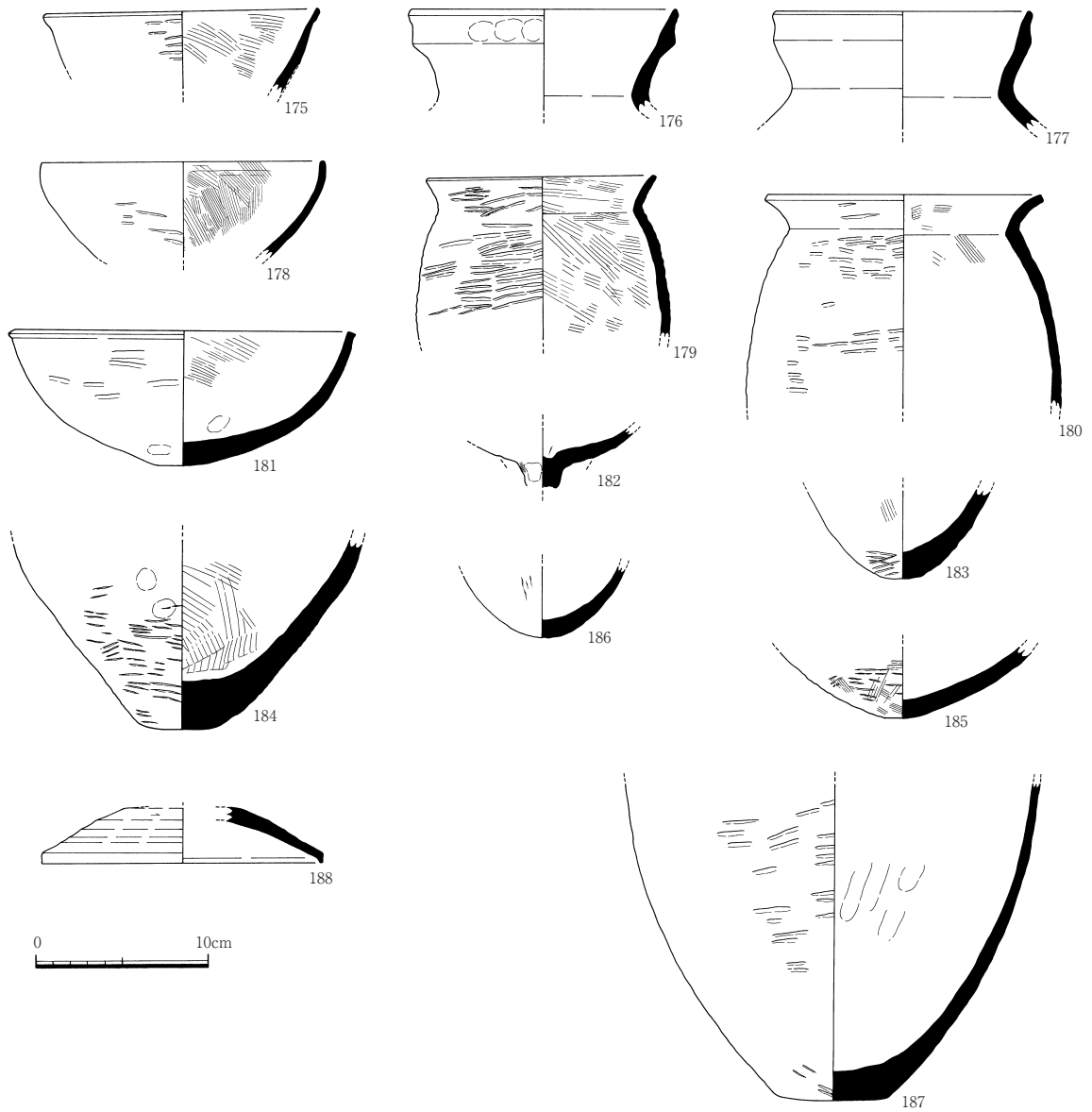


Fig.39 P1・P2・P3・P7 出土遺物
(P1 : 175~177・179~185、P2 : 188、P3 : 178、P7 : 186・187)

示した。弥生後期末から古墳時代初頭の土器である。なお、検出面の上を被うような状態で出土した土器群は土器集中2と関係がある可能性が高い。

P2 (Fig.39)

調査区東北端で検出した。22×36cmの楕円形プランを呈し、深さ20cmを測る。埋土は茶褐色シルトで、須恵器蓋(188)が出土している。

P3 (Fig.38・39)

SK12の東隣にある。40×55cmの楕円形プランを呈し、深さ50cmを測る。埋土は茶褐色シルトで検出面から鉢(178)が出土している。

P7 (Fig.38・39・43)

P3の北に位置する。長軸50cmを測る隅丸三角形のピットである。埋土は茶褐色シルトで埋土下層から鉢底部(186)、甕底部(187)、袋状鉄斧(226)が出土している。226は、長さ6.7cm、刃部4.9cmを測り、刃部は撥状を呈す。

以上のピットは、P2が古代、他は弥生後期末から古墳時代終末に属する。この他にも下層において小ピットを多数検出したが、ほとんどのものから遺物が出土しておらず性格は不明である。

⑦ 土器集中

土器集中1

調査区西南隅で検出した。SK9の南で径1.2mほどの範囲に弥生後期末から古墳時代初頭の土器片が集中して出土している。細片が多く図示できるものはない。

土器集中2 (Fig.40)

先述したP1の検出面直上で検出した。径1m程の範囲に弥生後期末から古墳時代初頭の土器が集中出土している。鉢(190・193)、高杯(189)、底部(191・192)が見られる。

⑧ 竪穴状遺構

SX1 (Fig. 40・41・43)

調査区中央部、ST1の西に位置しSK2に切られている。南側の大部分は調査区外に出ており、北側の輪郭線は精査したが検出することができなかった。ST1と同じように南壁の基本層準VI層を掘り込んでいる。径5.5m、深さ50cmを測る。床面は中央部が15cm程低く、東西に高床面が存在する。また南壁断面では、低床面の中央部が更に僅かに低くなっている。埋土はI層：褐色シルトを基調として炭化物、焼土、土器片を多く含む。II層：暗灰色粘土で黄色粘土をブロック状に含んでいる。III層：褐色粘土シルトである。検出面直下のI層上層において60×80cmの広がり焼土面がみられ、鉢(228)が出土している。遺物は主にI層から出土している。弥生後期末から古墳時代初頭の土器が多いが、古代の須恵器、土師器も少量見られる。壺(198)、鉢(197・199)、高杯(196)、底部(194・200)を図示した。鉢は長さ19.8cmを測り全体の形状を捉えることができる。SX1の時期、性格については明らかにし得ない。

⑨ 包含層出土の遺物 (Fig.40・42・43)

弥生後期の甕底部(200)、石鏃(214)、土師器杯(201～203)、同皿(204)、緑釉皿(205)、須恵器杯(207～210)、同皿(211)、土師器甕(212)、砥石(213)、鉛製品(216)、鉄鏃(218)、摘鎌(225)、鉄片(219)、鉄滓(222)を図示した。石鏃はサヌカイト製で基部を欠損している。土師器皿・杯は精選さ

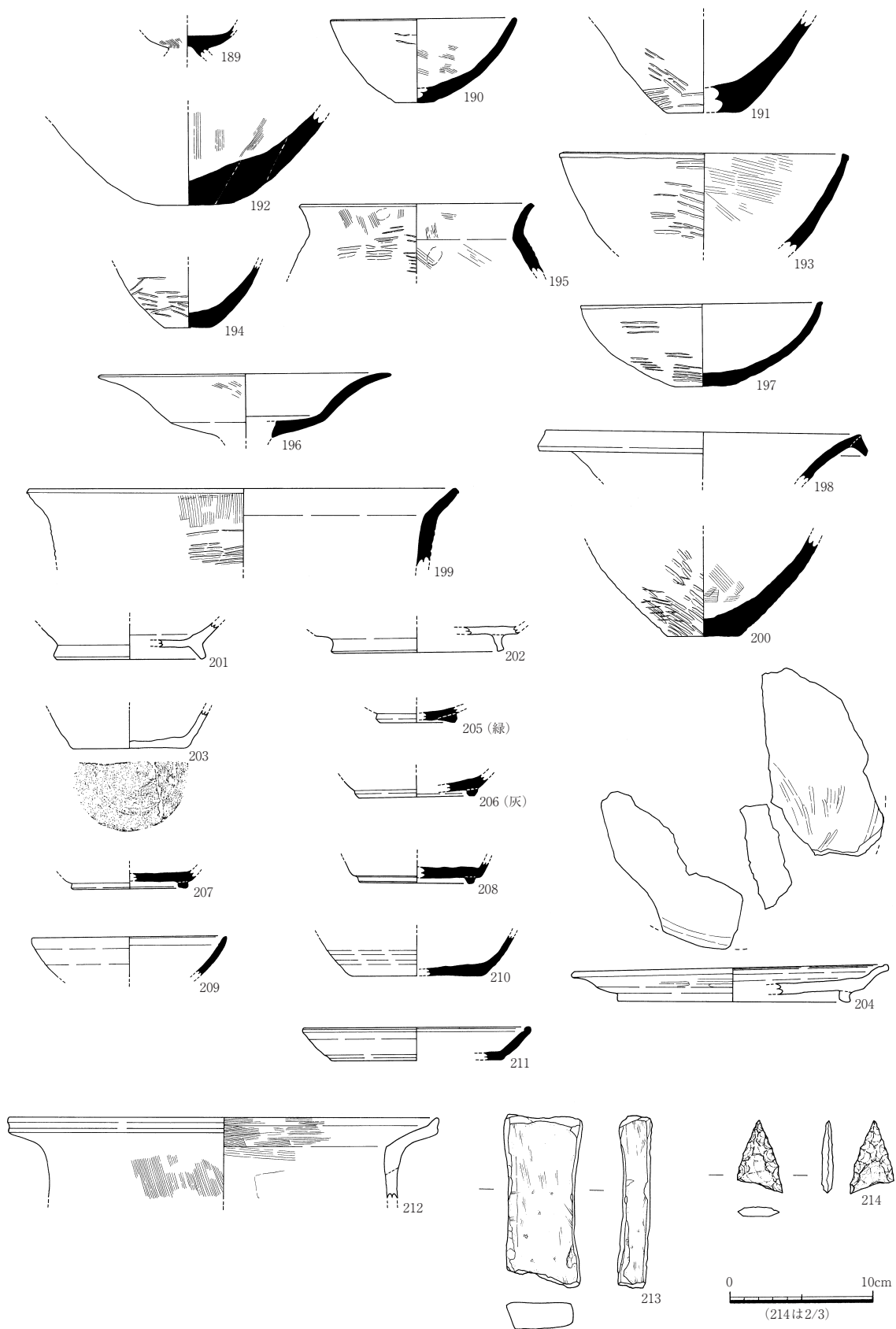


Fig.40 土器集中2・SX1・遺物包含層 出土遺物
 (土器集中2: 189~193, SX1: 194~198, 遺物包含層: 199~214)

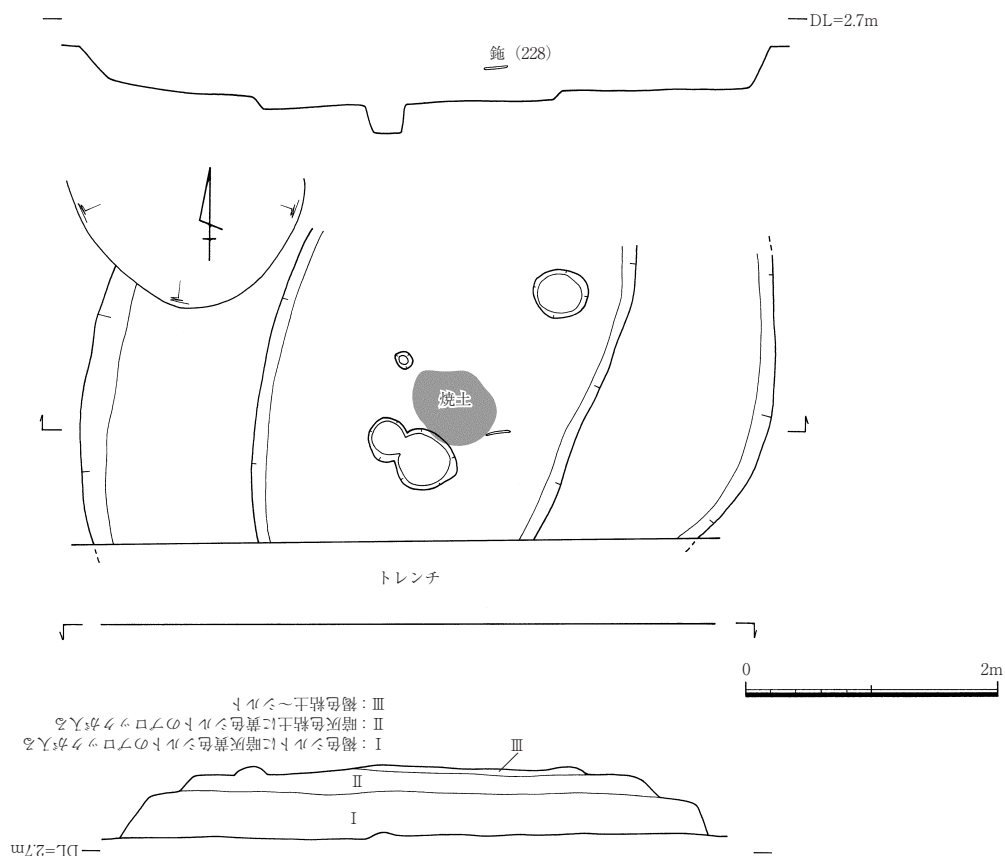


Fig.41 SX1 平面・セクション

れた胎土が用いられ、204は内外面にヘラミガキが施されている。須恵器杯(207・210)と皿(211)は精選された胎土が用いられ、207は畳付が凹状をなす。211は口縁部内面に沈線が巡る。205は陶胎で底部を蛇目状に削っている。212は胎土①類である。砥石は3面に使用痕があり、被熱痕跡が見られる。砂岩製である。鉄鎌(219)は左右非対称であるが圭頭鎌に属する。基部が欠損している。摘鎌は両端を三角形に折り返しており、刃部に刃毀れが認められる。219は断面方形の棒状の鉄片である。鉛製品は、調査区西端のC4グリッドで下層の遺構検出中に攪乱層とSK8などの弥生後期末から古墳時代前期遺構検出面との境から出土したものである。

出土時には形状から銅釧としたが、成分分析の結果鉛であることが判明した。⁽³⁾ また後述のように形状的にも釧とするには無理があるとの結論を得た。この鉛製品は、湾曲した鉤状をなし、両端を欠落しているが、残存状態から類推して本来は紡錘状を呈していたことが考えられる。表面は白っぽく発色しているが、剥落部分からは地金の鉛色が見えている。

図示した下端のやや幅広い部分を基部、それ以外を軸部と仮称する。現存長軸は7.7cm、基部の幅1.1cmを測る。基部から湾曲しながら立ち上がり、下方に大きく屈曲する。軸部の幅は基部付近で1.0cm、屈曲部で0.6cm、断面形は厚さ3～4mmの菱形を呈する。屈曲部から端部破断面までの長さは2.0cmを測る。端部破断面は比較的新しいことから調査時に破損、欠落した可能性も考えられる。

軸部の断面形は、厚さ3～4mmの菱形を呈し、内外面には稜線が作り出されている。内面の稜が、外面よりも鋭く作られている。また屈曲部内面と軸部内面には4×2mmの突起が2個所に鑄出されている。しかもその突起の先端には破断痕跡が認められる。基部の内面には0.8×0.6cmの箱状の凹部が作られている。内面の鋭い稜や突起は釧には有り得ないものであり、釧否定の根拠となるものである。

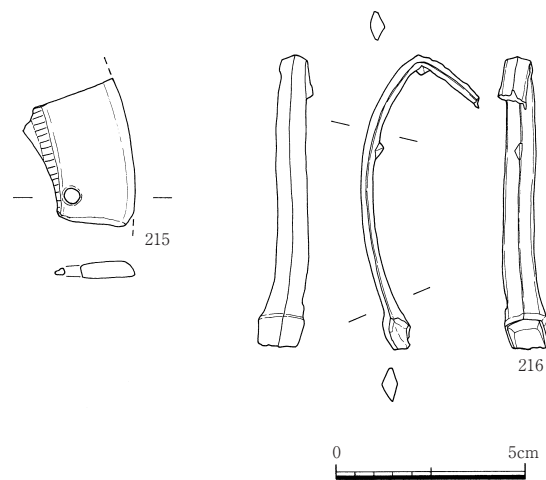


Fig.42 SD1出土懸垂鏡及び遺物包含層出土鉛製品

註

- (1) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (2) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (3) 分析結果の詳細については『西分増井遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年に掲載

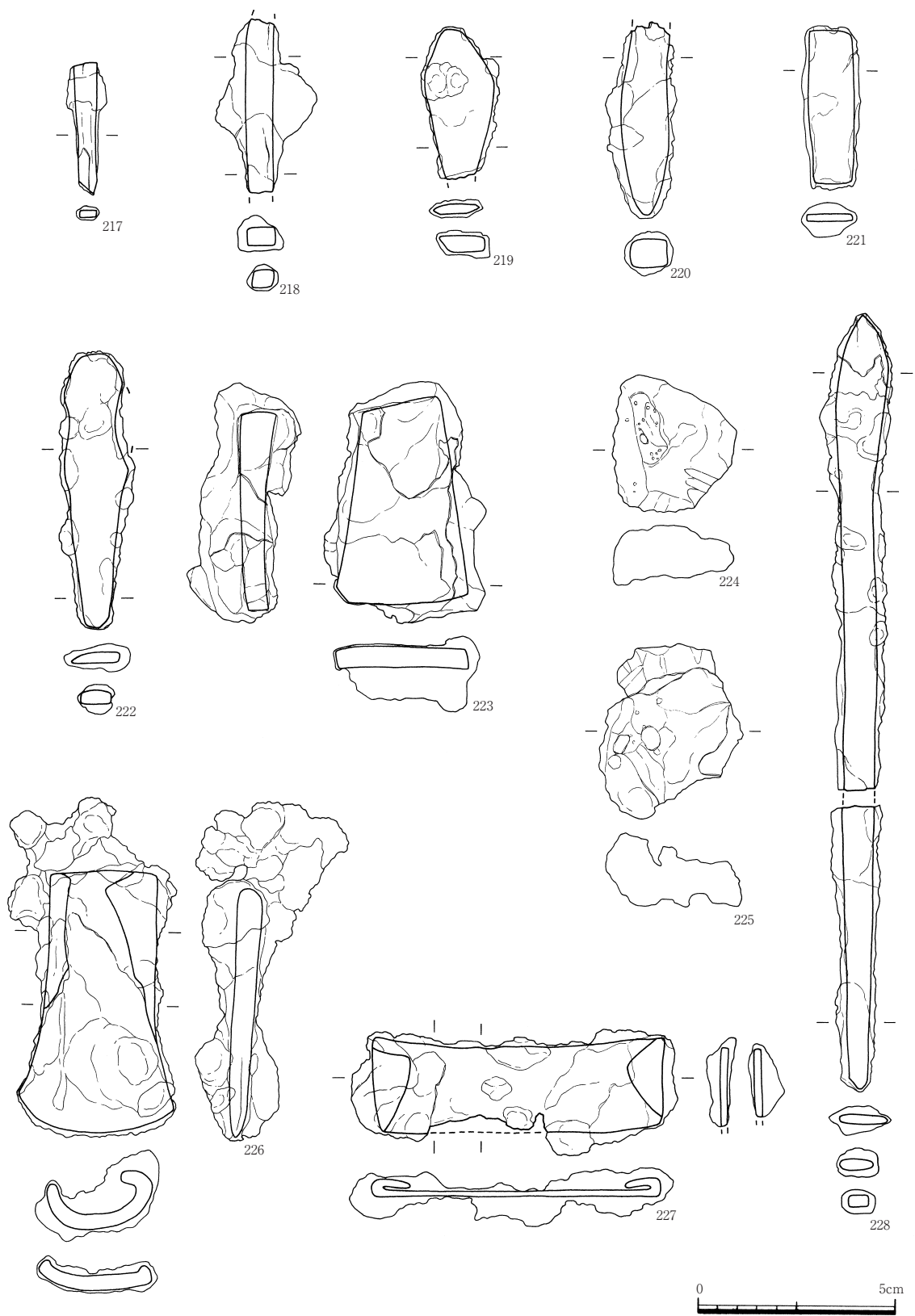


Fig.43 II B区出土鉄器類

(SD1上層：218・221～223・225、SD1下層：217、SX1：228、P7：226、包含層：219・220・224・227)

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
1	SD1 床	土師器 皿	2.2	18.0	—	—	精選された胎土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。		
2	SD1 床	須恵器 皿	2.0	15.2	—	—	精選された胎土	灰白色	端部面取り。内外面ヨコナデ。		
3	SD1 床	須恵器 皿	2.5	14.0	—	—	精選された胎土	灰白色	口縁つまみ出し。内外面ヨコナデ。		
4	SD1 床	須恵器 皿	2.4	15.8	—	12.0	細・粗粒砂を含む	灰色	外底ヘラ切り、ナデ。内外面ヨコナデ。 ロクロ回転右まわり。		
5	SD1 床	須恵器 皿	2.5	16.4	—	—	精選された胎土	灰白色	内外面丁寧なヨコナデ。		
6	SD1 床	須恵器 皿	2.5	19.9	—	26.0	精選された胎土	灰色	外底ヘラ切り、ナデ。内外面ヨコナデ。		
7	SD1 床	須恵器 杯	(3.2)	10.0	—	—	長石の細砂粒を含む	青灰色	口縁端部短く外反。内外面ヨコナデ。	残口縁 1/6	
8	SD1 床	須恵器 杯	(1.55)	—	—	8.4	精選された胎土	灰色	低い高台。畳付凹状。内外面ナデ。	変わった胎土、つくり	
9	SD1 床	須恵器 杯	(1.3)	—	—	10.0	精選された胎土	灰白色	外底ヘラ切り、ケズリ、ナデ。畳付凹状。		
10	SD1 床	須恵器 杯	(2.8)	—	—	7.2	細粒砂を含む	灰色	外底中央に×のヘラ記号あり。外底ヘラ切り、ケズリ、ナデ。畳付凹状。内外面ヨコナデ。	内面自然釉。	
11	SD1 床	須恵器 杯	3.1	6.0	—	—	精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。		
12	SD1 床	須恵器 杯	(3.1)	—	—	7.6	精選された胎土	灰色	外底ヘラ切り、ケズリ、ナデ。畳付凹状。内外面丁寧なヨコナデ。ロクロ回転左まわり。	内面自然釉。 残底 1/2。	
13	SD1 床	須恵器 杯	(2.9)	—	—	9.1	細・粗粒砂を少量含む	灰白色	内外面ヨコナデ。		
14	SD1 床	須恵器 杯	(3.2)	—	—	12.0	精選された胎土	灰白色	畳付内傾。内外面ヨコナデ。二次的に被熱赤変。	残底 1/2	
15	SD1 床	須恵器 杯	(3.0)	14.4	—	—	精選された胎土	灰白色	丁寧なヨコナデ。		
16	SD1 床	須恵器 杯	(3.7)	—	—	12.0	精選された胎土	灰色	高台低い。外底ヘラ切り、ナデ。内外面ヨコナデ。		
17	SD1 床	須恵器 蓋	(1.9)	16.7	—	—	細・粗粒を含む	灰色	内外面ヨコナデ。ロクロ右まわり。		
18	SD1 床	須恵器 蓋	(1.3)	—	—	—	精選された胎土	灰白色	環状の摘み。内外面ヨコナデ。	摘み径 4.2cm	
19	SD1 床	須恵器 蓋	(1.6)	—	—	—	粗粒砂を多く含む	灰色	外面ケズリ、ナデ。ロクロ右まわり。		
20	SD1 床	須恵器 蓋	(2.7)	—	—	—	精選された胎土	灰色	宝珠摘み。		
21	SD1 床	須恵器 蓋	1.6	16.6	—	—	精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ。		
22	SD1 床	須恵器 蓋	2.5	18.8	—	—	精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。		
23	SD1 床	須恵器 蓋	—	—	—	—	粗粒砂を含む	灰黄色	外面に大の字ヘラ描き。天井部外面ケズリ。内面ヨコナデ。ロクロ右回転か。		
24	SD1 床	須恵器 高杯	(3.1)	—	—	—	精選された胎土	灰色	杯部接合部から剥離。内外面ヨコナデ。		
25	SD1 床	須恵器 高杯	(7.1)	—	—	—	精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ。		

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
26	SD1 下	緑釉 椀	—	—	—	—	細かな胎土	オリーブ黄 色			
27	SD1 床	緑釉 皿	(1.4)	—	—	6.2	陶胎	暗オリーブ 灰色	外底糸切り、ケズリ、ナデ。	9C 後半・篠 窯	
28	SD1 床	緑釉 皿	(1.95)	—	—	6.2	陶胎・細かな胎土	灰白色	蛇の目高台。黄緑の薄い釉。		
29	SD1 床	須恵器 壺	(3.1)	7.2	—	—	精選された胎土	灰色	内外面丁寧なヨコナデ。		
30	SD1 床	須恵器 甕	(3.0)	19.2	—	—	チャート他の粗粒 砂を多く含む	灰色	口縁肥厚。内外面ヨコナデ。		
31	SD1 床	須恵器 甕	(9.4)	—	—	—	精選された胎土	灰色	外面右下がりまたは平行タタキ後ヨ コハケ。	細片。外面 全面自然釉。	
32	SD1 床	須恵器 壺	(2.0)	—	—	14.0	精選された胎土	灰色	外面ケズリ、ヨコナデ。内面外底ナデ。	残底 1/6	
33	SD1 床	土師器 甕	(3.5)	13.0	—	—	雲母を多く含む	にぶい橙色	口縁内外強いヨコナデ。胴部外面右 下がりハケ。内面ヨコハケ。	胎①、② でもない	
34	SD1 床	土師器 甕	(4.5)	20.0	—	—	石英、赤色風化礫 粗粒他を含む	橙色		胎①	
35	SD1 床	製塩土 器	—	—	—	—	粗粒砂を多く含む	橙色	内面布目痕。		
36	SD1 床	製塩土 器	—	—	—	—	チャート他の粗粒 砂を多く含む	灰白色	内面布目痕。		
50	SD1 4 回	土師器 皿	2.2	—	—	13.4	赤色風化礫粒を含 む	にぶい橙色	外底切り離し後ナデ消す。内外面ヨ コナデ。	残底 1/6	
51	SD1 4 回	土師器 皿	(2.1)	18.4	—	—	精選された胎土	にぶい橙色	高台剥離。内外面摩耗するが、ヘラ ミガキと見られる。	残口縁 1/10	
52	SD1 4 回	土師器 皿	(2.2)	—	—	9.6	赤色風化礫の砂粒 を含む	橙色	内外面ヨコナデ。	残底 1/8	
53	SD1 4 回	土師器 杯	(3.7)	14.6	—	—	精選された胎土	黄橙色	口縁部強いヨコナデ。内外面摩耗。	残口縁 1/6	
54	SD1	土師器 杯	3.8	13.4	—	9.0	精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。ヘラ切り、ケズリ、 ナデ。	残底 1/8	
55	SD1 4 回	土師器 杯	(3.0)	—	—	11.0	赤色風化礫の砂粒 を含む	橙色	内外面ヨコナデ、摩耗。	残底 1/6。体 部外面煤付 着。	
56	SD1 5 回	土師器 椀	(1.2)	—	—	8.6	精選された胎土	橙色	非常に薄い。内外面摩耗。	残底 1/6	
57	SD1 下	土師器 杯	(2.15)	—	—	9.8	細粒砂を含む	橙色	ヘラ切り。内外面摩耗。		
58	SD1 5 回	土師器 杯	(3.9)	—	—	9.6	精選された胎土	橙色	内外面摩耗。	残底 1/5	
59	SD1 5 回	土師器 杯	(4.9)	18.4	—	—	精選された胎土	にぶい黄橙 色	内面にわずかにヘラミガキ痕残る。 内外面摩耗。	残口縁 1/10	
60	SD1 下層	須恵器 皿	2.2	12.0	—	—	精選された胎土	灰白色	外底ヘラ切り、ナデ。内外面丁寧な ヨコナデ。	外面煤付着	
61	SD1 下層	須恵器 皿	2.5	14.6	—	—	精選された胎土	灰白色	口縁つまみ上げ。内外面ヨコナデ。		
62	SD1 4 回	須恵器 杯	(2.1)	—	—	13.8	精選された胎土	灰白色	焼成軟質。底部切り離し後ナデ消す。 内外面丁寧なヨコナデ。	残底 1/5	
63	SD1 5 回	須恵器 皿	2.15	15.1	—	12.0	精選された胎土	灰白色	焼成軟質。ヘラ切り後ナデ。内外面 丁寧なヨコナデ。	残 1/4	
64	SD1	須恵器 皿	2.8	19.6	—	15.0	14.3 精土	灰色	焼成堅緻。内外面ヨコナデ。外底ヘ ラ切り後ナデ。	残底 1/4	
65	SD1 5 回	須恵器 杯	(3.1)	—	—	13.4	精選された胎土	灰白色	焼成堅緻。内外面丁寧なヨコナデ。	残底 1/8	

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
66	SD1	須恵器 杯	(1.8)	—	—	7.8		チャートの細粒砂 を多く含む	灰色	焼成堅緻。内底ヨコナデ。外底ヘラ 切り後ナデ。高台非常に雑に貼付。	残底完
67	SD1 4回	須恵器 椀	(2.1)	—	—	6.4		粗粒砂を含む	灰白色	焼成軟質。糸切り。内外面摩耗。	残底 1/2
68	SD1 下層	緑釉 皿	1.4	—	—	5.3			淡黄・釉色 灰オリーブ	削り出し高台。外底削り。	洛北 9C 後半
69	SD1 4回	須恵器 杯	(1.5)	—	—	14.0			灰白色	焼成軟質。外底はヘラ切り後ナデ。 内外面ヨコナデ。内底に木の葉の圧 痕。内外底に火襷。	残底 1/5
70	SD1 下層	須恵器 蓋	(2.9)	—	—	—		精選された胎土	灰色	宝珠摘み。外面自然釉が厚くかかる。 内面丁寧なヨコナデ。	
71	SD1 下層	須恵器 蓋	(1.9)	17.0	—	—		精選された胎土	青灰色	内外面ヨコナデ	細片
72	SD1 下層	須恵器 蓋	2.9	16.0	—	—		精選された胎土	灰色	外面自然釉。端部内傾。内外面ヨコ ナデ。	
73	SD1 5回	須恵器 高杯	(9.8)	—	—	—		細粒砂を含む	灰白色	焼成堅緻。内外面回転ナデ。	脚部 1/3
74	SD1 4回	須恵器 鉄鉢	(4.5)	23.4	—	—		精選された胎土	灰白色	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指 ナデ後未調整。	残口縁 1/20
75	SD1 下層	須恵器 壺	(5.5)	7.7	—	—		精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ。	外面一部自 然釉。
76	SD1 4回	土師器 高杯	(1.9)	26.2	—	—		精選された胎土	明赤褐色	口縁及び端部に沈線。外面ヨコナデ 後ミガキ。内面摩耗。	
77	SD1 下層	須恵器 平瓶	—	—	—	—		精選された胎土	灰オリーブ 色	断面六角形状の把手。	
78	SD1 4~6回	須恵器 壺	(4.6)	8.0	—	—		精選された胎土	灰白色	焼成堅緻。内外面ヨコナデ、胴部下 半下地にタタキ目。胴部の最大径部 に沈線が巡る。ロクロ回転左まわり。	
79	SD1 下層	須恵器 壺	(2.6)	18.0	—	—		精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。	自然釉。
80	SD1 下層	須恵器 壺	(8.4)	—	—	14.1		精選された胎土	灰色	外底ナデ。畳付内傾。体部内外ヨコ ナデ。いびつにねじ曲がっている。	
81	SD1 4回	須恵器 甕	—	—	—	—		細粒砂を含む	灰色	やや軟質。外面格子タタキ。内面研 磨されている。	
82	SD1 3回	土師器 皿	2.4	9.6	—	—	25	チャート他の細粒 砂を含む	にぶい黄橙 色	内外面ヨコナデ。外底糸切り。	
83	SD1 3回	土師器 皿	2.1	14.2	—	—		精土	にぶい橙色	内外面ヨコナデ後ミガキ。外底切り 離し後ナデ。	細片 1/10
84	SD1 3回	土師器 杯	3.0	15.0	—	10.0	20	精選された胎土	橙色	内外面摩耗。内面はヨコナデ後ミガ キ。口縁内面にわずかに沈線状の凹 み。	残 1/4
85	SD1	土師器 皿	(1.6)	—	—	17.0		精土	浅黄橙色	内外面摩耗。外面ヨコナデ。	残底 1/6
86	SD1 3回	土師器 皿	(2.0)	—	—	14.0		チャートの粗粒少 量含む	橙色	内外面摩耗。	細片
87	SD1 3回	須恵器 皿	1.8	17.0	—	13.7		精土	灰白色	焼成やや軟。内外面丁寧なヨコナデ。 外底ヘラ切り、ナデ。	細片
88	SD1 3回	須恵器 杯	3.4	9.6	—	—	35.4	精土	灰黄色	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り、 ケズリ、ナデ。内底に同心円状の条線。	残 1/5
89	SD1 3回	須恵器 皿	(2.4)	15.0	—	—	16	精選された胎土	灰白色	焼成軟質。内外面丁寧なヨコナデ。 外底ヘラ切り、ナデ。口縁内面強い ナデにより凹む。	残 1/5

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
90	SD1 3回	須恵器 蓋	2.0	19.0	—	—	チャートの粗粒少量含む	灰色	焼成やや軟質。天井部内外面ナデ。他はヨコナデ。端部凹状。	残 1/12	
91	SD1 3回	須恵器 杯	(1.9)	—	—	9.3	精土	灰黄色	内外面ヨコナデ、ヘラ切り。	細片 / 内外 面煤付着	
92	SD1 3回	須恵器 杯	(2.55)	—	—	9.0	粗粒砂を含む	灰色	外底ヘラ切り、ケズリ、ナデ。畳付凹状。内外面ヨコナデ。		
93	SD1 3回	須恵器 杯	(2.5)	—	—	12.4	精選された胎土	灰色	外底ヘラ切り、ケズリ、ナデ。畳付わずかに凹状。外底平行圧痕。内外面丁寧なヨコナデ。		
94	SD1 3回	須恵器 杯	(4.1)	18.0	—	—	精土	灰色	焼成軟質。内外面ヨコナデ。	残口縁 1/8	
95	SD1 3回	緑釉 皿	—	—	—	—	軟胎・やや粗い胎土			細片	
96	SD1	緑釉 椀	(1.7)	—	—	7.8	軟胎	淡黄橙・釉色：明緑色		残底 1/3・洛北・窯不明・平安I期新～II期古でII期古に重心・9C前半の後の方～中頃	
97	SD1 3回	緑釉 椀	(2.3)	20.0	—	—	陶胎・精土	灰色・釉色：灰オリーブ	内外面ヨコナデ。口縁外面に沈線。	細片・126と同一個体の可能性あり・II期中9C後半・洛西か	
98	SD1 3回	須恵器 壺	(4.8)	—	—	—	精土	灰色	焼成堅緻。内外面ヨコナデ。		
99	SD1 3回	須恵器 壺	(7.1)	—	—	6.9	精選された胎土	にぶい黄橙色	内外面ヨコナデ。		
100	SD1 3回	須恵器 壺	(6.5)	—	—	6.0	精選された胎土	にぶい黄橙色	赤く発色、還元されてない。内外面ヨコナデ。		
101	SD1 3回	土師器 甕	(6.4)	31.2	—	—	チャート、長石、雲母の粗粒砂を多く含む	にぶい褐色	口縁内面ヨコハケ以下ナデ。口縁外面ヨコナデ以下タテハケ。口縁端面と口縁外面は強いヨコナデにより凹む。	残口縁 1/8	
102	SD1 3回	土師器 甕	(6.85)	21.0	—	—	チャート、石英、長石、金雲母の粗粒砂多く含む	黄灰色	口縁端部上方へつまみ出し端面ヨコナデにより凹む。口縁内面ヨコハケ後ナデ。外面ヨコナデ。胴部内面ナデ。外面タテハケ。	残口縁 1/6・ 外面煤付着 胎①	
103	SD1 3回	土師器 甕	(8.0)	27.4	—	—	石英、長石の粗粒砂を多く含む	橙色	口縁端部上方へつまみ出し端面ハケ調整。口縁内面ハケ。外面ヨコナデ。胴部内面ナデ。外面右下がりのハケ。	残口縁 1/6 胎①	
104	SD1 3回	土師器 甕	(8.0)	28.2	—	—	石英、長石、金雲母の粗粒砂を多く含む	にぶい赤褐色	口縁端部上方へつまみ出し端面強いヨコナデにより凹む。口縁内面ヨコハケ。外面指頭後ヨコナデ。胴部外面接合部指頭後右下がりのハケ。	残口縁 1/7・ 外面煤付着 胎①	
107	SD1 2回	土師器 杯	(1.3)	—	—	10.0	精選された胎土	橙色	ヘラ切り。内外面ヨコナデ、摩耗。	残底 1/4	
108	SD1 1回	土師器 杯	(2.3)	—	—	8.2	赤色風化礫の粗粒を含む	にぶい橙色	内外面ヨコナデ。外面摩耗。外底ヘラ切り後ナデ。	残口縁 1/2	
109	SD1 1回	土師器 杯	3.3	13.8	—	10.0	精選された胎土	灰白色	内外面ヨコナデ、摩耗。口縁灰白で以下黒化。	残 1/6	
110	SD1 2回	土師器 杯	3.1	12.7	—	6.6	30.7 チャートの細粒砂を多く含む	浅黄橙色	内外面ヨコナデ。外底雑なヘラ切り後ナデ消す、平行圧痕あり。内底同心円状の条線。	準完形	
111	SD1	土師器 皿	(2.4)	—	—	6.3	精土	橙色	内外面摩耗。	残底 2/3	
112	SD1 2回	土師器 皿	(2.1)	—	—	10.8	精選された胎土	橙色	内外面ヨコナデ、摩耗。	残底 1/6	
113	SD1	土師器 杯	(4.5)	14.2	—	—	チャートの細粒砂を含む	浅黄色	内外面ヨコナデ。	残口縁 1/6	
114	SD1 1回	須恵器 皿	2.3	21.2	—	18.2	10.8 精選された胎土	灰白色	軟質。内外面丁寧なヨコナデ。外底ヘラ切り後ナデ消す。回転右まわり。	残 1/6	

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土 地点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
115	SD1 1回	須恵器 皿	2.4	18.8	—	15.5	精選された胎土	灰白色	軟質。口縁端部つまみ上げ内外面ヨコナデ。内外面摩耗。外底切り離した後ナデ。	残1/4	
116	SD1	須恵器 杯	3.3	14.3	—	9.0	23.1 精土	灰白色	焼成軟質。底部切り離した後ナデ。内外面著しく摩耗。	残7/8	
117	SD1	須恵器 杯	(2.2)	—	—	7.9	精選された胎土	灰白色	焼成軟質。外面ヘラ切り、丁寧なナデ。内外面丁寧なヨコナデ。	残底1/3	
118	SD1	須恵器 杯	(5.0)	—	—	11.5	精土	灰白色	焼成軟質。底部切り離した後ナデ。内外面ヨコナデ。	残底1/3	
119	SD1	須恵器 蓋	(1.6)	—	—	—	精選された胎土	灰色	摘みとその周辺ヨコナデ、他は内外ナデ。	摘み径 2.25cm	
120	SD1	須恵器 蓋	(2.2)	—	—	—	精土	灰白色	焼成軟質。内外面摩耗。	摘み径2.2cm	
121	SD1	須恵器 杯	3.9	13.5	—	8.4	粗粒砂を含む	灰色	焼成堅緻。内外面ヨコナデ。糸切りか。	残1/4	
122	SD1 2回	須恵器 杯	4.8	13.8	—	9.8	精選された胎土	灰白色	畳付凹状。内外面ヨコナデ、内面にヘラによる傷。	残1/3	
123	SD1	黒色土器 椀	(1.9)	16.8	—	—	精選された胎土	にぶい黄色	内黒。内外面ヨコナデ。	細片	
124	SD1 2回	緑釉 椀	—	—	—	—	軟胎	灰白色		細片	
125	SD1	灰釉 皿	—	—	—	—	細かな胎土	灰黄色		細片	
126	SD1 2回	緑釉 椀	—	—	—	—	陶胎	オリーブ灰色	外面に沈線。	細片・97と同一個体の可能性あり・II期中9C後半・洛西か	
127	SD1 2回	緑釉 皿	—	—	—	—	軟胎・細かな胎土	橙色		細片	
128	SD1	緑釉 皿	—	—	—	—	陶胎	灰白色・釉は薄く明緑灰色	内外面ヨコナデ。外面ミガキあり。	京都系・本山官山系くらいか	
129	SD1	緑釉 椀	—	—	—	—	軟胎・細かな胎土	浅黄橙色		細片	
130	SD1 2回	緑釉 皿	(3.4)	—	—	—	軟胎・やや粗い胎土	淡黄色	薄い黄緑の釉。	9C中葉・北ハタエダ窯	
131	SD1 1回	須恵器 高杯	(4.4)	—	—	—	粗粒砂を多く含む	灰白色	脚部外面1条の沈線。内外面ヨコナデ。		
132	SD1 2回	須恵器 高杯	(5.5)	—	—	—	細粒砂をわずかに含む	灰色	内外面ヨコナデ。		
133	SD1 4回	須恵器 壺	(2.05)	16.3	—	—	極めて精土		内外面丁寧なヨコナデ。	口縁端面に自然釉。	
134	SD1 床	須恵器	—	—	—	—	精選された胎土	灰白色	一方の主面は中央部に指頭圧痕が顕著で外縁部ヨコナデ。他方の主面はナデ。	底部	
135	SD1 2回	須恵器 壺	(8.8)	6.0	—	—		灰色	胴部との接合部で剥離。外面及び口縁内面ヨコナデ。	口縁端部及び外面の一部自然釉。	
136	SD1 下層	須恵器	—	—	—	—	精選された胎土	灰色	径1cmの円孔。外面ナデ。内面ヨコナデ。	把手	
137	SD1	黒色土器 甕	(4.0)	16.0	—	—	金雲母を多く含む・チャートの細粒含む	オリーブ黒色	両黒。口縁内面摩耗するがヨコハケ、ミガキ。外面ナデ、ヘラミガキ。胴部内面ナデ。	残口縁1/8・搬入品	
138	SD1	土師器 甕	(7.5)	26.6	—	—	チャート、赤色礫の粗粒砂を多く含む	にぶい褐色	口縁端部わずかに上方へつまむ。口縁から頸部内面ヨコハケ、胴部ナデ。口縁外面ヨコナデ、胴部タテハケ。		

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地 点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
139	SD1 4回	土師器 甕	(4.8)	—	—	30.0		橙色	口縁端部はわずかに上方へつまみ上げ、外面強いナデにより凹む。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面右下がりのハケ。内面ヨコハケ。	残口縁 1/8・胎①	
140	SD1 2回	土師器 羽釜	(4.5)	24.0	—	—	チャート、石英、角閃石、金雲母の粗粒を含む	にぶい赤褐色	内外面ヨコナデ。外面鏝部上下に指頭圧痕。		
141	SD1 1回	製塩土 器	—	—	—	—	チャート他の粗粒砂を多く含む	灰白色	二次焼成をうけ還元色に焼成。	細片	
142	SD1 4回	製塩土 器	—	—	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む	灰黄色	内面布目痕。	細片	
143	SD1 4回	製塩土 器	—	—	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む	橙色	内面布目痕。	細片	
144	SD1	製塩土 器	—	—	—	—	精選された胎土	灰色	二次焼成のため還元。	細片	
145	SD1 4回	移動式 竈 笠か	(3.9)	—	—	28.0	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	端部は肥厚し凹状を呈す。外面ハケ。内面摩耗。		
153	SD2	土師器 甕	—	—	—	—	金雲母を多く含む	にぶい黄褐色	内外面摩耗。	細片 / 庄内式土器	
154	SD4	白磁 皿	(1.7)	8.4	—	—	精緻な胎土	灰白色	細かい貫入が入る。		
155	SD4	白磁 皿	(1.5)	—	—	7.6	精緻な胎土	灰白色	端反り皿。		
156	SD3	近世 陶磁器	(2.2)	—	—	6.4	やや粗い胎土	灰黄色			
157	SD4	青磁 椀	—	—	—	5.4	二次被熱を受け胎土が変色・胎土が重い	胎土：褐灰色 / 釉：灰オリーブ	内面見込に草花文。外底カブト幅。龍泉に不有。		
158	SD6	弥生土器 甕	(6.2)	—	—	2.7	チャートの粗粒砂を含む	にぶい橙色	外面タタキの後ナデ。内面ハケ。		
159	SD4	土師器	—	—	—	24.0	チャートの粗粒砂を多く含む	橙色	内外面ヨコナデ。	竈か壺か	
160	SD4	須恵器 甕	—	—	—	—	粗粒砂を多く含む	灰白色	外面径約 2cm の円形の突起が貼付され、以下タテ方向の粗い木理のハケ。内面同心円状のタタキ。	外面緑色の自然釉。	
161	SD6	弥生土器 壺	(6.8)	—	—	5.6	チャートの粗粒を含む	褐灰色	外面タテハケ、下地にタタキ。内面ナデ。		
162	SD4	備前 甕	(6.0)	41.4	—	—		暗赤褐色		IV 期後半	
163	ST1	弥生土器 鉢	6.9	14.6	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	外面右下がりのタタキ、ナデ。内面左上がりのハケ。		
164	ST1	弥生土器 甕	(5.0)	12.2	—	—	チャートの粗粒を含む	橙色	口縁内面右下がりのハケ。外面水平のタタキ。胴部内面タテハケ。		
165	SK1	須恵器 蓋	—	17.3	—	—	精選された胎土	灰色	内外面ヨコナデ。焼成良好。		
167	SK2	土師器 杯	2.6	13.4	—	8.0	精土	にぶい橙色	手づくね。体部外面ナデ、立ち上がり部静止ケズリ。内面 1 条の沈線、ナデの後放射状の暗文。		
168	SK2	土師器 杯	—	18.3	—	—	精土	明赤褐色	手づくね。内外面ナデの後ミガキ。口縁内面 1 条の沈線、内面放射状の暗文。	169 と同一個体	

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
169	SK2	土師器 杯	—	—	—	10.3	精土	明赤褐色	手づくね。底部外面ナデの後ヨコヘ ラミガキ。立ち上がり部静止ケズリ 後タテミガキ。内底ナデの後ろせん 状の暗文。体部内面放射状の暗文。	搬入 168 と 同一個体か	
170	SK2	須恵器 蓋	1.5	17.6	—	—	精土		内外面丁寧なヨコナデ。焼成堅緻。	細片	
171	SK6	弥生土器 甕	(3.2)	—	—	3.0	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい褐色	外面放射状のタタキ、底部外面もタ タキ。内面ナデ。	外面一部煤 付着	
172	SK9	弥生土器 甕	(3.0)	—	—	2.4	チャートの粗粒 を多く含む	橙色	外面放射状のタタキ。内面ナデ。焼 成後穿孔。		
173	SK9	弥生土器 壺	(3.2)	—	—	7.0	チャートの粗粒 を多く含む	黄橙色	外面摩耗。内面剥落。		
174	SK9	弥生土器 鉢	4.2	—	—	6.0	チャートの粗粒 を含む	橙色	外面下半水平タタキ。内外面摩耗。		
175	P1	弥生土器 鉢	(4.5)	15.8	—	—	チャートの粗粒 を含む	橙色	外面水平タタキ、ナデ。内面右下が りのハケ。		
176	P1	弥生土器 壺	(5.9)	15.4	—	—	チャートの粗粒 を含む	浅黄橙色	内外面摩耗。		
177	P1	弥生土器 壺	(6.9)	14.8	—	—	チャートの粗粒 を含む	にぶい黄橙 色	内外面摩耗。		
178	P3	弥生土器 鉢	(5.6)	16.6	—	—	精土	浅黄橙色	外面タタキの後ナデ。内面異なる二 種の原体による右下がりのハケ。		
179	P1	弥生土器 甕	(9.5)	13.1	—	—	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい黄橙 色	口唇面取り。口縁叩き出し。外面水 平または右上がりのタタキ。内面右 下がりのハケ。	外面煤付着	
180	P1	弥生土器 甕	(12.5)	16.0	—	—	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい黄橙 色	口縁部叩き出し。口縁内面ヨコハケ。 外面水平のタタキ。胴部内面ナデ。	外面被熱赤 変・煤付着	
181	P1	弥生土器 鉢	7.9	20.15	—	2.5	チャートの粗粒 を含む	橙色	外面水平タタキ、ナデ。内面右下が りのハケ。内底はナデ。		
182	P1	弥生土器 高杯	(3.5)	—	—	—	チャートの粗粒 を含む	にぶい橙色	脚との接合部で剥離。内外面ナデ。		
183	P1	弥生土器 甕	(5.2)	—	—	2.2	チャートの粗粒 を含む	にぶい黄橙 色	外面水平タタキの後上半はタテハケ。 内面ナデ。		
184	P1	弥生土器 甕	(11.05)	—	—	4.1	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい黄橙 色	外面水平のタタキの後雑な指ナデ。 内面左上がりのハケ。		
185	P1	弥生土器 壺	(4.15)	—	—	2.2	チャートの粗粒 を少量含む	橙色	外面水平のタタキ、右上がりまたは 垂直のハケ。内面ナデ。		
186	P7	弥生土器 鉢	(4.2)	—	—	—	チャートの粗粒 を少量含む	橙色	外面ひび割れ痕。内外面ナデ。		
187	P7	弥生土器 甕	(18.5)	—	—	6.4	チャートの粗粒 を多く含む	橙色	外面上半水平または右上がりのタタ キ、下半はタタキの後ナデ。内面摩耗。		
188	P2	須恵器 蓋	(3.25)	16.4	—	—	チャートの細粒 を含む	オリーブ灰 色	天井部外面ヘラケズリ、他はヨコナ デ。ロクロ右まわり。焼成堅緻。		
189	土器集中 2	土師器 高杯	—	—	—	—		橙色	外面下半タテハケ。内面ナデ。	器台か	
190	土器集中 2	弥生土器 鉢	5.9	12.8	—	2.6	チャートの粗粒 を多く含む	橙色	外面水平タタキの後ナデ。内面ヨコ ハケ。		
191	土器集中 2	弥生土器 甕	(6.5)	—	—	5.0	チャートの粗粒 を含む	浅黄橙色	外面水平または右下がりのタタキの 後ナデ。内面右下がりのハケ。		
192	土器集中 2	弥生土器 壺	(6.5)	—	—	—	チャートの粗粒 を含む	にぶい黄橙 色	外面ナデ。内面ナデ、ハケ。		

II B 区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				器高 指数	胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径					
193	土器集中 2	弥生土器 鉢	6.8	19.4	—	—	チャートの粗粒 を含む	橙色	外面水平または右下がりのタタキの 後ナデ。内面粗い木理のハケ。		
194	SX1	弥生土器 鉢	(4.2)	—	—	1.7	チャートの粗粒 を多く含む	橙色	外面水平タタキ、ナデ。内面ナデ。		
195	SX1	弥生土器 甕	(4.9)	16.0	—	—	チャートの粗粒 を含む	橙色	口唇面取り。口縁内面ヨコハケ。外 面水平のタタキ、口縁はタタキの後 タテハケ。胴部内面右下がりのハケ。	口縁外面煤 付着	
196	SX1	古式土師器 高杯	(4.5)	20.4	—	—	チャート他の粗 粒砂を含む	橙色	内外面摩耗。		
197	SX1	弥生土器 鉢	5.8	17.0	—	4.0	チャートの粗粒 を多く含む	にぶい橙色	外面水平または右下がりのタタキの 後上半はナデ。内面ナデ。		
198	SX1	弥生土器 壺	(3.3)	22.1	—	—	チャートの粗粒 を含む	にぶい橙色	口縁端面櫛描波状文。内外面摩耗。		
199	トレンチ 2	弥生土器 鉢	(5.5)	29.6	—	—	チャートの粗粒 砂を含む	にぶい橙色	口縁外面タテハケ、体部はヨコ方向 のタタキ。内面摩耗。		
200	トレンチ 2	弥生土器 甕	(7.0)	—	—	5.0	チャートの粗粒 砂を含む	橙色	外面ヨコ方向後左上がりのタタキ。 内面ヨコまたは左上がりのハケ。		
201	トレンチ 4	土師器 杯	(2.5)	—	—	10.4	精選された胎土	橙色	内外面摩耗。	残底 1/6	
202	トレンチ 4	土師器 杯	(1.8)	—	—	12.0	精選された胎土	橙色	内面ミガキ。摩耗。	残底 1/5	
203	トレンチ 4	土師器 杯	(2.7)	—	—	8.0	精土	黒灰色	ヘラ切り、ヨコナデ。内外面回転ナデ。 全体が黒い焼成。	残底 2/3	
204	トレンチ 4	土師器 皿	21.8	2.6	—	16.3	9.1 精選された胎土	橙色	内外面ミガキ。摩耗。	残 1/2	
205	トレンチ 1	緑釉 皿	(1.1)	—	—	5.4	陶胎	灰白色	外底蛇の目状に削る。	残底 1/4	
206	トレンチ 1	灰釉か 椀	(1.5)	—	—	8.0		灰黄色		細片。053 窯式(10C 前 半)	
207	トレンチ 4	須恵器 杯	(1.3)	—	—	8.0	精土	灰白色	底部切り離し後ナデ。畳付凹状。内 外面回転ナデ。焼成堅緻。	残底 1/6	
208	トレンチ 4	須恵器 杯	(1.6)	—	—	8.0	粗粒砂を多く含 む	灰色	底部切り離し後ナデ。高台台形状。 内外面回転ナデ。焼成堅緻。	残底 1/4	
209	トレンチ 4	須恵器 杯	(2.8)	13.6	—	—	粗粒砂を多く含 む	灰色	内外面回転ナデ。内面に回転ナデに よる段部ができる。	残口縁 1/5	
210	トレンチ 4	須恵器 杯	2.9	—	—	9.0	精土・軟質	灰白色	ヘラ切り。内外面回転ナデ。摩耗。	残底 1/4	
211	トレンチ 4	須恵器 皿	2.3	13.8	—	(12.0)	14.4 精土・軟質	灰白色	口縁内面に沈線。内外面回転ナデ痕。	残口縁 1/5。 口縁部外面 煤付着(約 1cm 幅)	
212	トレンチ 4	土師器 甕	(5.7)	29.8	—	—	石英、長石を多 く含む	にぶい赤褐 色	口縁端部上方へつまみ上げ、外面は 強いヨコナデにより凹む。口縁外面 ヨコナデ。内面ヨコハケ。胴部外面 タテハケ。内面ナデ。	残口縁 1/10	

Ⅱ B 区瓦

図版 番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	胎土	色調	特徴	備考
47	SD1 床	平瓦	4.5	9.2	2.1	精選された胎土		やや軟質。外面斜格子タタキ。内面布目痕。模骨痕に沿ってタテナデ。部分的にハケ。	
48	SD1 床	平瓦	6.1	9.5	2.3	チャートの粗粒を含む	灰色	焼成堅緻。凹面布目痕。凸面斜格子タタキ。端面および凹面の周囲はヘラによる面取り。	
49	SD1 床	丸瓦	9.2	13.0	1.9	精粒砂を多く含む		焼成堅緻。凹面布目痕。凸面丁寧なナデ。端面はヘラによる面取り。	
105	SD1 西肩	平瓦	11.4	11.9	2.5	チャートの粗粒を含む	灰白色	焼成軟質。凹面布目痕。凸面縄タタキ、原体幅 2.5cm。	
150	SD1	平瓦	11.2	—	3.3		灰白色	軟質。凹面布目痕。凸面縄葺叩き。	
152	SD1 5 回	平瓦	10.1	17.8	2.2	チャートの粗粒を含む	灰白色	焼成軟質。端部は面取り。凹面布目痕、幅約 3cm の模骨痕。凸面摩耗のため調整不明。	

Ⅱ B 区石器

図版 番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
46	SD1 床	石斧	4.95	3.45	1.15	27.0	超塩基性岩	扁平片刃石斧。刃部欠損。	
151	SD1 1 回	石錘	7.5	4.5	1.2	65.6	砂岩	打欠。両端を両面から打割。	
166	ST1	叩石	9.3	6.6	4.1	376.0	砂岩	全面被熱。両端面と側縁に敲打痕。	
213	トレンチ 2	砥石	11.95	6.5	2.3	225.0	砂岩	一方の主面及び側縁 2 面の 3 面に使用痕あり。被熱痕跡あり。	
214	包含層	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.5	サヌカイト	打製。基部は欠損。背腹部とも中央に一次剥離面を残す。	

II B 区土錘

図版番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	胎土	色調	特徴	備考
37	SD1 床	土師器土錘	3.4	1.1	1.2	4.0		灰白色	1/4 が欠損。孔径 0.4cm。	
38	SD1 床	土師器土錘	4.0	1.0	1.0	3.0		明褐灰色	片面面取り。孔径 0.4cm。	完形
39	SD1 床	土師器土錘	4.8	1.2	1.3	6.6		にぶい黄橙色	孔径 0.4cm。	
40	SD1 床	土師器土錘	4.9	1.4	1.4	8.2		黄灰色	孔径 0.4cm。	
41	SD1 下	土師器土錘	3.7	1.9	1.9	9.8		浅黄橙色	孔径 0.5cm。	
42	SD1 床	土師器土錘	2.8	1.0	1.0	2.6		にぶい橙色	両端欠損。孔径 0.3cm。	
43	SD1 床	須恵器土錘	3.8	1.8	1.7	12.5		灰白色	両端面取り。孔径 0.7cm。	完形
44	SD1 床	土師器土錘	3.1	1.2	1.1	3.5		浅黄色	1/3 が欠損。孔径 0.4cm。	
45	SD1 床	土師器土錘	4.9	1.8	1.7	14.7		にぶい橙色	片端面取り。指ナデによる凹凸。孔径 0.5cm。	完形
106	SD1 3 回	土師器土錘	4.3	1.8	1.7	10.6		浅黄色	孔径 0.7cm。摩耗。	完形
146	SD1 5 回	土師器土錘	3.2	1.2	1.0	3.4		灰黄色		完形
147	SD1 下	土師器土錘	4.1	1.0	1.0	2.89		灰色	孔径 0.4cm。	
148	SD1 下	土師器土錘	3.8	1.1	1.0	3.3			孔径 0.4cm。	
149	SD1	須恵器土錘	3.7	1.7	1.7	10.3	精土	灰色	片端面取り。孔径 0.5cm。	完形

II B 区 鉄

図版番号	調査区	遺構 / 層序	分類	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	備考
217	II B 区	SD1 5 回目	棒状鉄片	3.35	0.65	0.20	1.40	断面扁平
218	II B 区	SD1 2 回目	棒状鉄片	4.45	0.70	0.45	13.80	
219	II B 区	トレンチ 2	鉄鎌	3.80	1.80	身部厚 0.40 基部厚 0.25	10.50	圭頭式
220	II B 区	トレンチ 2	棒状鉄片	4.90	1.25	0.75	13.50	断面方形
221	II B 区	SD1 3 回	棒状鉄片	3.90	1.20	0.20	6.50	断面扁平
222	II B 区	SD1 バンク 2 層	棒状鉄片	7.00	1.65	刃部厚 0.40 基部厚 0.30	15.70	刀子の可能性
223	II B 区	SD1 2 回	板状鉄片	5.30	上 2.1 下 3.4	0.55	73.10	撥状
224	II B 区	VI 層	鉄滓	3.50	3.10	1.55	22.40	
225	II B 区	SD1 2 回目	鉄滓	4.50	3.65	1.85	25.90	
226	II B 区	P7 M-4	袋状鉄斧	6.70	4.90	0.40	73.60	
227	II B 区	ホIV-3 N-4 ~ 5	摘録	7.45	2.40	0.20	30.80	刃ベリする
228	II B 区	SX1	鉈	(34、50)	刃部幅 1.30 身部幅 0.55	刃部厚 1.30 基部厚 0.55	39.70	

4 II C区の調査

(1) 基本層準

調査区西壁 (Fig.45)

VIII層：茶色粘土（無遺物層）

VII層：灰黄色砂層。VIII層の上に堆積する（無遺物層）。南に向かって層厚を増している。

VI層：黄茶色シルト。弥生後期末から古墳時代初頭の遺構が掘り込まれている。

V層：茶黄色シルト。南寄りの一部でのみ確認される。弥生時代の遺物包含層である。遺構埋土の可能性もある。

IV層：茶色粘土～シルト。弥生時代から古墳時代前期の遺物包含層である。層厚10～30cm。古代の遺構検出面である。

III層：黄色シルト。遺構埋土である。

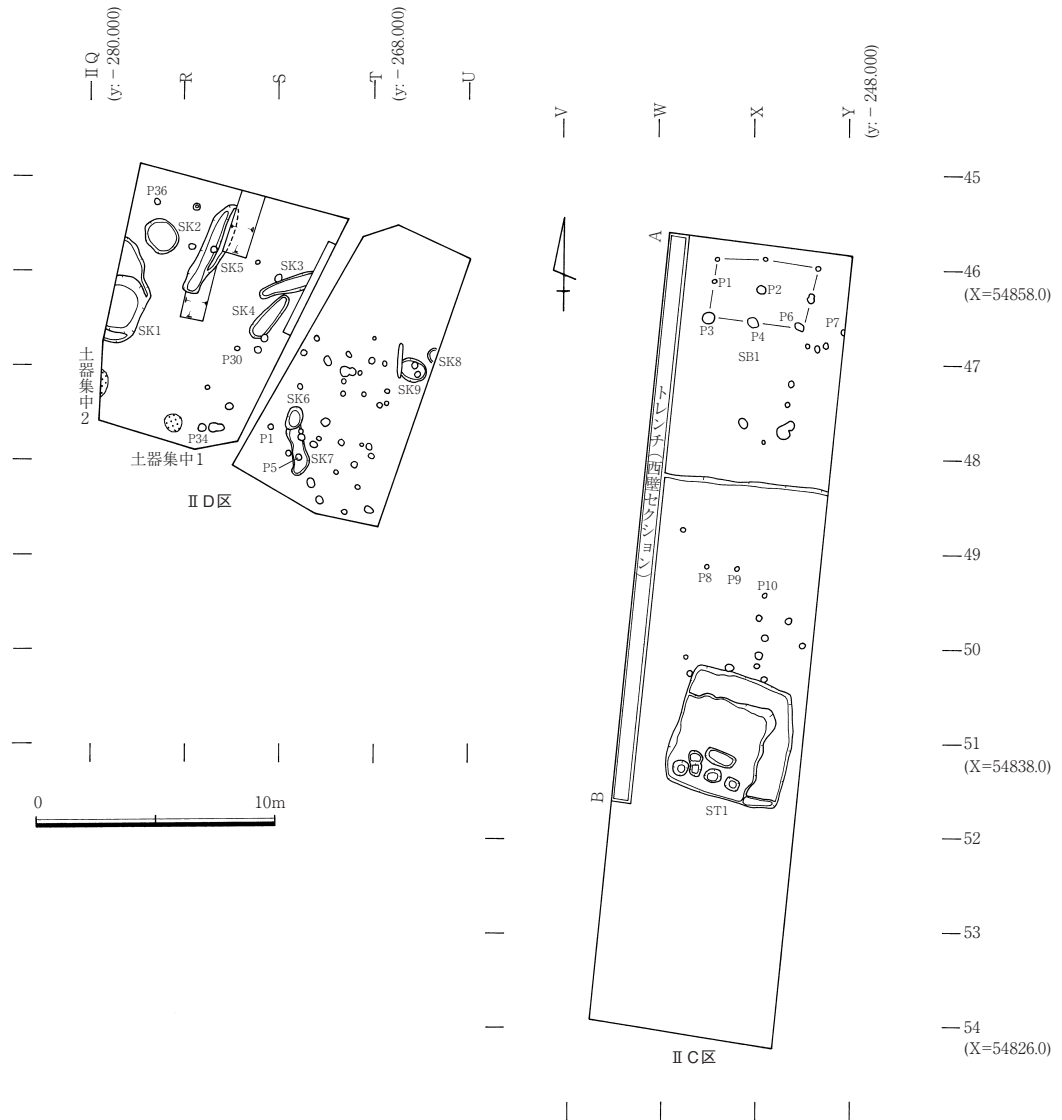


Fig.44 II C・D区 全体図

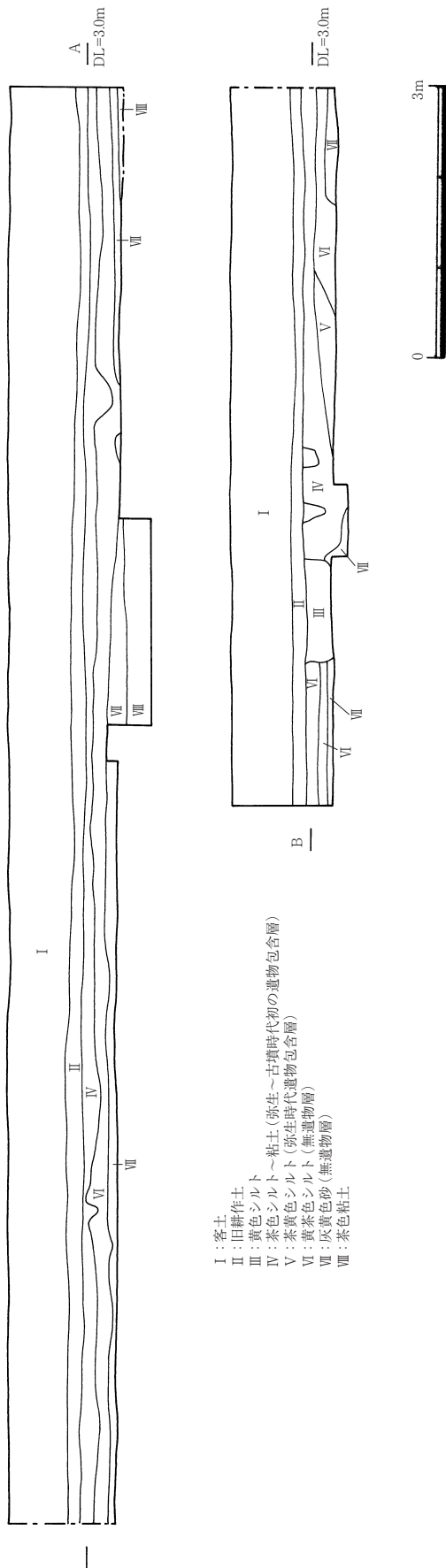


Fig.45 II C区西壁セクション

II層：旧耕作土。層厚10～15cm前後。

I層：客土。層厚80cmを測る。

II A区に近接していながら古代～中世にかけての遺物包含層を認めることができなかった。旧耕作土が形成される以前に削平されたものと考えられる。

(3) 検出遺構 (Fig.44)

調査区北部と中央部付近でピット群を検出した。これらのピットのほとんどは、旧耕作土を除いたIV層で検出した。またIV層を除去したVII層から竪穴住居を検出した。

① 竪穴住居

ST1 (Fig.46・47)

一辺4～5mの方形プラン、深さ40cm前後の竪穴住居であるが、厳密には南壁が下辺となる台形状を呈している。埋土は、I～V層でIII層には炭化物や焼土のブロックが多く含まれている。床面にはところどころ炭化物の広がりが見られる。北壁側と東壁側には逆L字状の地山削り出しのベッド状遺構が作り出されている。高床部の幅は1.4～0.9mを測り高さは10～20cm前後を測る。中央ピットは南寄りに位置する。120×56cmの楕円形をなし深さ12cm、断面皿状を呈する。床面には2～3cmの炭化物層が形成されている。支柱穴はP1・5・6・7の4本柱を想定することができる。柱穴間距離はP5-P6が2.1m、P6-P7が2.5m、P7-P1が2.4m、P1-P5が2.6mを測る。床面南部には径60cm前後のやや大型のピットが集中しているが性格は不明である。

遺物は、検出面から1～4回に分けて人工層位で取り上げたが全体的に少ない。壺(1・2)、甕(3～5・9)、鉢(6～8)、及び頸胴部細片(10～13)を図示し得た。1と7は中央ピット出土である。6は西北隅の壁にへばりついてた。8は南壁際の床面出土、9は検出面と

床面直上出土の破片の接合資料で復元完形である。鉢の6・7も完形品で、6は内面に赤彩、外面は黒色顔料が塗布されている。これらの他に埋土中や床面から前期末の土器細片(10～12)が混入出土している。ST1は弥生後期末から古墳時代初頭に属する。遺物の出土量は少ないが、出土状況から見て当該期に見られる意識的な埋め戻しが行われている可能性が高い。

②掘立柱建物

SB1 (Fig.46)

梁間2間(2.5m)、桁行2間(4.0～4.3m)の東西棟で、棟方向はN-84°-Wである。南側の柱穴(P4・5・6)は径50cm前後と大きいが、他は20～35cm前後である。柱穴の深さは概ね20cm前後を測る。遺物はP4から弥生土器細片が少量出土しているのみである。

③ピット出土の遺物 (Fig.55)

P10から針状の鉄器(95)が出土している。

④包含層出土の遺物 (Fig.47)

ほとんどがⅣ層からの出土である。弥生後期末から古墳時代初頭の土器も見られるが、後期前・中葉の土器(16～21)や前期末(13・15)や中期(14)に属するものも含まれる。

5 II D区の調査

II D区は、廃土置き場の関係などから西と東とに分けて調査を行った。Ⅴ層上面で中世の遺構を検出し、Ⅶ層上面で弥生後期の土坑を検出した。弥生後期土坑の検出面の標高はII C区とほぼ同じである。

(1) 基本層準

調査区西壁 (Fig.48)

Ⅶ層：黄色シルトで弥生時代の遺構検出面である。II C区のⅥ層に対応する。

Ⅵ層：淡茶色粘土である。層厚15～30cmを測る。弥生時代の遺物包含層でII C区のⅣ層に対応する層準である。

Ⅴ層：黄茶色シルトである。層厚5～40cmを測る。古代の遺物包含層である。

Ⅳ層：灰茶色粘土である。層厚20cmを測る。中世遺構に切られている。

Ⅲ層：中世遺構埋土である。

Ⅱ層：旧耕作土である。層厚1～3cmを測る。

Ⅰ層：客土。層厚40cm前後を測る。

(2) 検出遺構と遺物

① 土坑

SK1 (Fig.48)

調査区西端にありⅤ層上面で検出した。半分以上が調査区外に出ている。長軸4.36m、確認幅1.5m、深さ10～25cmを測る。中央部に向かって緩やかに落ち込んでいる。埋土は茶灰色粘土～シ

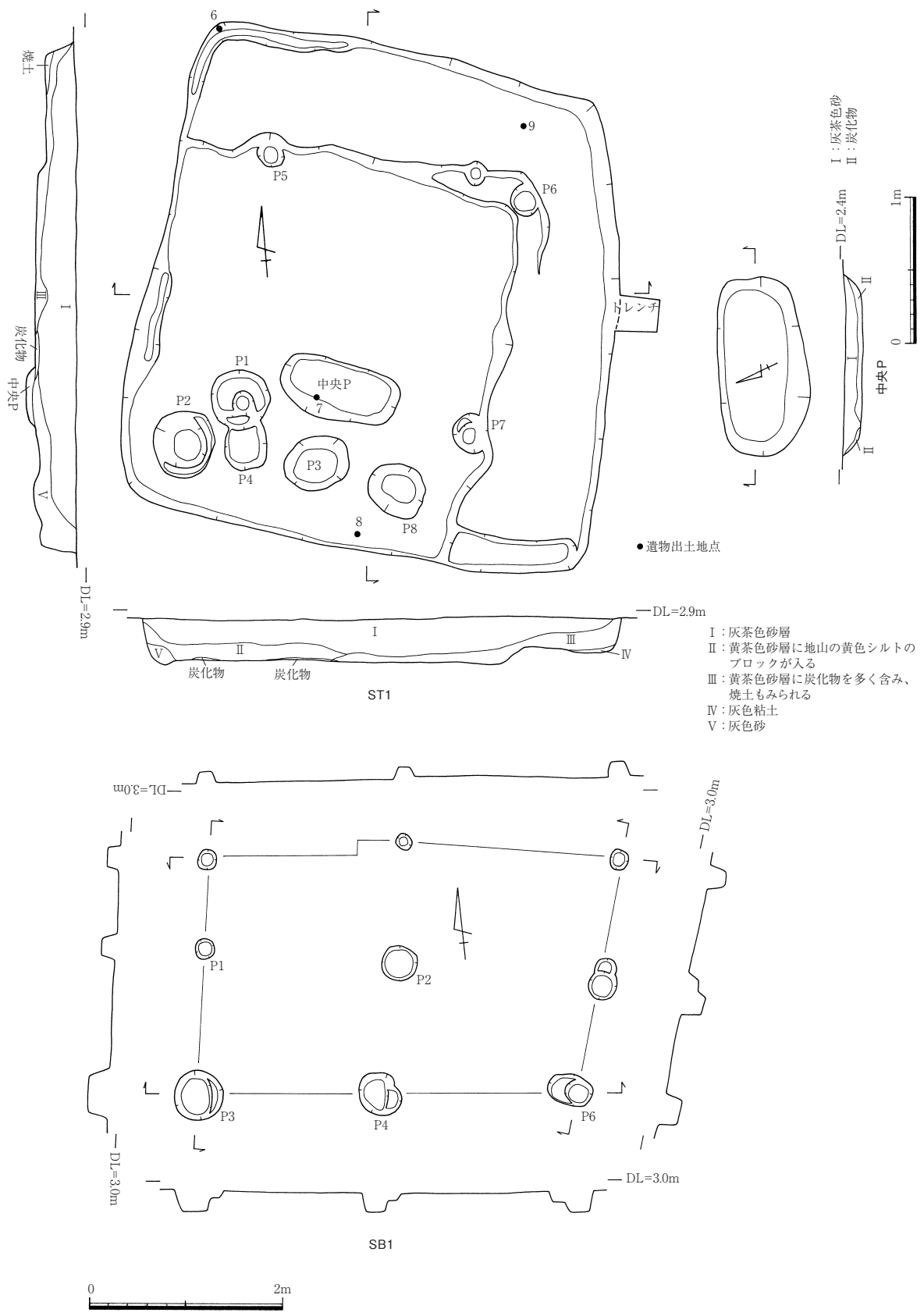


Fig.46 ST1・SB1 平面・セクション

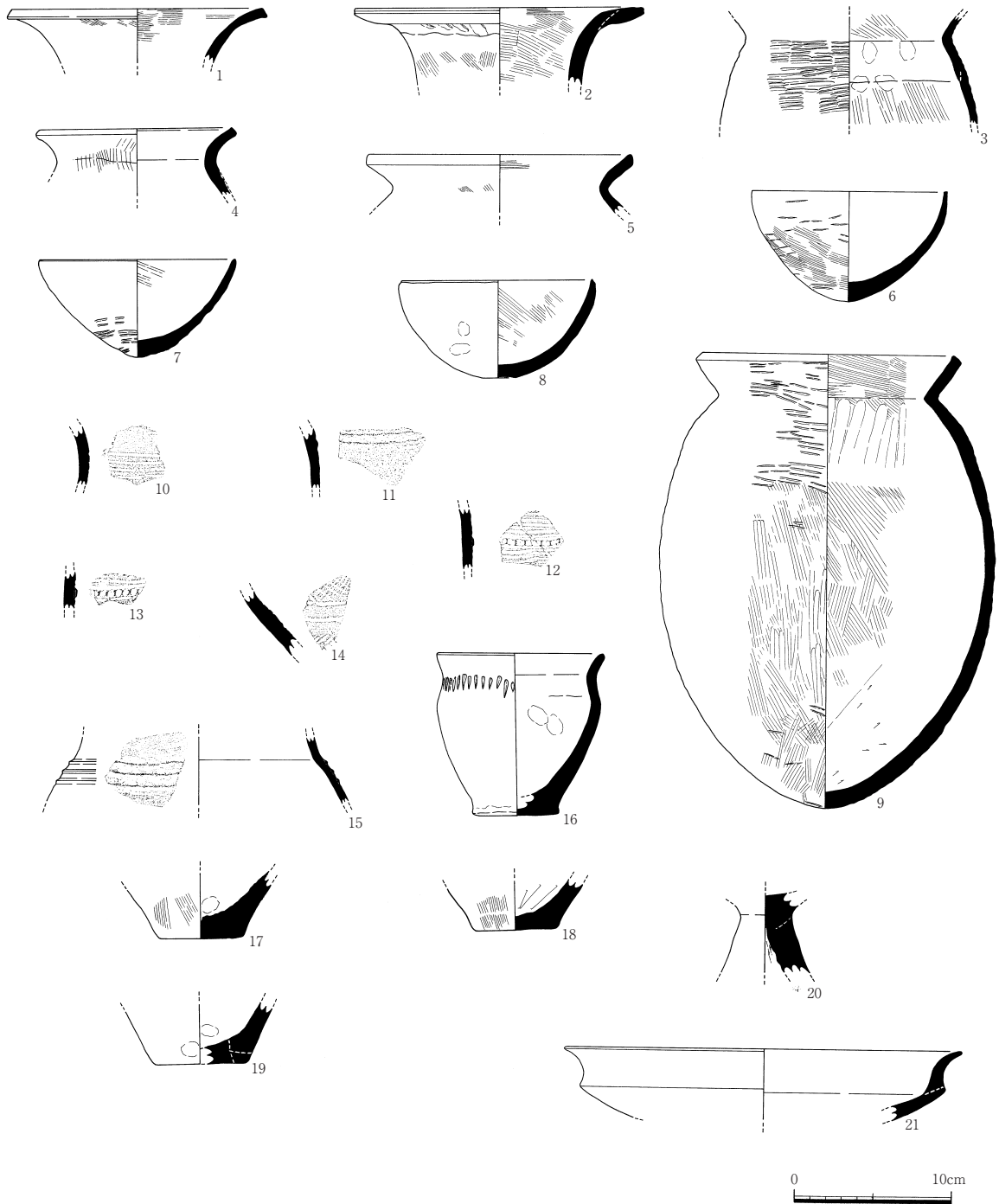


Fig.47 ST1・遺物包含層出土遺物
 (ST1: 1~13、遺物包含層: 14~21)

ルトで、地山の黄色シルトがブロック状にところどころ入っている。遺物は糸切り底をもった中世土師器の杯などの細片が多く見られるが、図化できるものはない。15世紀代の土坑である。

SK2 (Fig.49)

楕円形のプランを有する。長軸1.5m、短軸1.3m、深さ20cmを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は茶色粘土で地山の黄色シルトをブロック状に含んでいる。床面近くには炭化物が薄い層状に堆積する。叩きの見られる土器細片が多く出土しているが図化できるものはない。弥生後期末から古墳時代初頭に属する。

SK3 (Fig.49)

北端の一部がトレンチに切られているが、長軸2.5m、短軸0.6mの細長い土坑で、主軸方向はN-70°-Eである。深さ10cm前後、断面形は皿状を呈する。埋土は淡茶色粘土である。遺物は、埋土中から壺(23・24)、甕(27)、鉢(26)、底部(25・28)が出土している。弥生後期末に属する。

SK4 (Fig.49)

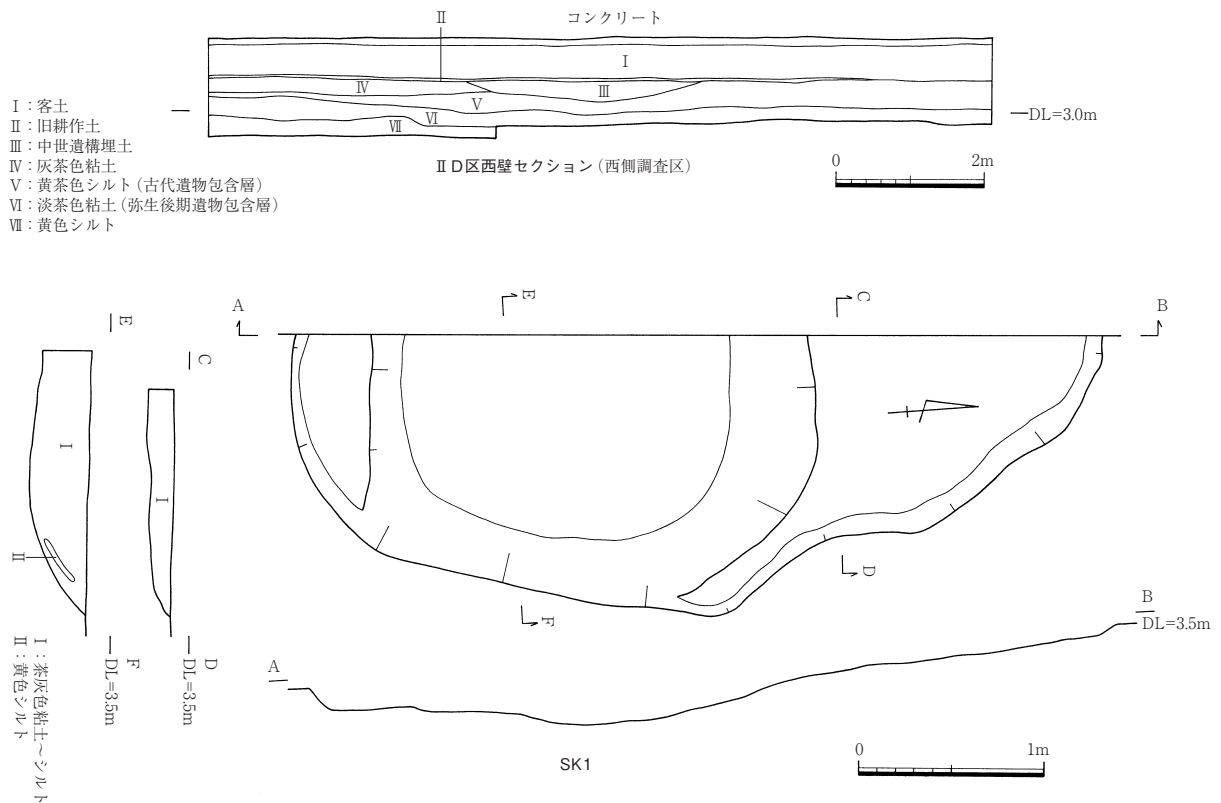


Fig.48 II D区 基本層準・SK1平面・セクション

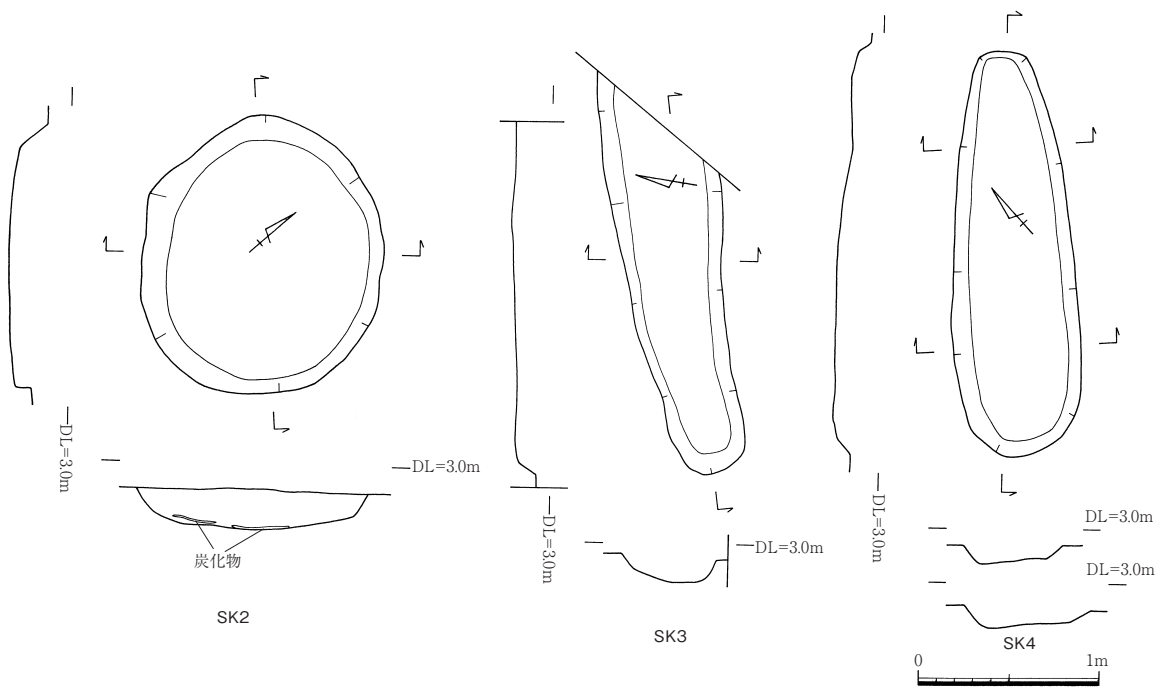
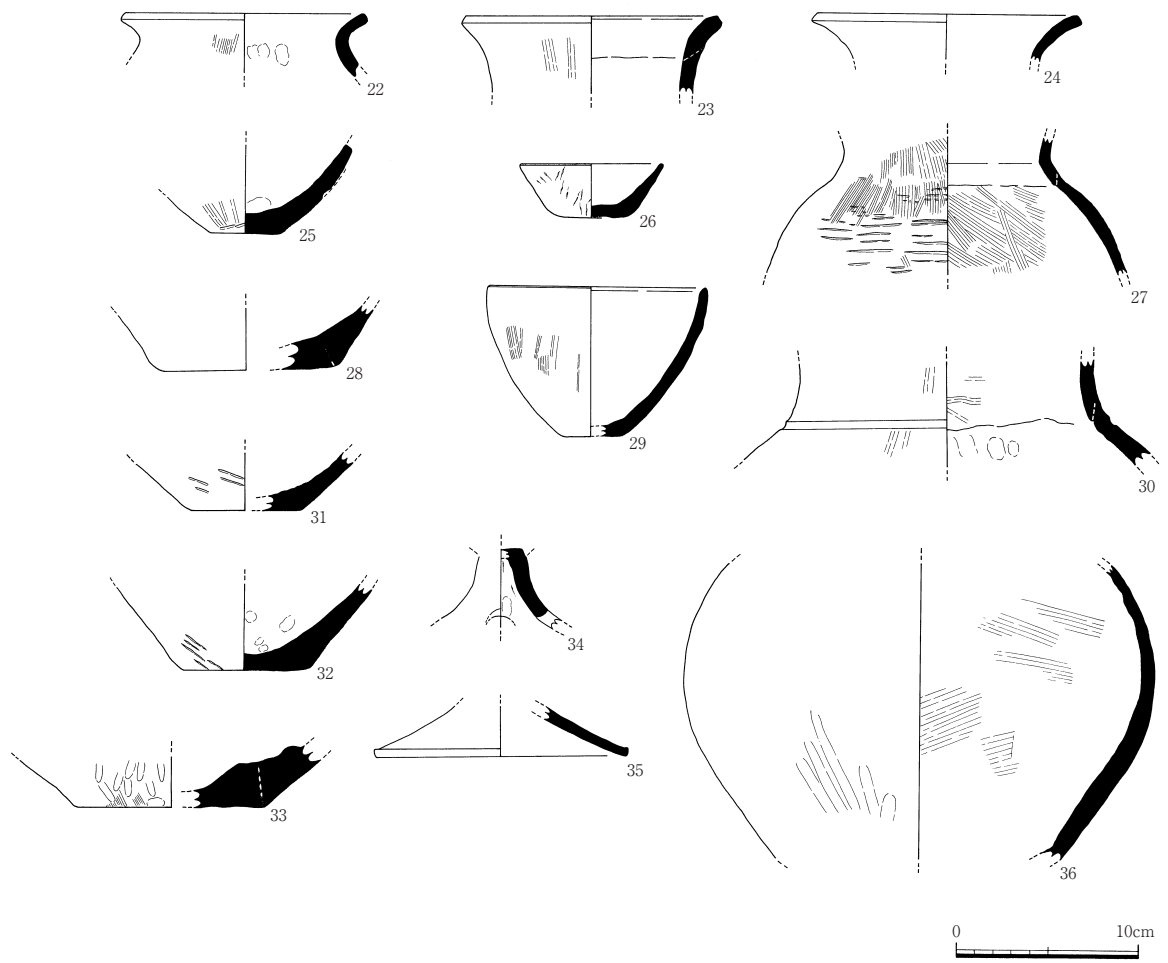


Fig.49 SK3・SK4出土遺物及びSK2～4平面・セクション
 (SK3: 23～28, SK4: 22・29～36)

SK3の南隣に位置する。長軸2.2m、短軸0.7mの細長い土坑で主軸方向はN-43°-Eである。深さ10cm前後、断面形は皿状を呈する。埋土は淡茶色粘土である。遺物は壺(30~33・36)、甕(22)、鉢(29)、高杯(34・35)が出土している。これらの内24・29~32は床面出土である。後期後葉に属する。

SK5 (Fig.50・55)

試掘トレンチに一部壊されている。長軸4.2m、短軸1.0mの細長い土坑で、主軸方向はN-24°-Eである。深さ30cm前後、断面形はV字状を呈し、東壁側には大きな平場がみられる。埋土は淡茶色粘土である。埋土中より甕(38・39)、鉢(37・40)鉄鏃(98)が出土している。後期後葉に属する。

SK6 (Fig.50)

V層上面で検出した。楕円形のプランを有し、長軸1.02m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土から弥生後期土器片とともに備前播鉢(41)が出土している。

SK7 (Fig.51)

調査区南部にある。長軸2.35m、短軸0.5~0.65mの細長い土坑で主軸方向はN-40°-Wである。埋土は灰茶色粘土である。床面直上から甕(42)、甗(43)、埋土中から石包丁(47)が出土している。43の底部には径1cmの焼成前穿孔がなされている。石包丁はチャート製で片面に未貫通の穿孔痕跡が認められる。使用によると見られる光沢が顕著である。古墳時代初頭に属する。

SK8 (Fig.51)

大半が調査区外に出ている。後期前葉の土器細片が出土している。

SK9 (Fig.51)

楕円形のプランを有し長軸1.14m、短軸0.9m、深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈す。埋土は灰茶色粘土である。埋土中から甕(44・45)、高杯(46)が見られる。後期中葉に属する。

②集中出土の土器

土器集中1 (Fig.52)

調査区南端に位置しⅦ層上面で検出した。甕5~6個体分程が集中して出土している。図示できたのは甕(48~53・55・56)、鉢(54)である。叩き目の残るものが多いが、弥生時代の中に収まるものである。

土器集中2 (Fig.52)

調査区西壁際に位置し調査区外にも広がっている。Ⅶ層上面である。長頸壺(57・58)、鉢(59)、甕(60)、高杯(61)、叩石(62・63)、軽石(64)が集中して出土している。土器集中1よりは明かに古相の一群である。叩石の石材は砂岩で、62の側縁の一部に赤色顔料が付着している。後期前・中葉に属する。

③ピット出土の遺物 (Fig.54・55)

ピットの大半はⅦ層で検出した中世に属するものである。多くのピットから中世土師器細片が出土しているが、図示し得たのはP1出土の棒状鉄片(99)とP5・P34出土の杯底部(86・87)である。P36はⅦ層で検出した。須恵器杯(92)が出土している。

④遺物包含層出土の土器 (Fig.53・54)

Ⅵ~Ⅴ層中から弥生中・後期、古墳時代、古代、中世の遺物が出土している。弥生土器では、壺

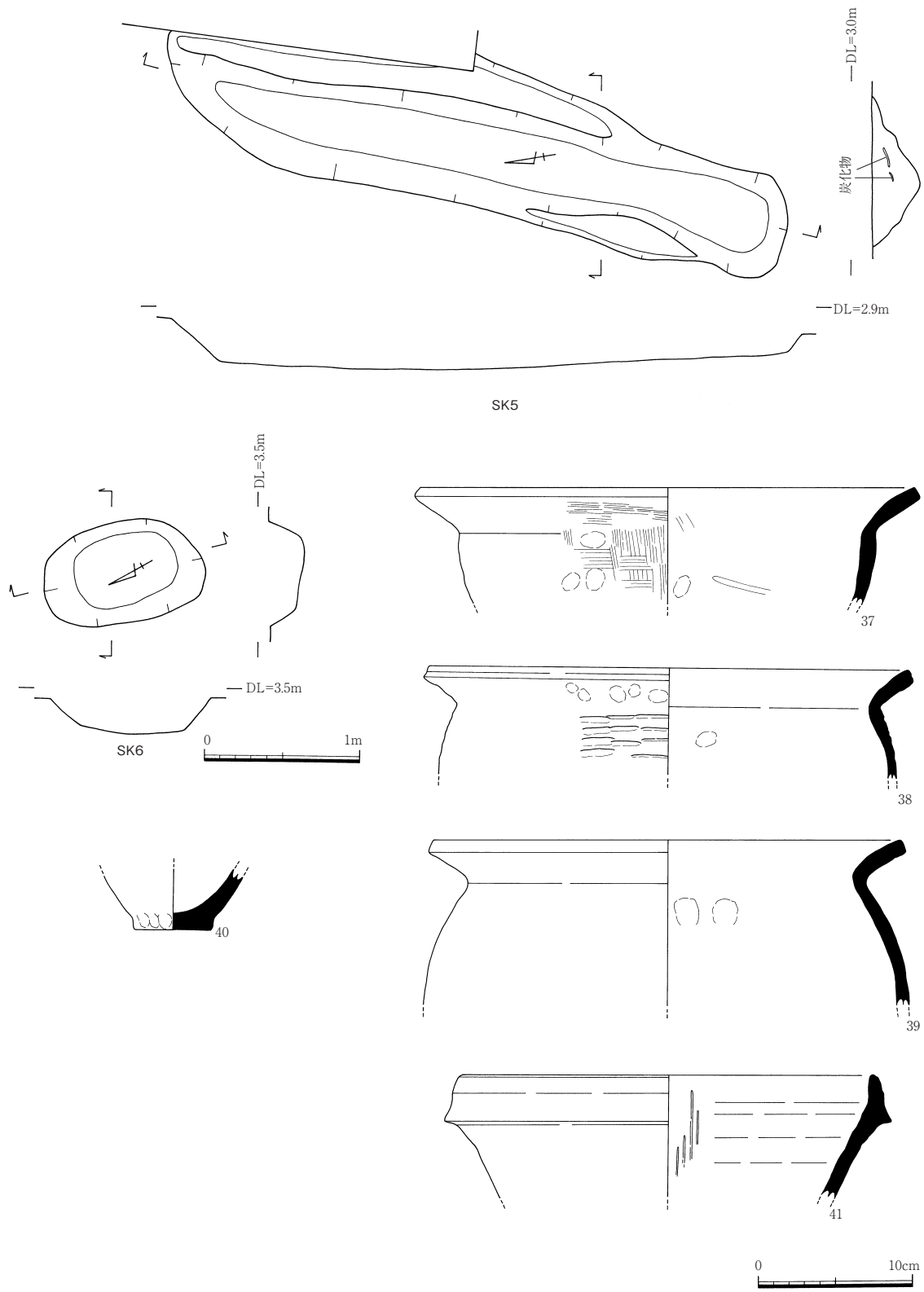
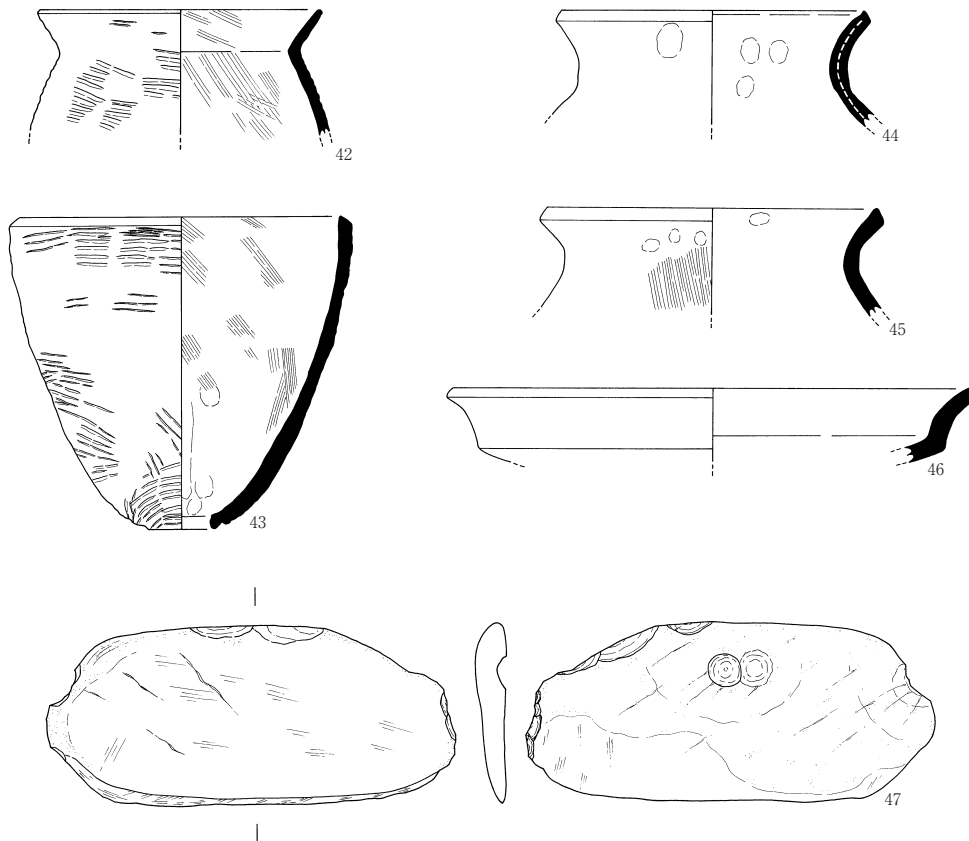
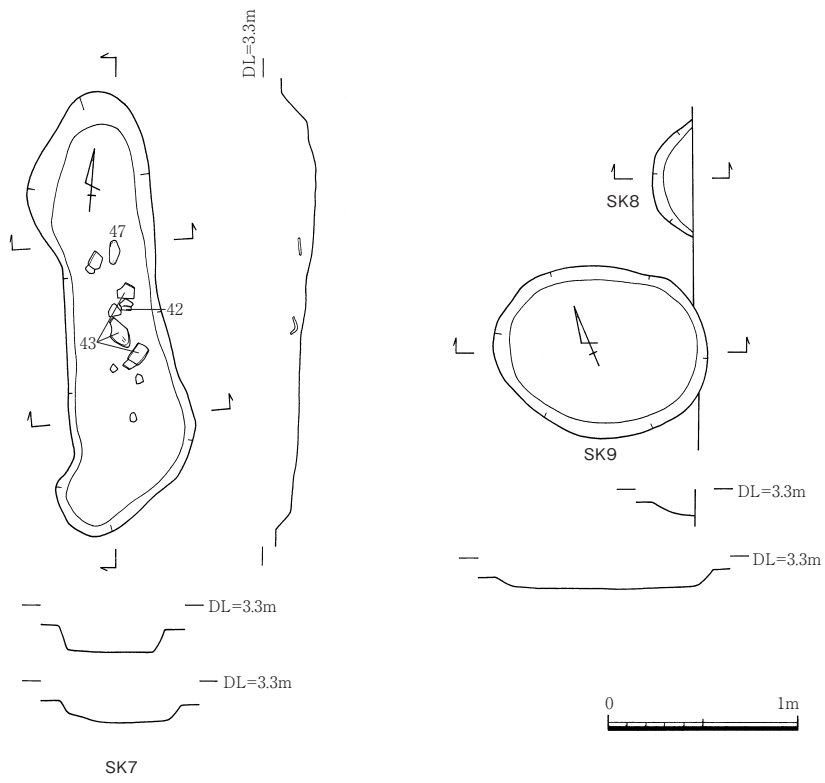


Fig.50 SK5・SK6平面・セクション及び出土遺物
(SK5: 37~40、SK6: 41)

(67・69・80)、甕(65・66・70～72・79・81・82)、鉢(73・74)、高杯(75・76～78)、蓋(83)が出土している。壺(67)は口縁部に凹線文が施されている。69は二重口縁壺である。甕(70・71)は胴部内面にヘラ削りが見られる。高杯(76)は杯部に凹線文が見られ、75と同一個体と思われる。75・76は中期後葉に属する。84は打ち欠き石錘、石材は石英粗面岩で148 gを測る。

古墳時代の遺物は、甕(68)、須恵器杯蓋(89・90)、同身(91)が出土している。68は河内産庄内甕の搬入品である。90はMT15、89はTK10に比定できる。

古代は緑釉皿(85)、須恵器椀(88)、須恵器壺(93)が見られる。緑釉皿は軟胎である。須恵器椀は糸切りである。94は、三脚付の皿である。精選された胎土が用いられている。この他に鉈(96)、棒状鉄片(97)、鉄塊(100)が出土している。



0 10cm
(47は1/2)

Fig.51 SK7～9平面・セクション及びSK7・SK9出土遺物
(SK7: 42・43・47, SK9: 44～46)

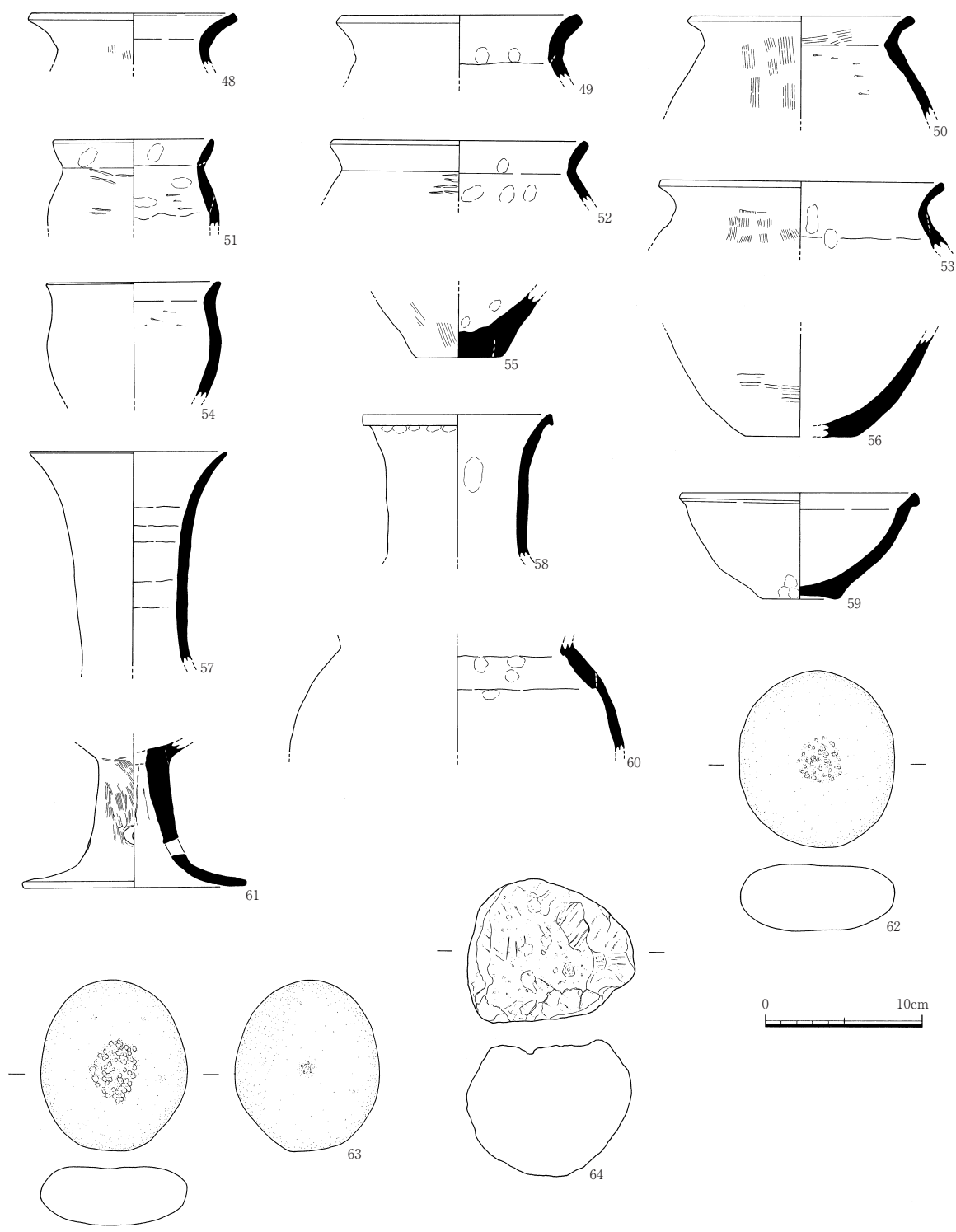


Fig.52 土器集中1・土器集中2 出土遺物
 (土器集中1: 48~56、土器集中2: 57~64)

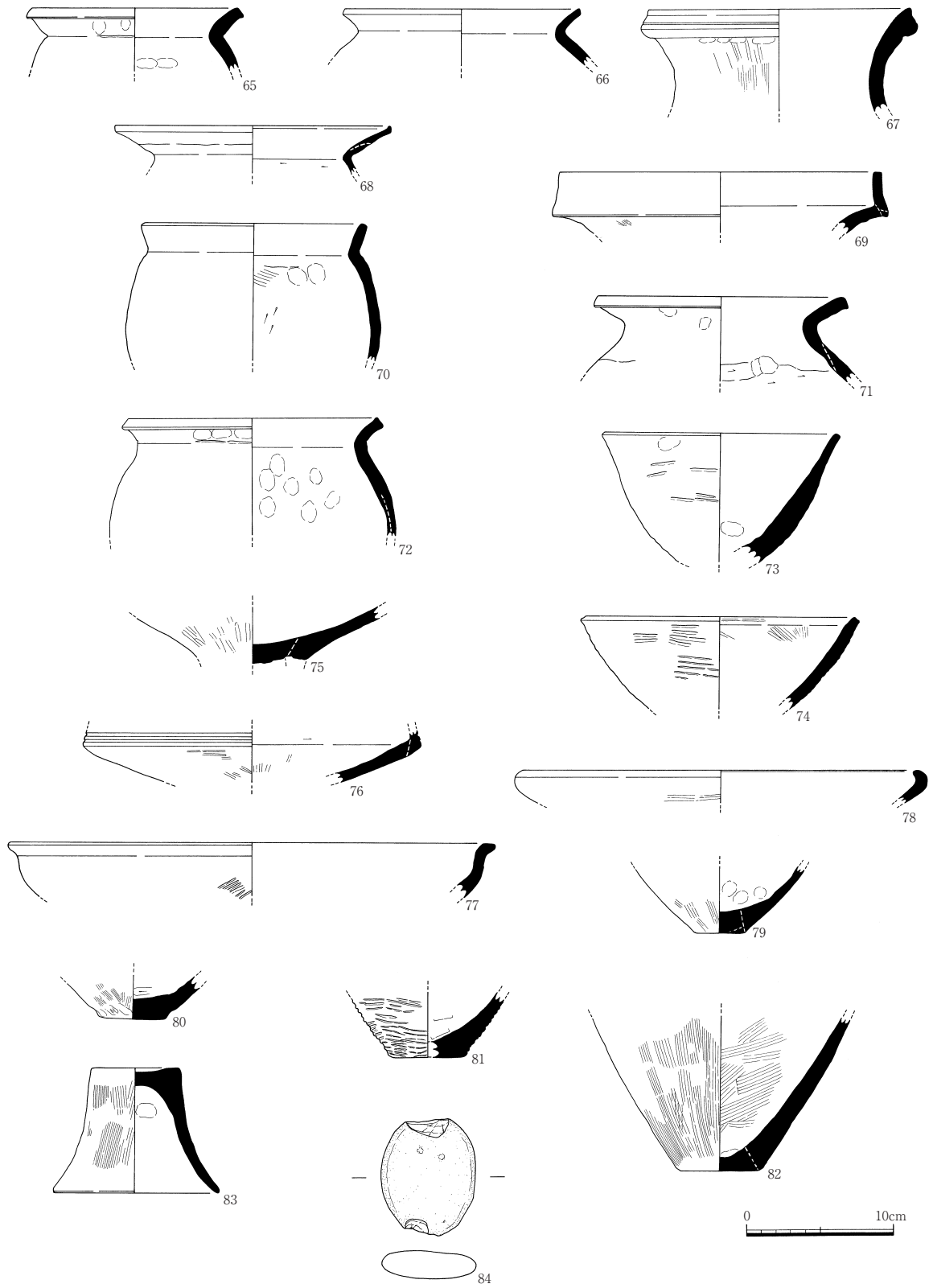


Fig.53 II D区 遺物包含層出土遺物

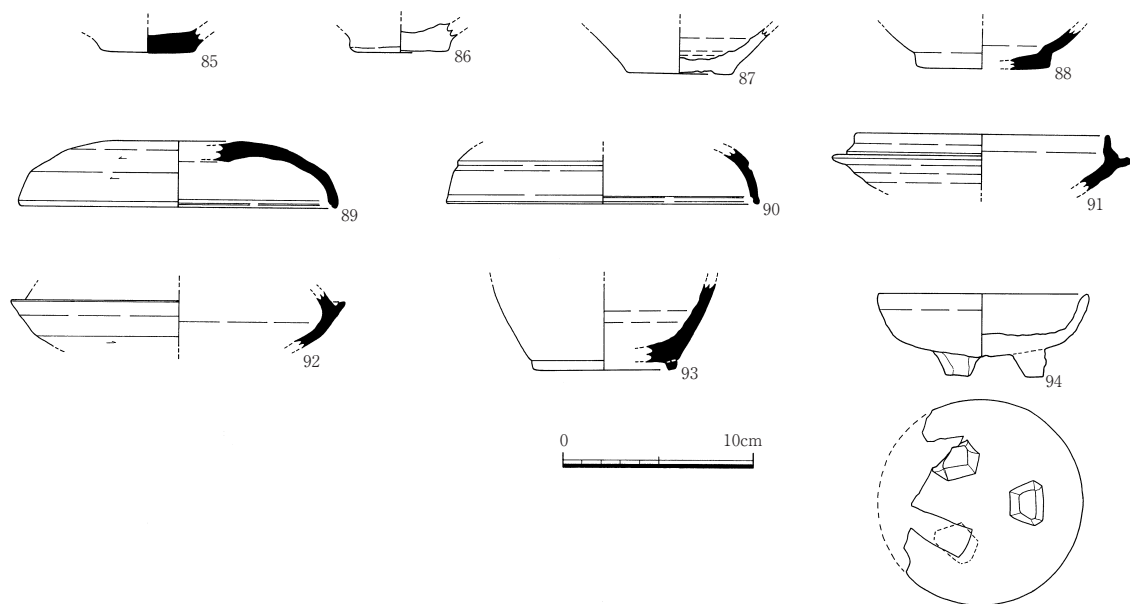


Fig.54 P5・P34・P36及びⅡD区遺物包含層出土遺物
 (P5:86、P34:87、P36:92、遺物包含層:85・88~91・93・94)

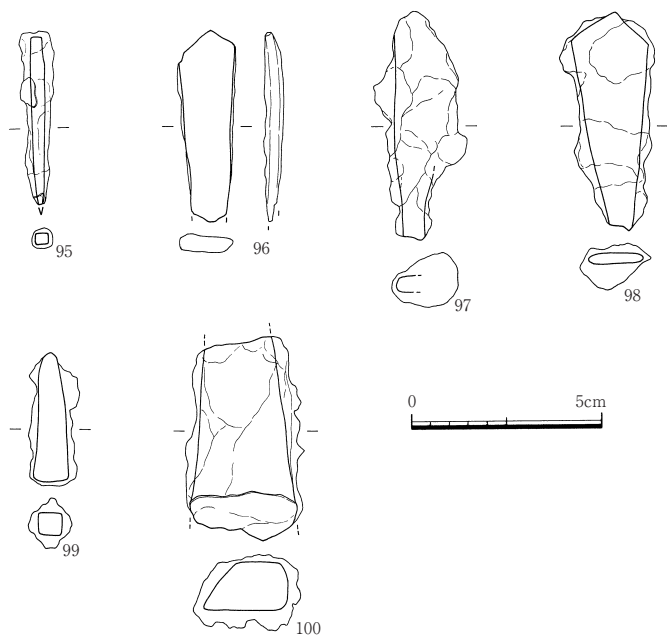


Fig.55 ⅡC・D区出土鉄器
 (ⅡC区P10:95、ⅡD区遺物包含層:96・97・100、ⅡD区SK5:98、ⅡD区P1:99)

II C区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径				
1	ST1 中央P	壺	(3.5)	16.0	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を含む	にぶい黄橙色	広口壺。口唇面取り。外面右下がりのハケ。内面ヨコハケ。	
2	ST1	壺	(4.9)	18.4	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を含む	にぶい黄橙色	広口壺。口縁外面肥厚、指頭圧痕。口縁外面ユビナデ+ヨコナデ。内面ヨコハケ+ヨコナデ。頸部外面タテまたは右下がりのハケ。内面右下がりのハケ。	
3	ST1	甕	(6.8)	—	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	口縁叩き出し。外面ヨコ方向のタタキ。内面ナデ+タテハケ。	
4	ST1	甕	(4.25)	12.2	—	—	チャートの粗粒を多く含む	にぶい橙色	口縁外面タテハケ+ヨコナデ。内面ヨコハケ+ヨコナデ。胴部内面ナデ。	口縁内面・外面煤付着
5	ST1	甕	(3.7)	16.6	—	—	チャートの粗粒砂を少量含む	橙色	口縁外面ヨコナデ。頸部以下右下がりのハケ。口縁内面ヨコハケ+ヨコナデ。	
6	ST1	鉢	7.0	12.5	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	尖底。外面タタキ後右下がりのハケ、口縁部はヨコナデ。内面摩擦顕著。	外面黒色塗布 内面赤彩
7	ST1	鉢	6.2	12.8	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	外面タタキ+ナデ。内面ナデ。	
8	ST1	鉢	6.2	6.2	—	2.2	チャートの粗粒を含む	黄橙色	外面タタキ後口縁ナデ、他はナデ。外面下半はケズリ。底部ナデ。内面右下がりのハケ。	
9	ST1	甕	28.9	16.0	—	—	あまり砂粒を含まない	灰黄色	尖底。口縁外面タタキ後ナデ。内面ヨコまたは右下がりのハケ。上胴部外面タタキ+ナデ以下外面タタキ+タテハケ、部分的にタテ方向のヘラミガキ。上胴部内面ナデ、胴中部右下がりまたは左下がりのハケ。底部は左下から右上へのヘラケズリ。	胴部下半煤付着
10	ST1	壺	(3.6)	—	—	—	あまり砂粒を含まない	にぶい橙色	4条のヘラ描き沈線を施す。外面ヘラミガキ+ヨコハケ。内面摩擦。	前期の壺
11	ST1	甕	(3.7)	—	—	—	チャートの粗粒砂を含む	灰黄色	肩部外面に2条以上の微隆起帯を貼付。外面摩擦。内面ナデ。	南四国タイプ
12	ST1	壺	(3.8)	—	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	外面上下5条ずつのヘラ描き沈線、沈線間に幅約0.5cmの扁平な刻目突帯貼付。内面ナデ。	
13	ST1	壺	(2.2)	—	—	—	チャート、長石の粗粒を含む	橙色	外面上下2条ずつのヘラ描き沈線、沈線間に扁平な刻目突帯貼付。	
14	包含層	壺	—	—	—	—	チャートの粗粒砂を含む	灰黄色	外面斜格子文+櫛描直線文。内面ヨコハケ。	
15	包含層	甕	(4.3)	—	—	—	チャートの粗粒砂を含む	にぶい黄橙色	肩部外面に3条の微隆起帯を貼付。内外面ナデ。	
16	包含層	鉢	10.3	10.5	—	5.5	チャート、石英の粗粒を多く含む	灰色	口縁部外面ヨコナデ、頸部に烈点文。胴部外面ナデ、下半はヨコナデ。内面ナデ。	
17	包含層	甕	(4.2)	—	—	5.4	チャートの粗粒を多く含む	にぶい黄橙色	外面タテハケ。内面ナデ。	
18	包含層	甕	(3.1)	—	—	5.4	チャートの粗粒を多く含む	にぶい橙色	外面タテハケ。内面ナデ。	
19	包含層	甕	(3.8)	—	—	6.0	チャートの粗粒を多く含む	にぶい黄橙色	内外面ナデ。	
20	包含層	高杯	(5.0)	—	—	—	チャートの細粒砂を含む	橙色	外面ナデ。内面しぼり目、径0.3cm程の穴があく。	
21	包含層	高杯	(4.55)	25.4	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を含む	橙色	内外面摩擦するが、内面ミガキ。	

II D 区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径				
22	SK4	甕	(3.3)	13.0	—	—	チャート他の粗粒砂を含む	にぶい黄橙色	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ。内面ナデ。接合部剥離。	
23	SK3	壺	(4.3)	14.0	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	口縁端部ハケ。外面タテハケ。内面摩耗。	
24	SK4	壺	(2.5)	14.4	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	内外面器面荒れ。	
25	SK3	甕	(4.9)	—	—	3.8	砂粒をあまり含まない	にぶい黄褐色	外面タタキ+タテハケ。内面摩耗。	外面煤付着
26	SK3	鉢	3.0	7.8	—	4.2	砂粒をあまり含まない	にぶい黄褐色	内外面ナデ。外面ひび割れる。	
27	SK3	甕	(7.5)	—	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい褐色	口縁内面ナデ。外面水平のタタキ後頸部タテハケ。胴部内面右下がりのハケ。	外面煤付着
28	SK3	壺	(3.4)	—	—	10.0	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	外面タテハケ+ナデ。内面摩耗。	
29	SK4	鉢	8.3	10.9	—	4.4	チャートの粗粒砂を含む	にぶい黄橙色	外面タテハケ+ナデ。内面上半ヨコナデ、下半ナデ。	下胴部に黒斑
30	SK4	壺	(5.8)	—	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	肩部ににぶい沈線。外面タテハケ。内面ナデ。	
31	SK4	壺	(3.2)	—	—	6.0	チャートの粗粒を含む		内外面器面荒れ。外面タタキ+ナデか。	
32	SK4	壺	(4.8)	—	—	7.0	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	外面タタキ+タテハケ+ナデ。内面ハケ+ナデ。	
33	SK4	壺	(2.6)	—	—	10.4	砂粒をあまり含まない	にぶい橙色	外面ハケ+ヘラミガキ。内面剥落。	
34	SK4	高杯	(4.4)	—	—	—	砂粒をあまり含まない	にぶい黄褐色	外面器面荒れ。内面しぼり目。	
35	SK4	高杯	(2.8)	—	—	13.6	チャートの粗粒砂を含む	にぶい橙色	内外面器面荒れ。	
36	SK4	壺	(16.3)	—	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を多く含む	にぶい黄褐色	外面上半ナデ、下半タテ方向のヘラミガキ。内面ヨコまたは右下がりのハケ。	
37	SK5	鉢	(7.6)	32.0	—	—	チャートの粗粒、小礫を多く含む	褐灰色	口縁内外面ヨコハケ。胴部外面タテ、ヨコのハケ。内面ナデ。	
38	SK5	甕	(7.0)	31.0	—	—	チャートの粗粒を含む	褐灰色	口縁外面指頭圧痕。胴部外面水平のタタキ。内面器面荒れ。	外面煤付着
39	SK5	甕	(10.7)	30.4	—	—	チャート、長石の粗粒砂、小礫を多く含む	橙色	内外面器面荒れ。	
40	SK5	鉢	(4.0)	—	—	5.0	砂粒をあまり含まない	橙色	内外面器面荒れ。外面ナデ。底部付近指頭圧痕顕著。	
41	SK6	備前 播鉢	(8.0)	26.6	—	—		灰褐色	内外面ヨコナデ。わずかに条線を認める。	IVB 期か (15C 後半)
42	SK7	甕	(6.6)	14.8	—	—	砂粒をあまり含まない	にぶい黄褐色	口縁叩き出し。外面水平のタタキ。内面右下がりのハケ。	口縁外面煤付着
43	SK7	甕	16.5	17.0	—	—	チャートの粗粒、赤色粒を含む	橙色	外面水平または右下がりのタタキ+ナデ。内面右下がりのハケ+ナデ。	煤けてないか
44	SK9	甕	(6.1)	16.0	—	—	チャートの粗粒、小礫を多く含む	黄灰色	内外面ヨコナデ、器面荒れ。	
45	SK9	甕	(5.7)	17.4	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄褐色	胴部外面タテハケ、他は器面荒れ。	外面顔料塗布
46	SK9	高杯	(3.9)	27.2	—	—	チャートの粗粒を多く含む	にぶい橙色	口縁外面ヨコナデ。杯部外面右下がりのハケ。内面器面荒れ。	
48	土器集中 1	甕	(3.3)	12.8	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄色	口縁外面ナデ。内面ヨコナデ。頸部外面タテハケ。	

Ⅱ D 区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径				
49	土器集中 1	甕	(4.0)	15.0	—	—	チャートの粗粒を含む	橙色	外面ヨコナデ。内面摩耗。	外面煤付着
50	土器集中 1	甕	(6.6)	14.0	—	—	チャートの粗粒を多く含む	にぶい黄橙色	口縁外面ヨコナデ。内面ヨコハケ。胴部外面タテハケ。内面頸部直下まで左←右のケズリ	
51	土器集中 1	甕	(5.5)	10.0	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	口縁外面ナデ、以下タタキ+ナデ。内面左←右のケズリ、摩耗。	
52	土器集中 1	甕	(3.9)	16.0	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を含む	にぶい黄橙色	口縁外面ナデ、以下タタキ+ナデ。内面ナデ。	
53	土器集中 1	甕	(4.3)	18.0	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	口縁外面ヨコナデ。胴部タテハケ。内面ナデ。	
54	土器集中 1	鉢	(7.4)	11.0	—	—	チャートの細粒、赤色粗粒を少量含む	にぶい橙色	口縁部内外面ヨコナデ。外面ハケ+ミガキ。上胴部内面左←右のケズリ、下半はナデ。	外面煤付着
55	土器集中 1	甕	(4.1)	—	—	2.6	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	外面タテハケ+ナデ。内面ナデ。外底ハケ+ナデ。	
56	土器集中 1	甕	(6.6)	—	—	7.0	チャートの粗粒、赤色粗粒を多く含む	にぶい黄橙色	外面ヨコ方向のタタキ+ナデ。内面ナデ。	底部
57	土器集中 2	壺	(13.9)	12.6	—	—	細粒砂を多く含む	にぶい橙色	長頸壺。頸部外面タテハケ。内外面器面荒れ。	
58	土器集中 2	壺	(9.1)	12.0	—	—	チャートの粗粒砂を含む	にぶい橙色	口縁端面取り。内外面器面荒れ。	
59	土器集中 2	鉢	6.8	14.8	—	5.2	チャートの粗粒を多く含む	にぶい橙色	口縁部は内面に稜をなす。内外面器面荒れ。外面タテハケ。内面ミガキ。	底部付近に黒斑
60	土器集中 2	甕	(6.8)	—	—	—	チャートの粗粒を含む	橙色	外面器面荒れる。内面ナデ。	外面煤付着
61	土器集中 2	高杯	(9.3)	—	—	14.5	チャートの粗粒を含む	にぶい橙色	脚部には3ヶ所の焼成前穿孔。柱状部タテハケ+タテヘラミガキ。内面しぼり目。裾部ヨコナデ。端面取り。	
65	包含層	甕	(4.3)	7.0	—	—	チャートの粗粒、赤色粗粒を含む	橙色	内外面器面荒れ。	外面煤付着
66	包含層	甕	(3.9)	16.0	—	—	チャートの粗粒を含む	橙色	内外面器面荒れ。	
67	包含層	壺	(7.0)	18.0	—	—	チャートの粗粒、小礫を多く含む	にぶい褐色	口縁部は下方にやや拡張し端面に3条の凹線を施す。頸部外面はタテ方向のハケ+ナデ。内面ナデ。	
68	包含層	甕	(3.3)	18.5	—	—		黄褐色	口縁内外面ヨコナデ。胴部内面左←右のケズリ。	庄内式土器。河内産。
69	包含層	壺	(4.6)	22.0	—	—	チャートの粗粒砂、赤色粗粒を多く含む	褐灰色	二重口縁壺。二次口縁外面ナデ。頸部外面右下がりのハケ+ナデ。器面荒れ。	
70	包含層	甕	(9.4)	14.7	—	—	チャートの粗粒を含む	にぶい黄橙色	内外面器面荒れ。胴部内面下から上へのケズリ+ナデ。上端は右下がりのハケ。	
71	包含層	甕	(5.8)	16.7	—	—	チャート他の粗粒砂を含む	にぶい黄橙色	胴部外面ナデ。内面左→右のヘラケズリ。	外面煤付着
72	包含層	甕	(8.0)	17.0	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む	にぶい褐色	口縁端面取り。口縁外面指頭+ヨコナデ。内面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	
73	包含層	鉢	(8.85)	15.8	—	—	チャートの粗粒を含む	淡黄色	外面水平のタタキ。内面ナデ。器面荒れ。	
74	包含層	鉢	(6.3)	18.4	—	—	砂粒をあまり含まない	にぶい橙色	口縁端面取り+ハケ。口縁内面ヨコハケ。体部外面水平または右下がりのタタキ+ナデ。内面右下がりのハケ+ミガキ。	

II D 区土器 観察表

図版 番号	出土地点	器種	法量 (cm)				胎土	色調	特徴	備考
			器高	口径	胴径	底径				
75	包含層	高杯	(3.9)	—	—	—	チャート、長石の粗粒砂を多く含む	にぶい黄褐色	外面タテ方向のミガキ。内面ナデ。	76 と同一個体
76	包含層	高杯	(3.6)	—	—	—	チャート、長石の粗粒砂を多く含む	にぶい黄橙色	杯部下端に2本かそれ以上の凹線を施す。外面周縁はヨコ、内側はタテのミガキ。内面周縁はナデ、内側はミガキ。	75 と同一個体
77	包含層	陶質土器 器台	(3.7)	33.2	—	—	砂粒を全く含まない	褐灰色・断面セピア色	口縁外面ヨコナデ。杯部外面タタキ。内面あばた状。	
78	包含層	高杯	(2.3)	26.8	—	—	チャートの粗粒砂を多く含む	にぶい橙色	外面ヨコハケ+ヘラミガキ。内面ナデ。	中期末 / 松山平野に多くある
79	包含層	甕	(4.6)	—	—	3.4	チャートの粗粒少量含む	にぶい橙色	外面タテハケ+ナデ。内面ナデ。	
80	包含層	壺	(3.0)	—	—	4.6	チャートの粗粒を多く含む	にぶい橙色	外面タテハケ。内面ナデ。	
81	包含層	甕	(4.5)	—	—	5.4	チャートの粗粒を含む	橙色	外面水平のタタキ。内面ナデ。	
82	包含層	甕	(10.6)	—	—	6.0	チャートの粗粒少量含む	にぶい橙色	外面丁寧なタテハケ。内面右上がりまたはヨコハケ。外面・外底被熱赤変。	外面煤付着 下胴部に黒斑
83	包含層	蓋	8.55	11.3	—	—	チャート、長石の粗粒を非常に多く含む	浅黄色	口縁外面ナデ。外面タテハケ。内面ナデ。	
85	包含層	緑釉 皿	(1.3)	—	—	5.0		浅黄橙色	ベタ高台。外面器面荒れ。内面薄黄緑色の釉。	素地土師器
86	P5	土師器 杯	(1.5)	—	—	4.8	チャートの細粒砂を含む	にぶい黄橙色	底部糸切り+ナデ。	
87	P34	土師器 杯	(2.5)	—	—	5.5	チャートの細粒砂を含む	にぶい黄橙色	底部糸切り。内外面ヨコナデ。	
88	包含層	須恵器 椀	(2.1)	—	—	7.2		灰白色	ベタ高台。底部ヘラ切り。平行圧痕。内外面器面荒れ。	
89	包含層	須恵器 杯蓋	3.5	16.6	—	—	チャートの粗粒少量含む	灰色	口縁外面はヨコナデ。内面は面をなし細かい沈線あり。外面は天井部ケズリ以下ナデ、ケズリの順で調整。内面ヨコナデ。ロクロ左まわり。	
90	包含層	須恵器 杯蓋	(2.85)	16.4	—	—	精選された胎土	灰色	口縁内面明瞭な沈線。内外面ヨコナデ。	MT15
91	包含層	須恵器 杯身	(3.0)	13.3	—	—	砂粒を殆ど含まない	灰色	外面左←右の回転ケズリ。内面ヨコナデ。受け部はヨコナデ。立ち上がり部は非常に強いナデにより凹む(沈線を意識したもの)。	
92	P36	須恵器 杯身	(3.0)	—	—	—	チャートの砂粒砂を少量含む	灰色	受け部および杯外面ヨコナデ。内面ヨコナデ。底部外面左→右のケズリ。	
93	包含層	須恵器 壺	(4.5)	—	—	7.6	砂粒を殆ど含まない	褐灰色	内外面ヨコナデ。外面あばた状。	
94	包含層	土師質 土器 三足皿	4.4	11.0	—	—	砂粒を含まない	橙色	脚は6面取り。外面ヨコナデ。内面ヨコナデ痕顕著。	

II D 区石器

図版 番号	出土地点	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	石質	特徴	備考
47	SK7	石包丁	10.8	4.75	0.8	58.1	チャート	表面及び一部裏面は研磨され滑らか。裏面には未完通の孔が2ヶ所。刃部は磨かれている。刃部やその付近はかなり使用されている。未孔のまま使用に共している。	
62	土器集中2	叩石	11.3	10.0	4.3	760.0	砂岩	両主面中央に弱い敲打痕。	側縁に朱(ベンガラ)付着
63	土器集中2	叩石	10.9	9.3	3.7	560.0	石英粗面岩	片面は被熱赤変。両主面中央に敲打痕。	
64	土器集中2	砥石	9.2	10.7	8.8	175.3	軽石	使用痕による凹面をなす。多面体のうち5面に使用痕によるとみられる平滑面。	
84	包含層II	石錘	8.0	6.5	1.9	148.4	石英粗面岩	打ち欠き石錘。上端は表面より、下端は表裏両面から打ち欠く。	

II C・D 区 鉄

図版 番号	調査区	遺構 / 層序	分類	全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	備考
95	II C 区	P10	不明・製品	4.40	上 0.35 下 0.20	0.30	3.40	先端尖る
96	II D 区	包含層中層	鈍	5.00	1.30	0.25	8.00	
97	II D 区	包含層下層	棒状鉄片	6.00	1.50	0.45	19.70	断面扁平。錆び膨れ顕著。下は断面方形。
98	II D 区	SK5 I 層	鉄鏃	5.80	身部幅 2.00 基部幅 0.80	0.30	23.30	圭頭式
99	II D 区	P1	棒状鉄片	3.50	0.70	0.60	5.10	断面方形
100	II D 区	包含層 I 層	鉄塊	5.40	2.40	1.30	45.20	

第Ⅳ章 高知平野西部の古代土器

馬場末遺跡ⅡA・B区(以下ⅡA・B区)及び2002年度に報告した西分増井遺跡ⅠA区(以下ⅠA区)からは古代の土器がまとまって出土している。すでに触れたように両遺跡は、同一の遺跡として把握すべきものであり、その場合は以下西分増井遺跡群と呼称する。ⅠA区では、古代前期の土器が中心に、ⅡA・B区からはそれらに加えて古代後期の土器も出土している。これまで高知平野における古代の土器研究は、資料の豊富な東部の物部川流域の諸遺跡において進められてきた。特に近年では下ノ坪遺跡の調査によって編年研究は飛躍的な進展が見られた。⁽¹⁾ 今次調査で得られたⅠA区、ⅡA・B区の資料は、これまで良好な資料を欠いていた高知平野西部の土器編年を組む上での基準資料となるものである。また東部との比較検討を通して西部の地域性を明らかにし、高知平野の古代史像を描く上で重要な位置を占めるものである。

2002年度報告において筆者は、ⅠA区の遺構出土土器の変遷について触れたが、今次調査資料を含めて再検討を行い、ここに改めて提示するものである。土器編年は池澤俊幸氏の行った下ノ坪遺跡の編年に準拠して進める。⁽¹⁾ 先ず遺構出土の一括性の高い資料を得ている古代前期を中心とした土器編年を試み、古代後期については黒色土器A類と緑釉陶器について述べることにする。

1 土器編年

I期 (Fig.56)

ⅠA区のSK1・8・12・14・15・25、ⅡA区のSX1、ⅡB区のSK2を挙げることができる。

供膳形態

土師器は杯A、杯B、皿A、高杯、蓋から成っている。成形手法の特徴として、回転台成形によるものと非回転台成形の2つの手法が見られる。前者は在地の土師器生産に広く認められる手法であり、後者は手捏成形、ヘラ削り、暗文を駆使した都城の特有の「畿内産土師器」⁽²⁾ と呼ばれるもので、搬入品と考えられる。後者は、杯(ⅠA区SK1-1・3、同SK6-132・133、同SK8-156、SK12-176・177、同SK14-187、ⅡB区SK2-167~169)、高杯(ⅠA区SK1-2・4、SK9-166)、蓋(ⅠA区SK6-136、ⅡA区SX1-107)の16点を数える。これらの土器は何れも赤茶色に発色し、すでに見たように立ち上がり内面は斜放射線、内底には螺旋状の暗文を施している。外底は、削りの見られるものやその上にヘラ磨きを施すものが認められる。

回転台成形によるものはⅠA区SK8-157・158、ⅡA区SX1-99~103である。157と101は赤彩が施されており、赤色を意識した「畿内産土師器」の模倣形態として位置付けることができよう。他の例も赤味を帯びた発色が目立つ。I期の杯皿は非回転台成形によるものと回転台成形によるものが相半ばしている。

須恵器は杯A、杯B、杯C、皿、蓋、高杯が見られ、杯Bが最も多い。総じて極めて丁寧な作りで、杯外底や蓋天井部外面はヘラ削りの上をナデ仕上げしている。蓋口縁部は下方に摘み出し、シャープな仕上がりのものが多い。杯B類の高台は、太くて「ハ」字状にしっかりと踏ん張るものが多く、畳付は凹状をなしている。杯C類はⅠA区SK15-196・197を挙げることができる。なお杯C類が出

ているSK15の一群は、I期に先行する可能性もある。

煮沸形態

全体の形状を示すものはないが、上胴部から口縁部形態から二つのタイプに分けることができる。胴部がやや球形を帯びるもの（I A区SK14-188、同SK15-194・195）と直線的な胴部を持つもの（I A区SK8-159、II A区SX1-114）である。前者は古墳時代以来の系譜に連なるタイプ、後者は古代前期の主流を占めるタイプであるが、両者ともに胎土は小礫・粗粒砂を含んでいる。

その他の形態

須恵器の鉄鉢（I A区SK25-215）、把手付き鉢（I A区SK8-163）、把手付きの壺か鉢（I A区SK25-216）などが見られる。

II期 (Fig.57)

I A区のSK9が該当する。須恵器杯、皿、蓋、土師器高杯の細片が見られる。須恵器皿は端部を摘み上げるタイプである（「b形態」）。⁽¹⁾ 同蓋は5点あるが外面のヘラ削りは施されていない。土師器高杯片は混入の可能性が考えられる。当該期の資料は少ない。

III期 (Fig.57)

I A区SK3、同SK5が該当する。

供膳形態

土師器は杯A・B、皿、高杯、蓋から成っており、成形は例外なく回転台成形であり、I期に見られた搬入品は認められない。発色は総じて黄茶色味を帯び、赤彩は見られない。主体を占めるのは杯A、次いで皿、杯Bの順で構成されている。各器種ともに内外面にヘラ磨きが施された丁寧な作りのものと、ナデ調整で仕上げ外底には粘土紐の単位が認められる例も比較的多く見られる。形態的には、杯Aにおいて底部脇が段状に屈曲し底部が僅かに凸状をなすタイプ（「D相」）⁽¹⁾が見られるようになる。口縁部形態では「c形態」⁽¹⁾が多くを占める。杯Bでは、I期の高台のように外方に「ハ」字状に踏ん張るものは見られず長方形状をなし（I A区SK5-91~93）、高台位置も外縁端部に貼付される。皿は、口径15~16cmのものが多く平均15.5cmを測る。口縁部は「b形態」とそのままおさめるものが見られるが後者が多い。

須恵器も土師器と同様な器種組成を示し、やはり杯Aが主流を占め、I期に多かった杯Bは極端に少なくなっている。底径の極端に小さなタイプ（I ASK3-45、同SK5-109・110）が見られるのも当該期の特徴である。皿は、口径15.2~20cm前後とばらつきが見られる。口縁部形態は「b形態」が多いが、I ASK5-101のように強く外傾するタイプも見られる。底部処理は杯・皿ともにヘラ切り後簡易なナデ調整でおさめ土師器同様に粘土紐の単位を留める例が多く認められる。

煮沸形態

土師器甕は、胴部が直線的に立ち上がるタイプに統一され、口縁部は「く」字状に明瞭な屈曲を示すようになる。胎土は、本文中（II A北区）で述べた胎土①類が主体となり定着している。（I A区SK5-100）。

IV期 (Fig.57)

I A区SK2・4を該当させることができる。III期とは大きな違いが見られる。先ず須恵器の供膳形態に占める比率が極端に減少する。主流をなす土師器杯・皿は小型が進行し、器壁がかなり薄く仕

I 期

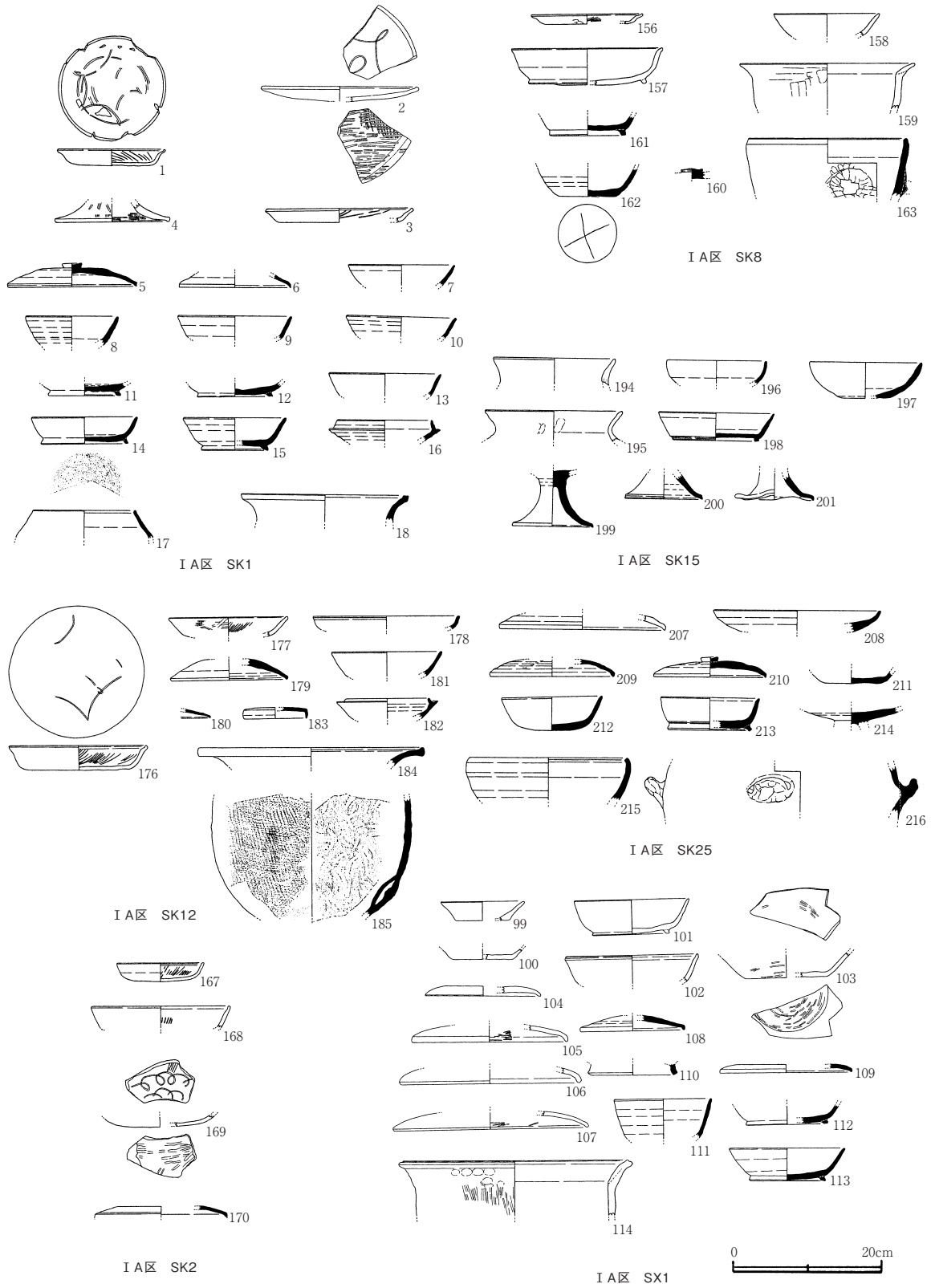
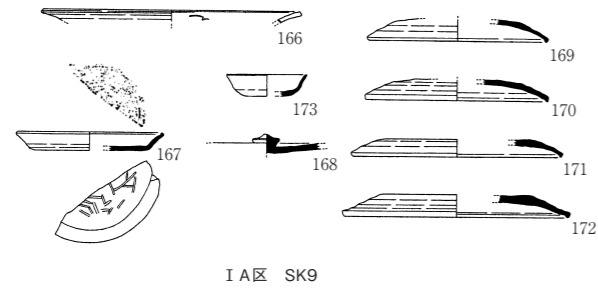
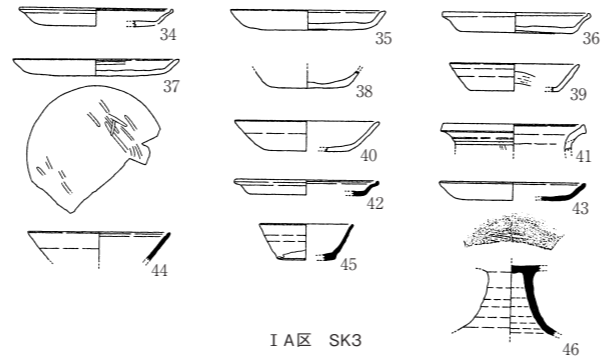


Fig.56 土器編年図 I 期

II 期



III 期



IV 期

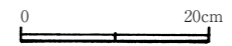
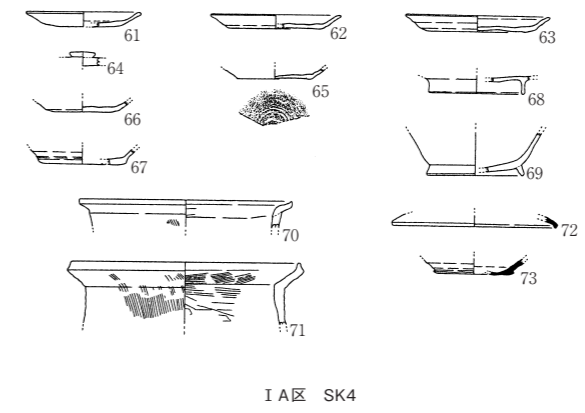
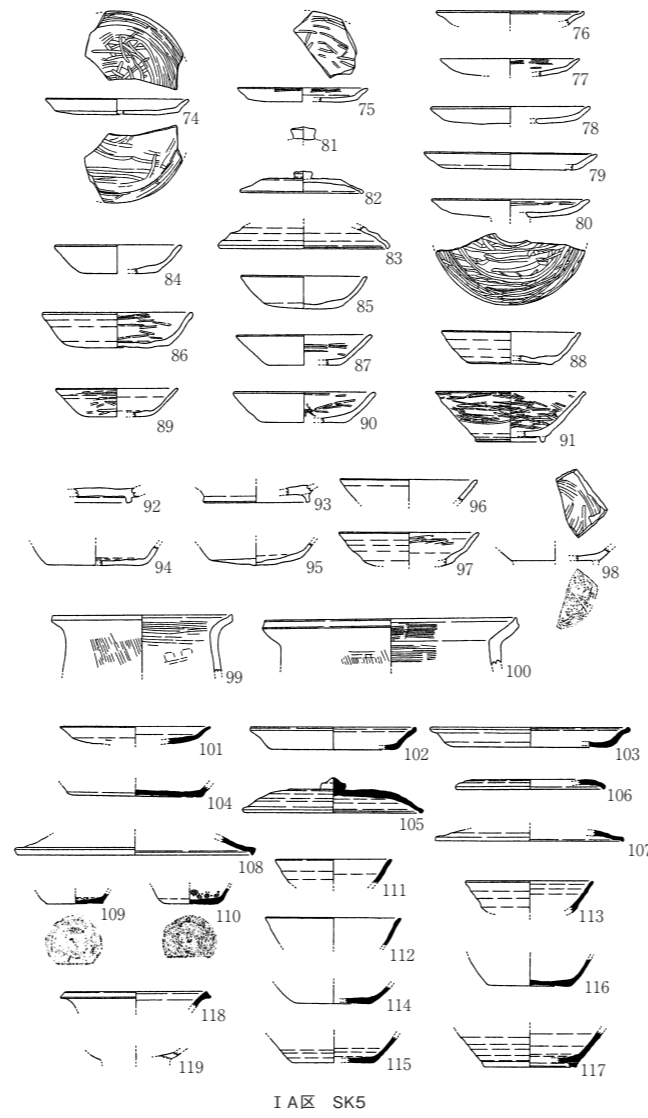
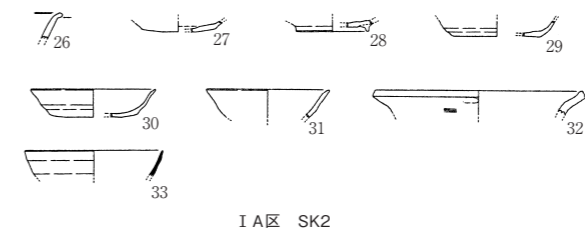


Fig.57 土器編年図 II~IV期

上げられている。外底の仕上げはⅢ期に認められたヘラ磨きは全く見られず、ナデ或いはヘラ削りである。杯は僅かに膨らみをもって立ち上がり口縁部は緩やかに外反するタイプが一般的となる。本文中Fig.8で示したⅡA区SD1の杯1～5やFig.9の遺物包含層出土の杯12～17・19・20などはこのタイプに属するものである。杯BのⅠA区SK2-28やSK4-69はⅢ期のSK5-91・117の系譜上にあるが高台がやや長く延びる。杯Aは小籠遺跡の杯AⅠ類に、杯Bは同じく杯BⅠ類に対応するものとして位置付けることができる。⁽³⁾皿は立ち上がりの外傾度がかなり強くなり、口径は平均13.5cmと小型化が顕著に現れる。SK4-68は足高高台皿であり当該期から登場する。須恵器は杯、蓋が極少量認められる。またこの時期に黒色土器A類碗が登場する(ⅠA区SK2-33)。煮沸形態は、Ⅲ期で確立したタイプが継続する。

2 高知平野東部との比較

以上、土坑出土の土器について大きくⅠ～Ⅳ期に編年した。これを東部の池澤編年に対比させると概ね以下ようになる。Ⅰ期はⅠ-3期に、Ⅱ期はⅠ-5期に、Ⅲ期はⅠ-6期に、Ⅳ期はⅡ-2期にそれぞれ併行関係が求められる。また池澤氏のⅠ-3～6期は、平城京のⅢ～Ⅵ期に対応関係が求められている。西部地域で明らかとなっている他の遺跡の成果も援用しながら、時期別に東部の代表的な遺跡出土資料との比較検討を行い高知平野西部地域の特徴を明らかにしたい。

(1) Ⅰ期

東部における当該期の良好な資料は、下ノ坪遺跡SK16・18、SX2を挙げる事ができる。基本的な器種組成は変わらず、色調の赤味指向も共通しているが、土師器供膳形態においてすべて回転台成形によっているところが異なる。今次調査の複数倍の土器量があるにもかかわらず「畿内産土師器」の出土は認められない。現在東部でこの種の出土例を求めれば、土佐国衙跡⁽⁴⁾と曾我遺跡⁽⁵⁾を挙げる事ができる。両遺跡とも各々杯と皿が1点ずつ確認されている。両遺跡の例は平城京Ⅰ期に属するものであり今次資料に先行する。平城京Ⅲ期に平行するものは、現在報告書作成の進行している田村遺跡から少数認められるのみである。このことから当該期における西分増井遺跡群の「畿内産土師器」が際立った存在であることが理解できる。しかも今次資料は、量が多いだけでなく器種が杯、皿、高杯、蓋と多器種に及んでいることにも特徴がある。

西部では、仁淀川右岸に位置する光永・岡ノ下遺跡⁽⁶⁾からも「畿内産土師器」が複数点出土している。特に皿2点が出土しているSX5からは、まとまった土師器、須恵器の供膳形態が出土しており時期的にも併行関係を求める事ができる。このことは当該期、高知平野西部においては、「畿内産土師器」が東部に較べてかなり卓越して搬入されていたことを示すものである。

この他、東部に見られない形態として、鉄鉢や把手付きの須恵器貯蔵形態などを挙げる事ができる。前者は光永・岡ノ下遺跡からも複数例出土している。やはり当該期に属するものである。また細かいことでは、須恵器蓋の摘み形態において、下ノ坪遺跡では池澤分類のA～E形態までが見られバリエーションが豊富なのに対して、B・E形態の2種類のみである。光永・岡ノ下遺跡においても同様である。当該期は、高知平野における「律令的土器様式」の成立期として位置付けられている⁽¹⁾が、その

開始期において西と東とでは、共通性とともにも明確な違いのあることが明らかとなった。

(2) II・III期

II期は資料が僅少であり、比較検討に耐え得るものではない。しかし須恵器蓋外面の削りの省略は、当該期と併行関係にある下ノ坪遺跡SK30にも認められる特徴であり共通点として捉えることはできよう。

III期の資料は下ノ坪遺跡SD40、SK27・33、小籠遺跡SK106などを挙げるができる。基本的な器種組成、高台の形態や貼付位置、皿形態の「C相」の顕在化など共通項目が多く認められる。この時期から須恵器・土師器双方に現れる器高の高い杯B（I A区SK5-91・117）、また底径の著しく小型化した須恵器杯A（I A区SK5-109・110）も共通項として捉えられる。前者においては下ノ坪遺跡SK27の615、小籠遺跡SK106の505、後者は下ノ坪遺跡SD40の917に対応関係を求めることができる。相違点としては須恵器皿や土師器杯の口縁部形態を挙げるができる。すなわち西部においては須恵器皿に口縁部「b形態」が顕著なのに対して東部では僅少な存在となっている。ところが土師器杯の口縁部形態は、逆に東部においては「b形態」が顕著で、西部は例外的な存在である。

またこの時期、西部においてはI期に見られた「畿内産土師器」の搬入は認められない。勿論生産もされていない。I期に様式としての搬入を見ながらも、全く在地に定着・浸透を見なかったことを示している。II・III期の西部における「畿内産土師器」の欠落は、高知平野の「律令的土器様式」の展開過程における平均化・均質化の進行として理解すべき現象であろう。ただ西部では、土佐の「律令的土器様式」の盛行期とされる段階（池澤編年I-4・5期）の資料が僅少である。東部と比較検討に耐え得る資料の充実を待って結論すべき課題である。現状においては見通しに留めておく。

(3) IV期

「律令的土器様式」が完全に払拭された段階である。当該期とIII期との間には大きな隔たりがあり、池澤編年のI-7期、II-1期がこの間隙を埋める。東部では小籠遺跡SK130・136に併行関係をもとめることができる。この段階、主体となる土師器杯皿は、すでに述べたように器壁の薄化、法量の小型化など共通点を指摘することができる。また杯と皿の組成比も3:1前後とほぼ共通している。新器種として黒色土器A類が登場することも同様の動きとして捉えることができる。差異としては、この段階、東部では供膳形態が土師器のみで構成されるのに対して西部では僅少なながらも須恵器が残っている。東部では「回転台土師器の一つの到達点」として器指数が大きく回転ナデ痕跡を明瞭にとどめ、分割成形による土師器杯A II類が杯の約5割を占めるが⁽³⁾、今次調査ではほとんど認められない。仁淀川右岸の西鴨地遺跡⁽⁷⁾においても同様の現象を示している。西部と東部では土師器杯の構成に違いのあることを示しているのかもしれない。

3 黒色土器A類

II A区を中心に黒色土器A類が図示し得たもので、19点出土している。一括性には乏しいが主として高台形態から分類を試み時期的な変遷を追ってみたい。

I類：断面三角形の小さな高台を持ち、器壁が4mm以下の薄いタイプ（Fig.8:9、Fig.10:59～61、

Fig.20:220)。口縁部ではFig.10の55と58が対応する。

Ⅱ類：断面の細い輪高台を持ち、器壁が4mm以下と薄い (Fig.14:91)

Ⅲ類：断面台形状の高台を持つ (Fig.18:159)

Ⅳ類：断面三角形状の高台を持ち高台径9cm前後、球形の底部を有する (Fig.10:66、Fig.18:157)。

Ⅴ類：しっかりした「ハ」字状に踏ん張る高台を持ち、高台径は7.5cm前後を測る。外面には例外なく赤彩が施されている。(Fig.8:8、Fig.9:62～65)

Ⅵ類：剥離により高台形状は不明であるが外底に糸切り痕を残す。高台径は7cm前後と推定 (Fig.18:158)

Ⅰ類は南四国の黒色土器A類土器出現期に広く認められるタイプで、多くの場合畿内からの搬入品である。今次出土例は、点数は少ないが胎土は4種類が認められる。明らかに畿内からの搬入品もあるが、それ以外の地域或いは在地生産の可能性を示すものも認められる。9は外面に化粧土が塗布されている。Ⅱ類はこれまでに出土例のないタイプである。Ⅲ・Ⅳ類は畿内系Ⅲ類⁽⁸⁾に属するもので在地製品である。159の外底には粘土紐の単位が見られる。Ⅴ類は、南四国では初めての出土である。赤彩塗布のこの種の黒色土器A類は徳島平野に広く見られることが知られている。胎土も共通しており、すべて徳島平野からの搬入品と考えられる⁽⁹⁾。Ⅵ類は在地産であるが、糸切り痕跡を留めるものは初めての出土である。

このように出土点数は少ないが、かなりのバリエーションが認められる。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類は、黒色土器の第2次拡散期の所産で、前述の土器編年Ⅳ期に併行関係を求めることができよう。Ⅴ類はやや後出する。Ⅵ類は高知平野における最終段階の黒色土器A類の可能性がある。高知平野の黒色土器A類は、先に述べたⅢ・Ⅳ類の後に、やや小型化したタイプがひびのきサウジ遺跡SE1⁽¹⁰⁾などに展開するが、それらには糸切り痕跡は認められない。Ⅵ類はその後に位置付けられることが考えられる。

4 緑釉

ⅡA区から9点、ⅡB区から14点、計23点が出土している。形態の識別できるものは19点で、皿が12点、椀が7点である。生産地で最も多いのは洛北、次いで洛西、篠、1点であるが東美濃産が見られる。時期別には大きく3時期に分けることができる。古相は、ⅡB区SD1下層出土の68とⅡA区出土の47、前者は平安京Ⅰ中～新に、後者は同Ⅰ新に比定できるものである。中相は平安京Ⅱ古・中段階に比定できるもので出土品の大半を占めている。新相は平安京Ⅱ新段階のもので3点(ⅡA区-136・137・139)見られる。馬場末遺跡の緑釉のピークは平安京Ⅱ古・中段階にあり、先述の土器編年のⅣ期に併行関係をもとめることができよう。

近隣の遺跡に類例を求めれば、西鴨地遺跡7点、光永・岡ノ下遺跡34点、高知市の尾立遺跡⁽¹¹⁾10点を挙げる事ができる。尾立遺跡はすべて平安京Ⅱ新に属しているが、他の2遺跡のピークは当遺跡に一致している。西鴨地遺跡は平安京Ⅲ期古のものまで出土が認められる。しかし、初現が平安京Ⅰ中～新に求められる例は高知平野西部においては今次調査が初めてである。

5 灰釉

Ⅱ A 区から6点出土している。1遺跡からの出土量としては南四国で最も多い。形態は椀3点(45・48・49)、皿3点(46・138・212)である。すべて9世紀後半代に属するもので緑釉のピークに一致している。高知平野西部からの灰釉の出土例は少なく、西鴨地遺跡から10世紀前半(折戸53号窯)の皿1点が出土しているのみである。

註

- (1) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として」『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会 1998 年
- (2) 林部均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第 39 卷第 3 号 考古学研究会 1992 年
- (3) 出原恵三「小籠遺跡出土の古代土器について」『小籠遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター 1996 年
- (4) 廣田佳久 他『土佐国衙発掘調査報告書第 5 集』高知県教育委員会 1984 年
廣田佳久 他『土佐国衙発掘調査報告書第 6 集』高知県教育委員会 1986 年
- (5) 高橋啓明 吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県野市町教育委員会 1989 年
- (6) 廣田佳久 伊藤強 田中涼子『光永・岡ノ下遺跡』高知県教育委員会 高知県埋蔵文化財センター 2000 年
- (7) 出原恵三 松村信博『西鴨地遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2001 年
- (8) 森隆「西日本の黒色土器生産(下)」『考古学研究』第 37 卷 2 号 1991 年
- (9) 久保脇美朗氏のご教示による。
- (10) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県土佐山田町教育委員会 1990 年
- (11) 江戸秀輝『尾立遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1995 年

	図版 No.	器種	硬・軟	時 期	編 年	産 地 (窯)
Ⅱ A 区	47	皿	硬	9C. 中頃の古段階	平安Ⅰ期新段階	洛北(幡多枝窯)
〃	50	〃	〃	9C. 中頃～後半	平安Ⅱ期古段階	〃(〃の周辺)
〃	134	〃	〃	9C. 後半	平安Ⅱ期古・中段階	篠窯
〃	136	〃	〃	10C. 初頭	平安Ⅱ期新段階	〃(小塩窯の一番新しい段階)
〃	137	椀	〃	10C. 第一四半期	〃	〃(黒岩窯)
〃	139	〃	〃	〃	〃	〃(前山窯)
〃	140	皿	〃	9C. 後半	平安Ⅱ期古・中段階	洛西(典型的な小塩窯)
〃	141	椀	〃	〃	〃	東美濃(猿投)
〃	142	〃	軟	9C. 中頃	平安Ⅱ期古段階	洛北
Ⅱ B 区	26	椀	硬	9C. 後半	〃 中段階	洛西
〃	27	皿	〃	9C. 後半	平安Ⅱ期古・中段階	篠窯
〃	28	〃	〃	〃	〃	〃
〃	68	〃	軟	9C. 前半	平安Ⅰ期中・新段階	洛北
〃	95	－	〃			
〃	96	皿	〃	9C. 第二四半期	平安Ⅰ期新～Ⅱ期古段階で古段階に重心	洛北
〃	97	椀	硬	9C. 後半	平安Ⅱ期中段階	洛西
〃	124	－	軟			
〃	126	椀	硬	9C. 後半	平安Ⅱ期中段階	洛西
〃	127	－	軟			
〃	128	皿	硬	9C. 中頃	平安Ⅱ期古段階	本山官山窯
〃	129	－	軟			
〃	130	皿	〃	9C. 中頃	平安Ⅱ期古段階	洛北(幡多枝窯)
〃	205	〃	硬			

表 2 馬場末遺跡出土緑釉陶器

第V章 まとめ

1 弥生時代から古墳時代

ⅡB区から弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居1棟(ST1)と土坑5基(SK9～13)を検出した。土坑の中でSK12・13は楕円形のプランを有し床面に炭化物層を形成している。西分増井遺跡ⅡB区で検出したST8や後述のⅡC区ST1の中央ピットと形状や炭化物の堆積状況が類似している。竪穴住居の中央ピットであった可能性がある。ⅡC・D区からは弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居1棟(ST1)と土坑1基(SK2)、弥生時代後期の土坑5基(SK3～5・8・9)、古墳時代初頭の土坑1基(SK7)を検出した。土坑の中でSK3～5・7は、ⅡB区SK9とともに溝状の平面プランを有している。弥生時代におけるこの種の土坑は、田村遺跡⁽¹⁾や北高田遺跡⁽²⁾、下ノ坪遺跡⁽³⁾で数多く確認されており掘立柱建物や竪穴住居に付属する場合が多い。弥生時代から古墳時代の竪穴住居は、これまで西分増井遺跡で多く確認されていたが、今次検出例は太用川を越えて西方への集落の広がりを示すものである。西分増井遺跡と馬場末遺跡は弥生時代においても一連の集落址として捉えなければならない。以後、両者をまとめて扱う場合は西分増井遺跡群と呼称する。

西分増井遺跡群の広がりを考える時に問題となるのは、ⅡB区と西分増井遺跡を隔てる太用川の存在である。西分増井遺跡1989年調査では、竪穴住居が太用川に切られた状況を示す例が見られ、今次ⅡB区の斜面堆積からは古代の土器のみの堆積が見られた。このような事実からすると現太用川は古代に開削され、弥生時代は存在しなかった可能性が強い。

遺物については、先ず青銅鏡片と鉛製品(飾金具)を挙げなければならない。南四国の鏡片出土例は、高知平野に集中している。東部では田村遺跡3点⁽⁴⁾、介良遺跡1点⁽⁵⁾、北地遺跡1点⁽⁶⁾の5点が出土している。西部では、今次例が1989年調査の西分増井遺跡ST5出土の極細片が1点⁽⁷⁾に次ぐ2例目であるが、本例の出土した直後に、対岸の西分増井遺跡ⅠA区からも鏡片が出土した。西部では現在3点を数える。東部の諸例は北地遺跡のものが前漢鏡である可能性があるが、他は後漢鏡である。今回の例は発色などから後漢鏡である可能性が高い。今回の例の特徴としては、ⅠA区出土例とともに穿孔が見られることである。東部の諸例には認められない。高知平野の西部と東部とで使用法が異なったのであろうか。興味深い現象である。鉛製品は、南四国では初めての出土である。本文で述べたように、本製品が高句麗の鞞飾金具ということになれば流入のルートやその背景など興味深いものがある。

次に土器を見ると、口縁部細片であるが河内産庄内甕がⅡB区から1点(Fig.53-68)、ⅡD区から1点(Fig.53-68)が出土している。西分増井遺跡からは1989年調査で5点、2002年のⅠA区で1点、同ⅠD区から1点、さらに1980年の馬場末遺跡からも1点が出土している。計10点の河内産庄内式土器が出土したことになる。一集落址からの出土点数としては南四国で最も多い。1989年調査では、竪穴住居内から庄内甕の他にも吉備型甕、東阿波型土器なども出土している⁽⁷⁾。今次調査での搬入品の増加は、西分増井遺跡群の物流集積地としての性格を示しているものと言えよう。この他、点数は僅かであるがⅠD区から弥生中期後葉の土器(Fig.53-76)が出土している。当該期の遺物は

これまで未検出であり、当遺跡群の空白の一時期を埋める土器である。なお今次調査で検出した遺構・遺物は、現在作製中の西分増井遺跡ⅠA・B・C・D区の報告書『西分増井遺跡Ⅱ』において再論する予定である。

2 古代

西分増井遺跡群で検出した古代の遺構は、土坑20基（ⅡA区：SX1を含む）、溝3条である。この内、土坑13基（ⅠA区：SK1～5・8・9・12・14・15・25、ⅡA区：SX1、ⅡB区：SK2）、溝3条（ⅡA区：SD1・2、ⅡB区：SD1）については出土土器から時期を明らかにすることができた。それらの変遷を示すと表4のようになる。年代表記は、畿内系土器や緑釉・灰釉などの各型式を目安にして、池澤編年や平城京、平安京の時期区分を援用したものである。空白期もあるが、おおよそ8世紀前葉から10世紀にかけて営まれた遺構群として捉えることができる。3つの調査区共にⅠ期から開始されるが、Ⅰ期の遺構はⅠA区に集中しており以後その数は減少しながらも断続的にⅣ期まで営まれる。これらの遺構の性格については、すでに『西分増井遺跡Ⅰ』⁽⁸⁾において述べた。すなわち各々埋土に多量の炭化物や灰、焼土を含むことなど埋没状況が同じであることから遺構の性格も共通している可能性が窺えるとして、祭祀的性格を持った遺構であることを指摘した。そして各遺構が比較的集中して存在することから祭祀的空間として捉えた。馬場末遺跡においては、ⅡA区：SX1に類似性を求めることができるものの、ⅡB区：SK2は規模、埋土などからしてこれらとは異なった性格の遺構としなければならない。従って今次調査結果からしてもⅠA区の土坑群は、Ⅰ期からⅣ期まで断続的に営まれた一種祭祀的な機能を帯びた空間として位置づけることができよう。

溝については、埋没時期は明確になし得ても、掘削時期を明らかにすることは難しい。しかしⅡA区：SD1・2とⅡB区：SD1とは規模、性格を全く異にするものである。前者は傾斜面に沿った落ち込み状の小規模な溝である。一方後者は、幅7.2mもの規模を有しており、大規模な区画溝、或いは濠というに相応しいものである。古代の溝では南四国最大の規模を有するものである。すでに述べてきたように床面や下層にはⅣ期の緑釉を含んでおり中層には10世紀以降の糸切り小皿が見られる。床面や埋土中には、Ⅰ～Ⅳ期の遺物も多量に含まれている。

また、先述のように太用川のⅡB区に東の南北直進部分は、古代において開削された可能性がある。その時期はⅡB区の斜面堆積遺物から見て9世紀後半以前、馬場末遺跡・西分増井遺跡の古代遺構の開始年代に遡る可能性も考えられる。現状においては推測の域を出ないが、古代に掘削された河川となれば、ⅡB区：SD1とも比較にならない大規模な人工河川として位置付けられ、古代の西分増井遺跡群の性格を象徴する存在となろう。

遺物の第一の特徴は、Ⅰ期に見られた「畿内産土師器」が際立って多いことである。この種の土師器は、畿内のみで生産されたのではなく、讃岐での生産も指摘されている⁽⁹⁾。今次資料の中にも讃岐産が含まれている可能性も考えられよう。しかしながらここでは、この種の土器の持つ政治的側面に着目したい⁽¹⁰⁾。すでに周知のように、この種の土器はどこからでも出土するものではなく都城＝権力との密接な関係のある遺跡から出土する。いわば都城と地方との政治的な距離を測る指標の一つとすることができると考えられる。当該期、国衙を擁していたと考えられている高知平野東部に僅少で、

西部に多いということは、律令期における高知平野の政治地図を考える上でも極めて興味深い現象と言えよう。当該期の遺跡の性格を明らかにすることはできないが、隣接する大寺廃寺の存在を視野に入れないわけにはいかない。大寺廃寺と一体化した都城との関連の強い政治的空間が形成されていたことも考えられよう。また当該期は、平城京Ⅲ期に併行するものであり、林部均氏によると「畿内産土師器」全体の出土量が減少傾向にあるなかで、太平洋沿岸、九州では出土の増加が見られるとの見解が示されている。

つぎに、時期は降るが、緑釉や灰釉、徳島平野産の搬入品も当遺跡の性格を考えるうえで重要であろう。灰釉は6点が見られたが、南四国での1遺跡からの出土数としては最も多い。緑釉も曾我遺跡の45点⁽⁸⁾、光永・岡ノ下遺跡の34点⁽⁹⁾に次ぐ点数である。9世紀前半代の製品も見られ、南四国における最も古い段階からの流入が認められる。徳島平野産の赤彩を施した黒色土器A類の椀は初めての出土である。このような現象は、西分増井遺跡群が9世紀後半～10世紀においても、他地域との交流物資や情報の集まる性格を持った遺跡であったことを示している。政治的性格とともに新川川流域に発達した津としての機能も合わせ持っていたであろう。今次調査においては、建物跡など遺跡の性格に迫ることのできる遺構の検出には至らなかったが、多種多様な遺物から古代の高知平野における西分増井遺跡群の位置がおぼろげながら見えはじめたと思う。西分増井遺跡群及び周辺部は、政治、経済の両側面から高知平野古代史の主要舞台であり、かつ高知平野の古代史解明の鍵を握る遺跡であることは明らかである。今後の調査と研究の進展により、そのステージの一つ一つの検証を通して具体像に迫ることができよう。

時期区分	I期			II期			III期			IV期		
池澤編年	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	I-7	II-1	II-2	II-3		
年代	～700年		750年			800年			850年		900年～	
I A区 SK1			■									
〃 SK2									■			
〃 SK3						■						
〃 SK4									■			
〃 SK5						■						
〃 SK8			■									
〃 SK9					■							
〃 SK12			■									
〃 SK14			■									
〃 SK15												
〃 SK25		■	■									
II A区 SD1									■	■		
〃 SD2									■	■	■	■
〃 SX1			■									
II B区 SD1									■	■	■	■
〃 SK2			■									

表4 馬場末遺跡(II A・II B区)・西分増井遺跡(I A区)主要な遺構の変遷

註

- (1) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群第5分冊』1986年
出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（山側進入灯設置区域）田村遺跡群・田中地区』
高知県教育委員会 1986年
- (2) 出原恵三、池澤俊幸、久家隆芳『北高田遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2000年
- (3) 小松大洋・池澤俊幸・出原恵三『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会 1998年
- (4) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第4分冊及び第5分冊 1986年
小野由香・森田尚宏『田村遺跡群発掘調査概報』(財)高知県埋蔵文化財センター 2002年
- (5) 坂本憲昭・田坂京子『介良遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 1997年
- (6) 高知県野市町教育委員会『北地遺跡発掘調査現地説明会資料』2003年
- (7) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会 1990年
- (8) 出原恵三・山本純代『西分増井遺跡Ⅰ』(財)高知県埋蔵文化財センター 2003年
- (9) 片桐孝浩「讃岐の土師器」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅴ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
- (7) 林部均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻3号考古学研究会 1992年 林氏は「全国で出土する畿内産土師器には、土器がもつ本来の用途（たとえば日常食生活の食器）としての意味があったのではなく、それ自身に付加された情報に大きな意味があったのではないだろうか。中略 畿内産土師器は、地方において、土器そのものに律令国家の制度や理念を象徴的に体現した存在であったと考える。」
- (8) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』高知県野市町教育委員会 1989年
- (9) 廣田佳久・伊藤強・田中涼子『光永・岡ノ下遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター 2000年

写真図版



調査前風景 西から (ⅡA・C・D区)



同上 北東から (ⅡB区)



II A北区トレンチ 北壁セクション(南から)



II A南区 北壁セクション(南から)



Ⅱ A北区 SD1 遺物出土状況 (北から)



同上 (東から)

PL 4



Ⅱ A 北区 完堀状況 (北西から)



同上 (東から)



II A南区 SD2 (西から)



同上 (南から)

PL 6



Ⅱ A南区 SD2 (東から)



Ⅱ A南区 完掘状況 (北から)



SX1 (103)



遺物包含層



遺物包含層 (202)



SD2



遺物包含層 (244)



SD2 (172)



ⅡB区 SD1 (北東から)



同上 (南から)



ⅡB区 SD1北壁セクション



同上 SD2 (北から)

PL 10



ⅡB区 SD4 (南東から)



同上 (南から)



ⅡB区 SK9 (西から)



同上 SK13 炭化物出土状況

PL 12



ⅡB区 北壁セクション(南から)



同上



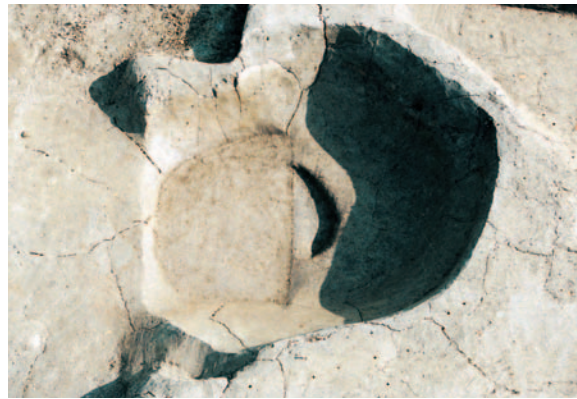
ⅡB区 完掘状況(上層・東から)



同上(下層・東から)



SK1



SK2



SK12



SK12



SK13



SK13



遺物包含層



SD2



須恵器杯 (66)



懸垂鏡 (215)



須恵器壺 (135)



土師器杯 (110)



須恵器壺 (80)



須恵器皿 (63) と丸瓦



P7 (187)



鉛製品 (216)



土器集中1



鈍 (228)



土器集中2



SK11



ⅡC区 上層完掘状況(北から)



ⅡC区 ST1(北から)



ⅡC区 ST1 (北から)



同上 (東から)



ⅡD区 SK1 (南から)



ⅡD区 SK4 遺物出土状況 (東から)



II D区 (西) 完掘状況 (南から)



II D区 (北東から)



ⅡD区(東)上層完掘状況(北から)



同上 下層完掘状況(北から)



ⅡD区(東)上層完掘状況(南から)



同上下層(南から)



II D区 (西) 土器集中1



同上 SK7 遺物出土状況



ⅡC区 ST1 (6)



ⅡD区 SK2



ⅡC区 (16)



ⅡD区 (47)



ⅡD区 (62)



ⅡD区 SK5



II A-5



II A-101



II A-103



II A-113



II A-115



II A-117



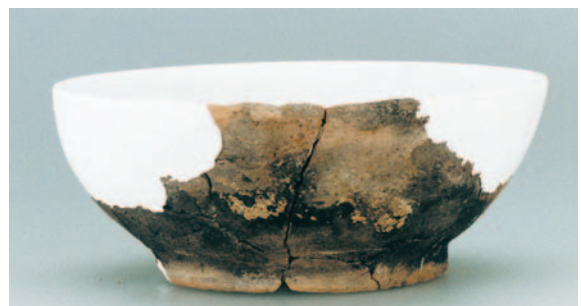
II A-118



II A-126



II A-145



II A-157



II A-149



II A-187



II A-196



II A-198



II A-204



II A-219



II A-223



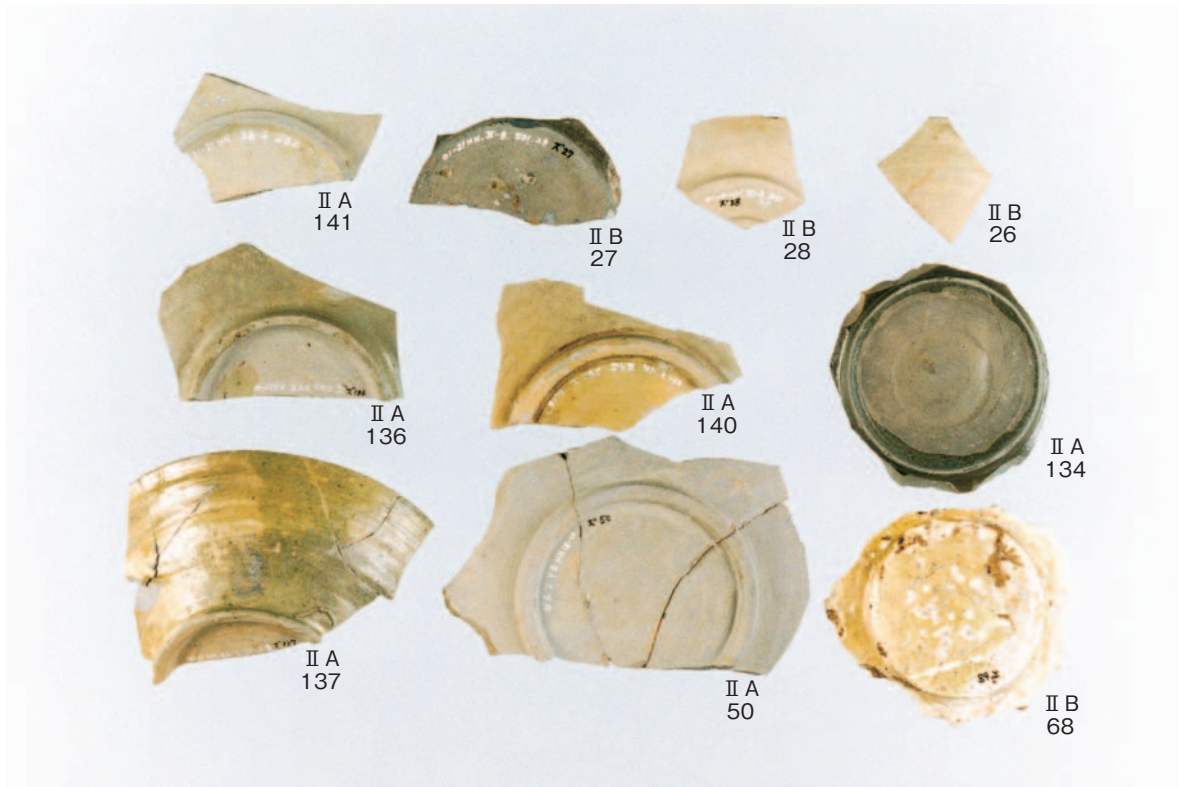
II A-227



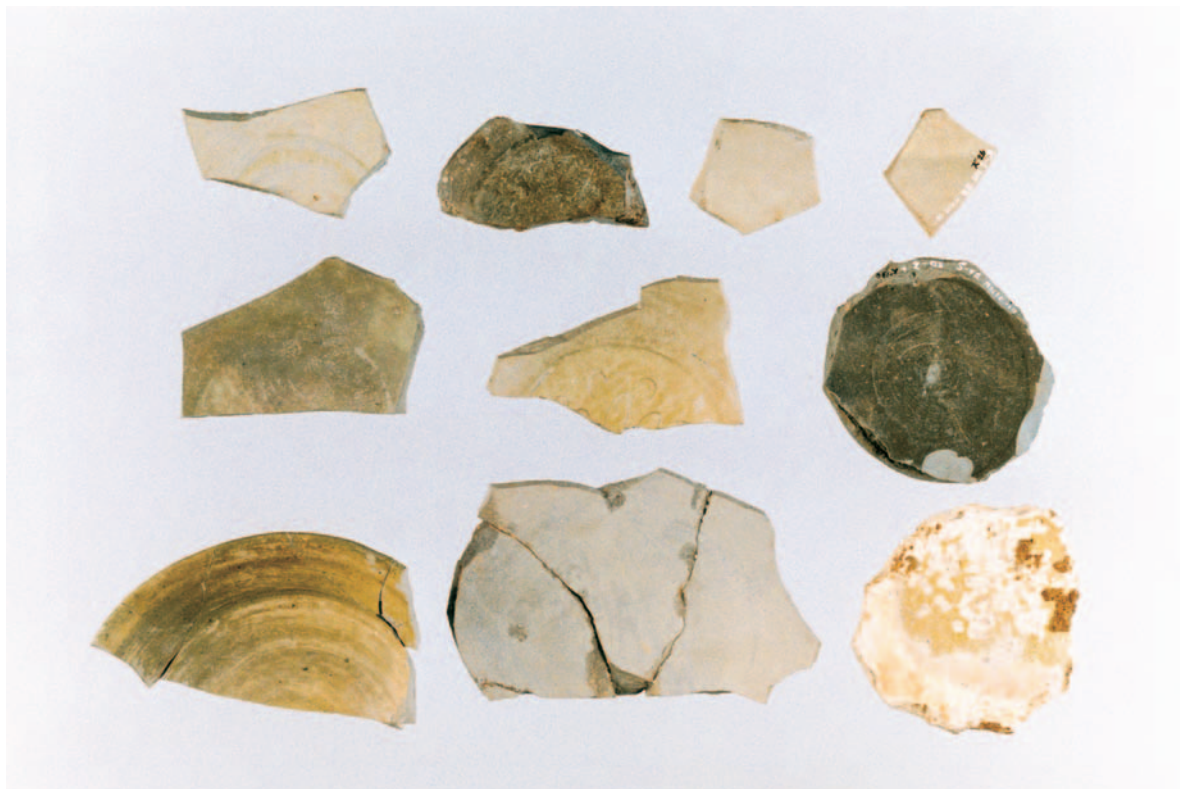
II B-64



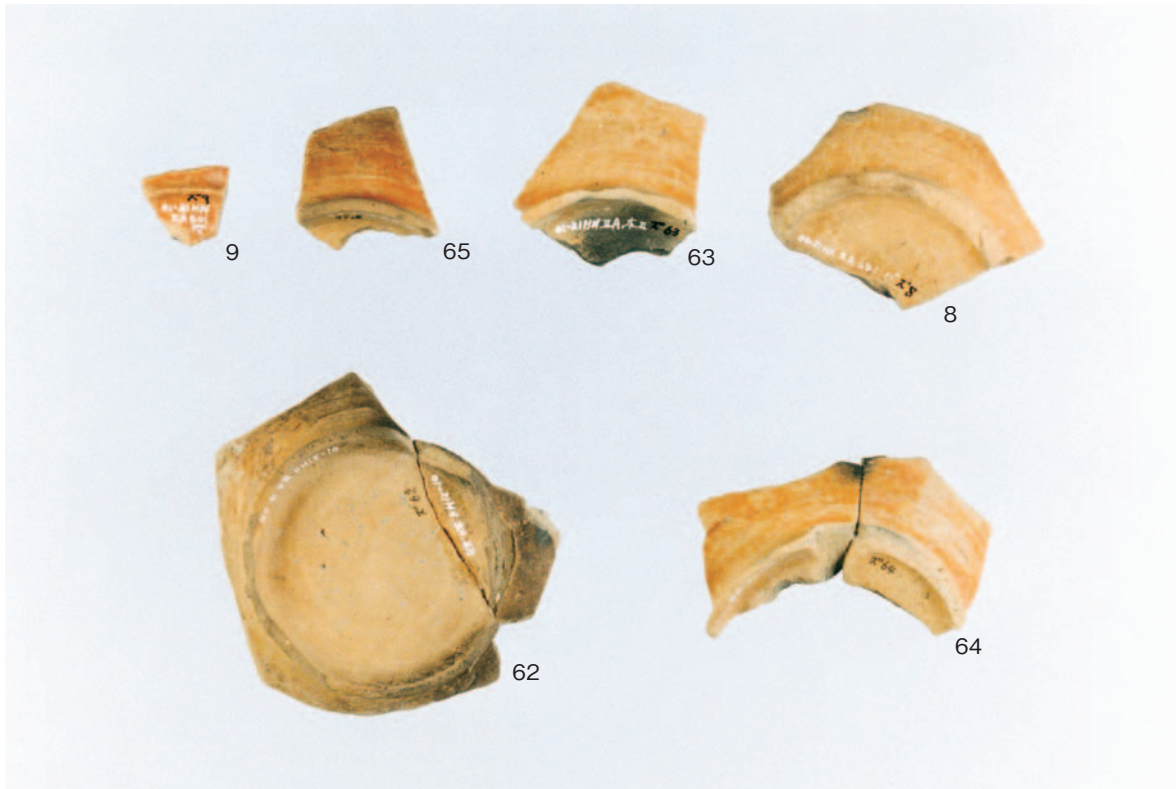
II B-78



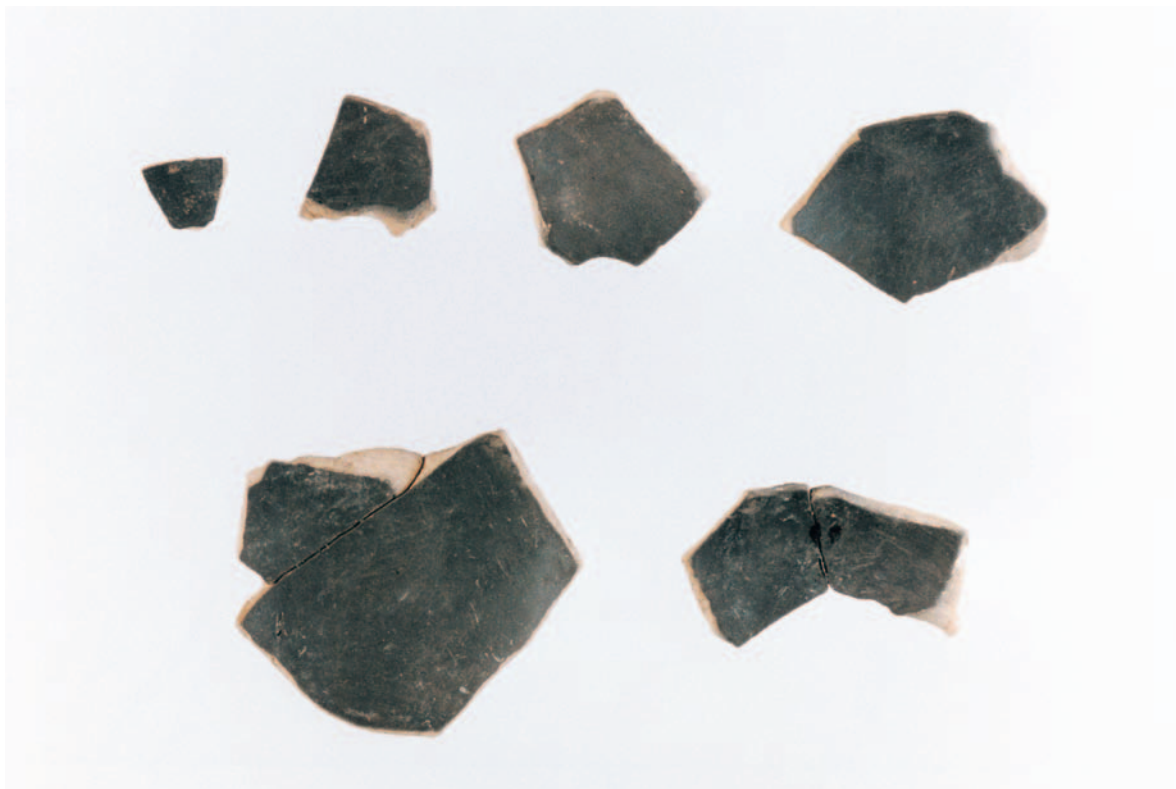
II A・B区 出土緑釉陶器



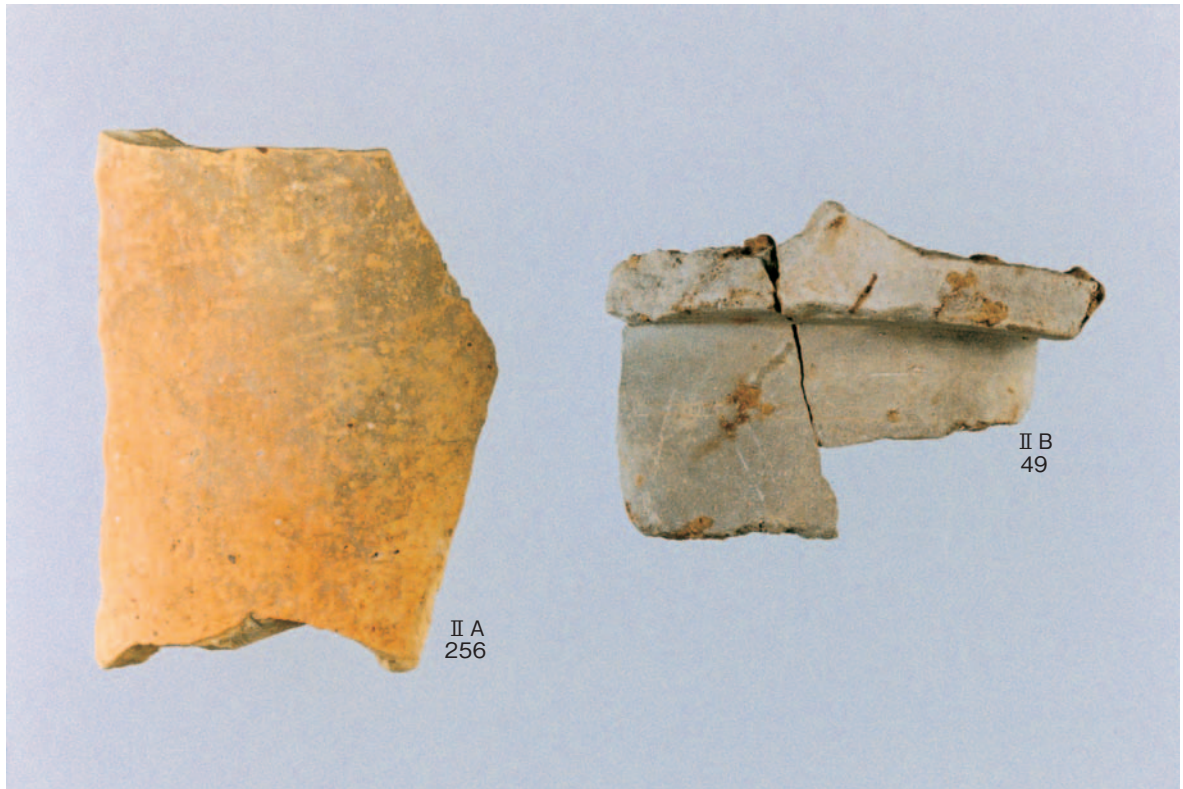
同上(裏面)



Ⅱ A区 出土黑色土器



同上(裏面)



II A・B区 出土瓦



同上(裏面)



II B-84



II B-110



II B-116



II B-167



II D-94



II D-94



II D-47



II D-47



II B-25



II B-80



II C-6



II C-8



II C-9



II C-16



II D-29



II D-43



II D-57



II D-58



II D-59



II D-83



懸垂鏡 (215)

鉛製品 (216)



同上 (裏面)

ふりがな	ばばすえいせき							
書名	馬場末遺跡							
副書名	新川川広域河川改修に伴う西分増井遺跡群Ⅱ区発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第84集							
編著者名	出原恵三							
編集期間	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原 1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2004年2月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばばすえ 馬場末 いせき 遺跡	高知県 吾川郡 春野町 西分	39383	340038	33° 29′ 50″	133° 29′ 30″	2001年 10月1日 ～ 2002年 7月30日	1560 ㎡	河川改修 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
馬場末遺跡	集落跡	弥生時代から古 代		(弥生時代) 竪穴住居 土坑 (古代) 溝		弥生土器 土師器 須恵器 中国鏡片 鉛製品	遺跡の位置は 世界標準座標で 表記	

馬場末遺跡

2004年2月

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
発行 高知県南国市篠原 1437-1
電話 088-864-0671
印刷 共和印刷株式会社

